

財團  
法人 八尾市文化財調査研究会報告58

- I 跡部遺跡（第10次調査）
- II 跡部遺跡（第11次調査）
- III 跡部遺跡（第15次調査）
- IV 跡部遺跡（第16次調査）
- V 跡部遺跡（第17次調査）
- VI 跡部遺跡（第18次調査）
- VII 太子堂遺跡（第3次調査）
- VIII 太子堂遺跡（第6次調査）

1997年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團  
法人八尾市文化財調査研究会報告58

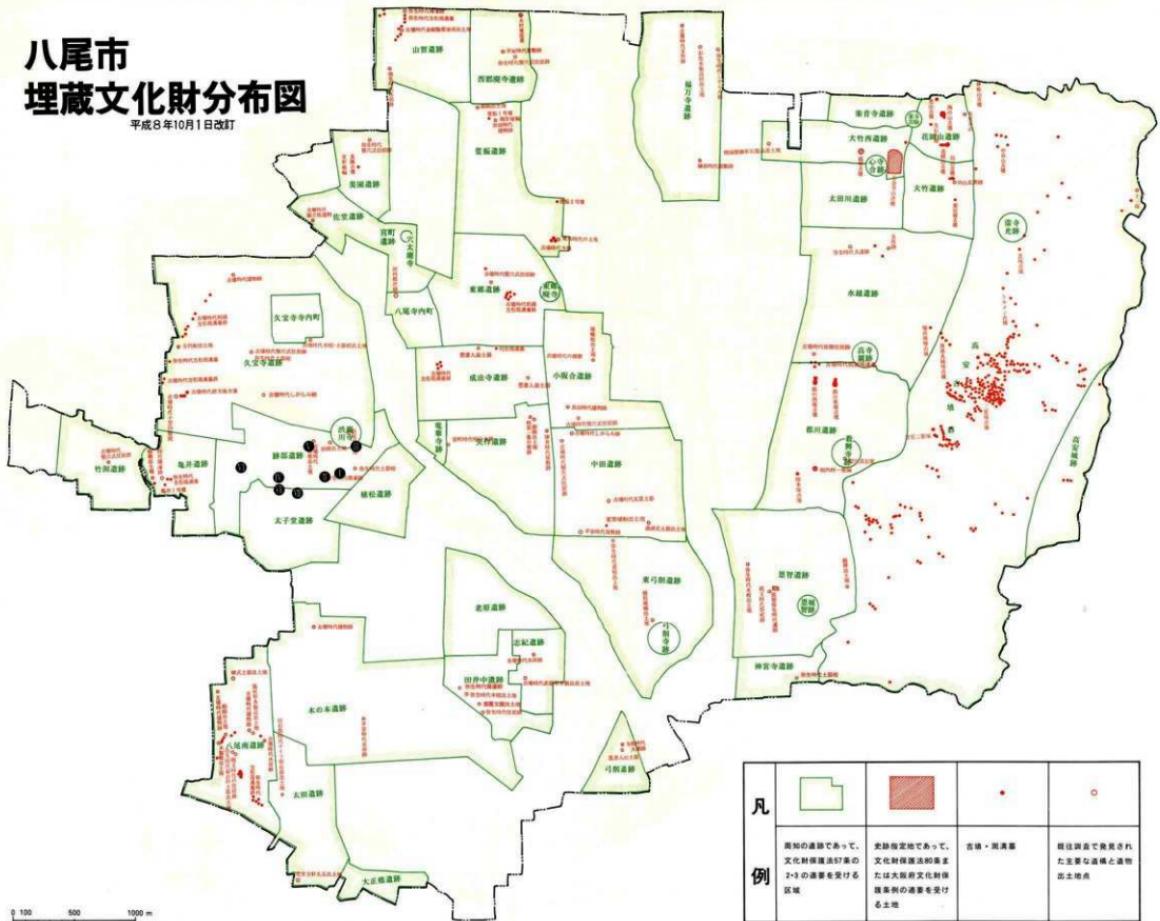
- I 跡部遺跡（第10次調査）
- II 跡部遺跡（第11次調査）
- III 跡部遺跡（第15次調査）
- IV 跡部遺跡（第16次調査）
- V 跡部遺跡（第17次調査）
- VI 跡部遺跡（第18次調査）
- VII 太子堂遺跡（第3次調査）
- VIII 太子堂遺跡（第6次調査）

1997年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



## はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、跡部遺跡・太子堂遺跡の遺物整理が完了し、報告する運びとなりました。これらの遺跡は、八尾市の西部の沖積地に位置する弥生時代から近世に至る複合遺跡であります。跡部遺跡は、弥生時代後期の銅鐸を埋納した土壙が検出され注目されました。今回の跡部遺跡の調査はその周辺に位置する公共施設に伴う調査の成果であります。また太子堂遺跡は奈良時代の遺物が出土しており、当時の生活を知る貴重な資料が発見されています。

本書は学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

# 序

- 1 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査の成果を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成9年3月をもって終了した。
- 1 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  - 1 本書に収録した各報告の文責は、Iが西村公助、II・IV・V・VIIが成海佳子、IIIが岡田清一、VIが原田昌則、VIIIが藤田道子（現大阪府教育委員会文化財保護課技師）・成海で全体の構成・編集は成海が行った。
  - 1 本書掲載の地図は、八尾市役所発行の2,500分の1（昭和61年8月）八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改正）をもとに作成した。
  - 1 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面（T.P.+）である。
  - 1 本書で用いた方位は磁北及び国上座標の真北である。
  - 1 遺構は下記の略号で示した。

堅穴住居	- S I	掘立柱建物	- S B	井戸	- S E	土坑（土壤）	- S K	溝	- S D		
小穴	・	柱穴	- S P	落込み	- S O	土器集積	- S W	自然河川	- N R	不明遺構	- S X
  - 1 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器	・	上師器	・	瓦器	・	埴輪	- 白	須恵器	・	陶磁器	- 黒	石製品	・	木製品	・	斜線
------	---	-----	---	----	---	----	-----	-----	---	-----	-----	-----	---	-----	---	----
  - 1 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成しており、市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目 次

## はしがき

## 序

## 八尾市埋蔵文化財分布図

I	跡部遺跡（第10次調査）	1
II	跡部遺跡（第11次調査）	15
III	跡部遺跡（第15次調査）	49
IV	跡部遺跡（第16次調査）	65
V	跡部遺跡（第17次調査）	71
VI	跡部遺跡（第18次調査）	77
VII	太子堂遺跡（第3次調査）	83
VIII	太子堂遺跡（第6次調査）	99

## I 跡部遺跡第10次調査(AT92-10)

## 例　　言

- 1 本書は大阪府八尾市春日町3丁目地内で実施した公共下水道平成5年度第98工区に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第10次調査（AT92-10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第157号 平成5年1月21日付）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は平成5年1月19日から平成5年2月15日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約28m<sup>2</sup>を測る。なお調査には能勢尚樹、八田雅美、千賀幸二が参加した。
- 1 本書作成に関わる業務は、遺物復元—西村（公）・中西明美・西村和子、遺物実測—西村（公）、図面レイアウト・トレース—西村（公）・中西・西村（和）、遺物写真撮影—西村（公）が行った。
- 1 本書の執筆および編集は西村（公）が行った。
- 1 本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』による。

## 本　文　目　次

1 はじめに.....	1
2 調査概要	
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 基本層序.....	4
3) 検出遺構と出土遺物.....	6
3まとめ.....	10

## I 跡部遺跡第10次調査 (AT92-10)

### 1 はじめに

跡部遺跡は大阪府八尾市の西部に位置しており、現在の行政区画では跡部北の町1・2丁目、春日町1・3・4丁目、太子堂1・2丁目、跡部本町1～3丁目、渋川町4～7丁目、安中町3丁目一帯の東西約1.5km、南北約1.1kmの範囲にある。

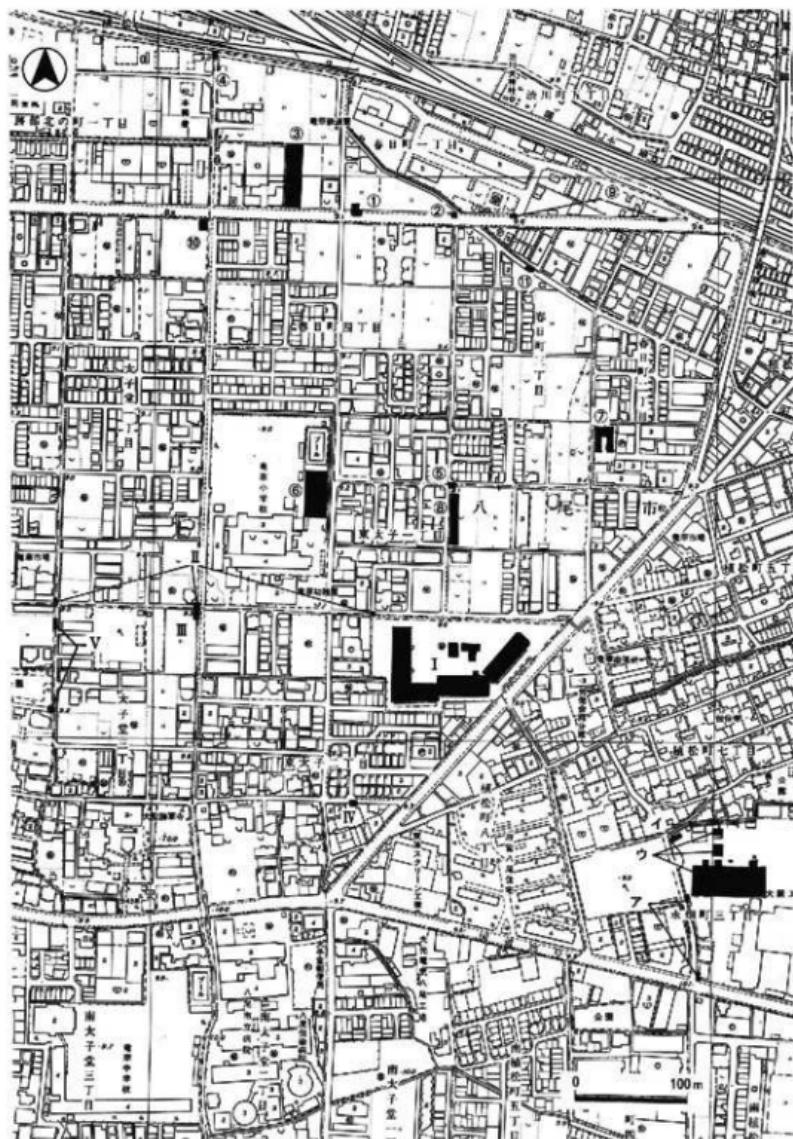
当遺跡内では、昭和56年11月に八尾市教育委員会が春日町1丁目57で発掘調査を実施したのをはじめ、この調査以降、当遺跡内では共同住宅建設や公共下水道等の工事に伴う発掘調査が多数行なわれるようになった。これらの工事に伴う発掘調査を平成7年3月までに、当調査研究会が計18件行っている（第1表と第1図参照）。また当遺跡内では八尾市教育委員会も数件の調査を行っている。それらの発掘調査の結果、弥生時代前期から近代に至る遺構および遺物が検出されている。特に今回の調査地の近辺では、当研究会第12次調査地（第1図の⑦）で弥生時代中期の墓域があることが判明しており、また当研究会第5次調査地（第1図の①）で弥生時代中期に作られ後期以前に埋納された銅鐸が発見されているなど遺跡の実体が解明されつつある現状である。

このような情勢下、八尾市から春日町3丁目地内において下水道工事の計画書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。当文化財課では、計画地が跡部遺跡の遺跡範囲内にあり、工事計画地の近辺での調査で、弥生時代前期から古墳時代前期の遺構を検出していることから、同文化財課は発掘調査が必要であると判断し、その旨を事業者に通知した。その結果、掘削工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に発掘調査を実施することが事業者と同文化財課の両者で合意された。

上記のことにより、当調査研究会へ発掘調査が依頼されたものである。今回の調査地は、同遺跡内で平成3年度に当調査研究会が実施した第6次調査地の南約200mにあり、行政区画では八尾市春日町3丁目地内にある。



写真1 調査地周辺（北から）



第1図 調査地周辺図

## 2 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

下水道工事予定地に東西6.4m×南北4.4mの調査区を設定した。調査に際しては、現地表下1.5mまでの土層を機械掘削し、以下の各層は人力による掘削を行ない、遺構および遺物の検出に努めた。

調査の結果、第5層上面（第1面）では弥生時代後期後半の溝1条（SD-101）を、その下の第6層上面（第2面）では弥生時代後期前半の溝1条（SD-201）を、2層下の第8層上面（第3面）では弥生時代中期後半の溝1条（SD-301）を、さらにその下の第11層上面（第4面）では弥生時代前期後半から中期初頭にかけての溝1条（SD-401）を検出した。

遺跡名	調査位置	略号	調査地	年度	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間
跡部		AT82-01	跡部本町1丁目3番地	S57	貯蔵建設	50	S671001～1005
跡部		AT83-02	跡部本町2丁目46	S58	社員寮建設	500	S690301～0331
跡部		AT87-03	安中町3丁目26 19-5	S62	共同住宅	1150	S620406～0518
跡部		AT88-04	跡部本町1丁目4-1 4-2	S63	共同住宅	300	S631001～1022
跡部	①	AT89-05	春日町1丁目45-1	H01	公共下水道	100	H011017～1130
跡部	②	AT91-06	春日町1丁目地内	H03	公共下水道	16	H030930～1004
跡部	③	AT92-07	春日町1丁目47, 48	H04	店舗付共同住宅建設	220	H040709～0810
跡部		AT92-08	跡部本町4丁目4-20	H04	鉄塔新設	100	H040820～0905
跡部	④	AT92-09	春日町1丁目地内	H04	公共下水道6工区	20	H041007～1013
跡部	⑤	AT92-10	春日町3丁目地内	H04	公共下水道9工区	28	H050129～0215
跡部	⑥	AT93-11	東太子1丁目106	H05	認華小学校	1215	H050517～0714
跡部	⑦	AT93-12	春日町2丁目35-1, 35-2	H05	共同住宅	130	H050517～0625
跡部	⑧	AT93-13	東太子1丁目16番地	H05	共同住宅	180	H050628～0730
跡部		AT93-14	跡部北の町1丁目地内	H05	公共下水道12工区	38	H051119～1210
跡部	⑨	AT93-15	春日町1丁目2～44番地先	H05	公共下水道19工区	29.1	H051213～H060218
跡部	⑩	AT94-16	跡部本町1丁目地内	H06	公共下水道5-111	43.52	H060913～1013
跡部		AT94-17	太子堂1丁目地内	H06	公共下水道5-116	43.32	H060918～1108
跡部		AT94-18	跡部本町3丁目地内	H06	公共下水道6-1工区	40	H060922～1027
跡部	⑪	AT95-19	春日町3丁目地内	H07	公共下水道6-22工区	17	H070621～0810
植松	ア	UM92-01	永畠町3丁目地内	H04	公共下水道第26工区	40.32	H050118～0202
植松	イ	UM93-02	永畠町3丁目1号地	H05	共同住宅（その1）	134	H050419～0719
植松	ウ	UM93-03	永畠町3丁目1号地	H05	共同住宅（その2）	900	H060210～0331
太子堂	I	TS83-01	東太子2丁目1他	S58	共同住宅建設	3393	S580906～1027
太子堂	II	TS90-02	太子堂2・3丁目地内	H02	公共下水道	110	H021127～H030215
太子堂		TS91-03	太子堂2丁目地内	H03	公共下水道	56	H040201～0229
太子堂	III	TS92-04	東太子2丁目地内	H04	公共下水道第34工区	37	H050308～0406
太子堂	IV	TS93-05	東太子2丁目地内	H05	公共下水道第6工区	29	H051130～1203
太子堂	V	TS94-06	太子堂3丁目地内	H06	公共下水道6-8工区	62.72	H051124～H070113

第1表 跡部遺跡・植松遺跡・太子堂遺跡発掘調査一覧表

## 2) 基本層序

- 第 0 層 盛土。層厚1.2m。上面は T.P.+9.6m。
- 第 0'層 旧耕土。層厚1.3m。
- 第 1 層 灰色 (5Y 4/1) 粘土。層厚0.1m。
- 第 2 層 暗灰色 (N 3/1) 粘土。層厚0.2m。
- 第 3 层 灰色 (N 4/1) 細砂。層厚0.15m。
- 第 3'層 微砂。層厚0.1m。
- 第 4 層 暗緑灰色 (10G 4/1) シルト混粘土。層厚0.15m。層内には古墳時代 [庄内・布留式期] の遺物含む。
- 第 4'層 粘土が主で若干シルトを含む。層厚0.15m。
- 第 5 層 緑黒色 (5G 2/1) 粘土。層厚0.25m。弥生時代後期後半遺構検出面（第1面）で、上面は現地表下約2.4m [T.P.+7.2m]。
- 第 6 層 暗青灰色 (5BG 4/1) シルト混粘土。層厚0.15m。弥生時代後期前半遺構検出面（第2面）で、上面は現地表下約2.6m [T.P.+7.0m]。
- 第 7 層 青灰色 (5BG 4/1) シルト。層厚0.2m。
- 第 8 層 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。層厚0.15m。弥生時代中期後半遺構検出面（第3面）で、上面は現地表下約2.9m [T.P.+6.7m]。
- 第 8'層 暗青灰色 (5B 3/1) 粘土 [青灰色 (10BG 5/1) シルト混粘土のブロック混入]。層厚0.1m。
- 第 9 層 黒色 (N 2/1) 粘土。層厚0.25m。
- 第10層 黒色 (N 1.5/1) 粘土。層厚0.15m。
- 第11層 青黒色 (5BG 1.7/1) 細砂混粘土。層厚0.3m。弥生時代前期末から中期初頭遺構検出面（第4面）で、上面は現地表下約3.5m [T.P.+6.1m]。
- 第12層 青灰色 (5B 6/1) シルト混粘土。層厚0.2m。
- 第13層 暗青灰色 (5B 3/1) 粘土。層厚0.6m。
- 第14層 黒色 (10Y 2/1) 粘土。層厚1.0m。
- 第15層 青黒色 (5BG 2/1) 粘土。層厚0.3m以上。

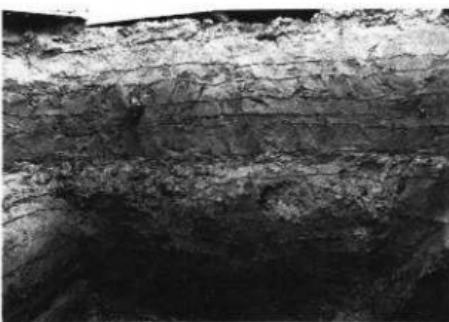
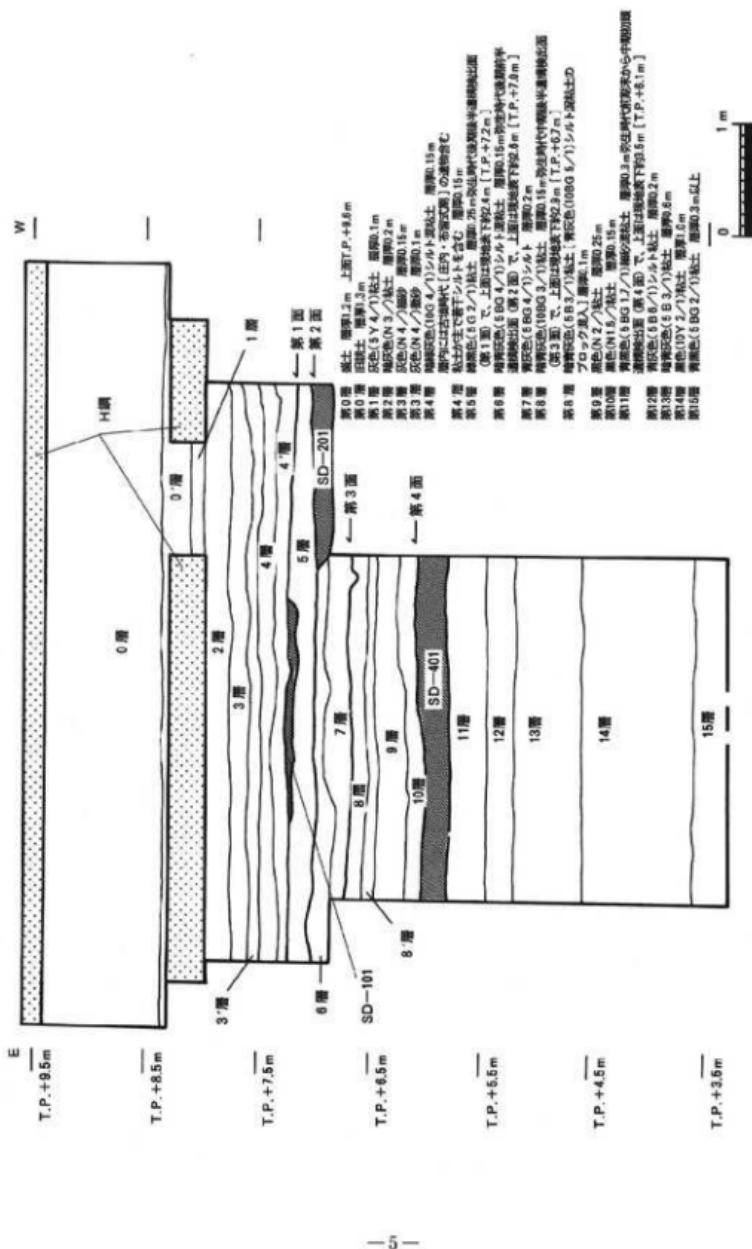
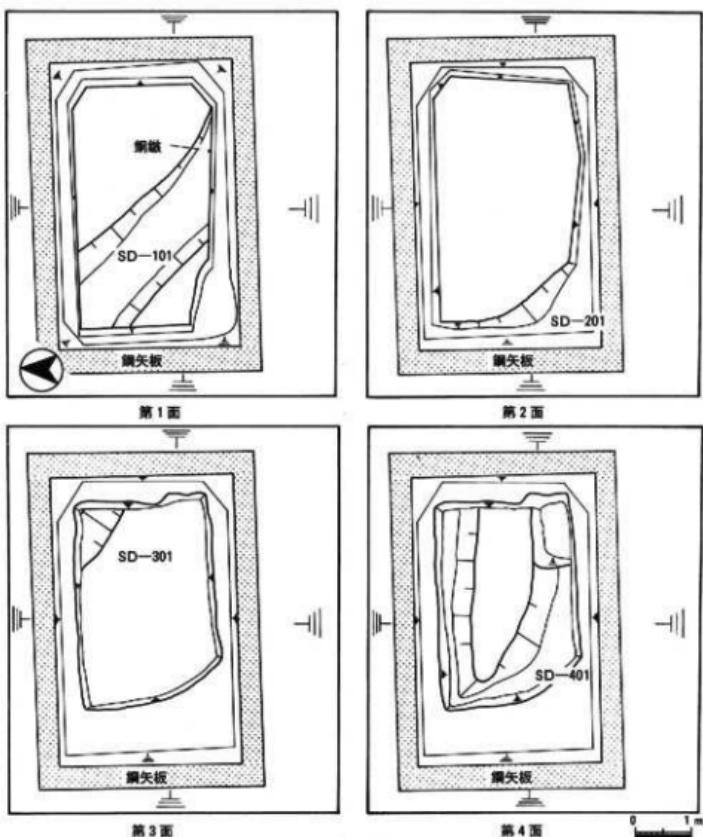


写真2 南壁面（北から）





第3図 検出遺構平面図

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 第1面

現地表下2.4mに存在する第5層上面(T.P.+7.2m)で、弥生時代後期後半の遺構【溝1条(SD-101)】を検出した。

#### SD-101

調査地のほぼ中央で検出した溝で、南東から北西方向に伸びる。幅1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色(N6/)シルトである。

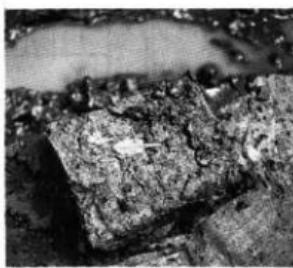


写真3 SD-101銅劍出土状況(北から)

内部からは銅鏡（1）〔有茎鏡 幅1.5cm・長さ4.4cm・厚み0.3cm〕および弥生時代後期後半の高坏（2）の破片が出土した。（2）は口縁部が外反し内外面ともにヘラミガキを施す。

#### 第2面

第1面から0.2m下層に存在する第6層上面（T.P.+7.0m）で弥生時代後期前半の遺構〔溝1条（SD-201）〕を検出した。

#### SD-201

調査地の西側で検出した溝で、南東から北西方向に伸びる。幅1.2m以上、深さ0.2m以上を測る。埋土は暗灰色（N 3/）細砂混粘土である。内部からは弥生時代後期前半の高坏（3）、壺（4）、甕（5）が出土した。（3）は上外方に口縁部が立ち上がる。河内V-2様式に比定される。  
註5

#### 第3面

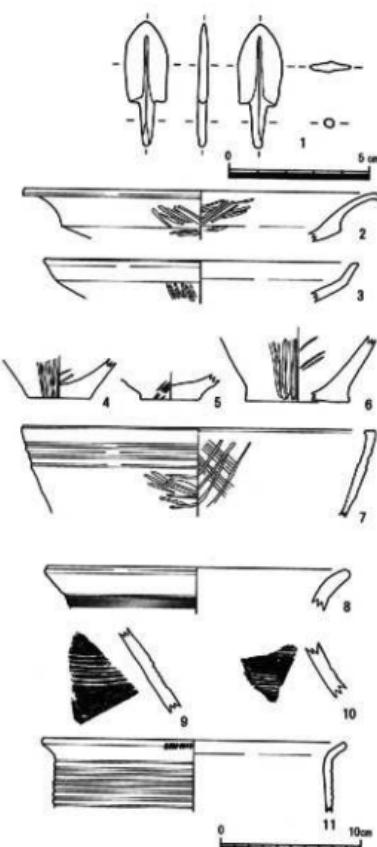
第2面から0.3m下層に存在する第8層上面（T.P.+6.7m）で、弥生時代中期後半の遺構〔溝1条（SD-301）〕を検出した。

#### SD-301

調査地の北東側で検出した溝で、南東から北西方向に伸びる。幅1.3m以上、深さ0.8m以上を測る。埋土は上からa暗青灰色（10BG 4/1）シルト混粘土、b暗緑灰色（10G 4/1）シルト混粘土、c青灰色（10BG 6/1）シルト、d暗緑灰色（10G 4/1）粘土、e青灰色（10BG 5/1）細砂混シルトである。内部からは弥生時代中期後半の壺（6）、鉢（7）が出土した。（7）は外面に凹線を施す。河内IV-2様式に比定される。  
註5

#### 第4面

第3面から0.6m下層に存在する第11層上面（T.P.+6.1m）で弥生時代前期末から中期初頭の遺構〔溝1条（SD-401）〕を検出した。



第4図 SD-101(1・2)、SD-201(3～5)、SD-301(6・7)、SD-401(8～11) 出土遺物実測図

調査地の北側と南側で検出した。南東から北西方向に伸びる溝と東から西方向に伸びる溝が調査地内の北西で合流する。幅0.9m以上、深さ0.3m以上を測る。埋土は暗灰色（N 3/）シルト混粘土である。内部からは弥生時代前期末から中期初頭にかけての壺（8～10）、甕（11）が出土している。（8）は短頸の広口壺で、頸部外面に櫛描直線文を施す。河内II-2様式<sup>註5</sup>以前のものと思われる。（9・10）は体部外面にヘラ描沈線を施す前期の壺で、（11）は口縁端面にキザミ目、体部に沈線を施す前期の甕である。（11）の沈線は多条で、前期の中でも新しい様相をもつものであるといえる。河内I-4様式に比定できる。

#### 遺構に伴わない出土遺物

第5層内からは弥生時代後期後半の高坏（12・13）が、第6層内からは弥生時代後期前半の壺（14・15）、高坏（16）が、第7層内からは弥生時代中期後半の高坏（17・18）、甕（19）が、第8層内からは弥生時代中期中頃～後半の壺（20・21）、高坏（22）が、第9層内からは弥生時代前期末から中期初頭の壺（23・24）、甕（25）が、第10層内からは弥生時代前期の甕（26）が出土している。

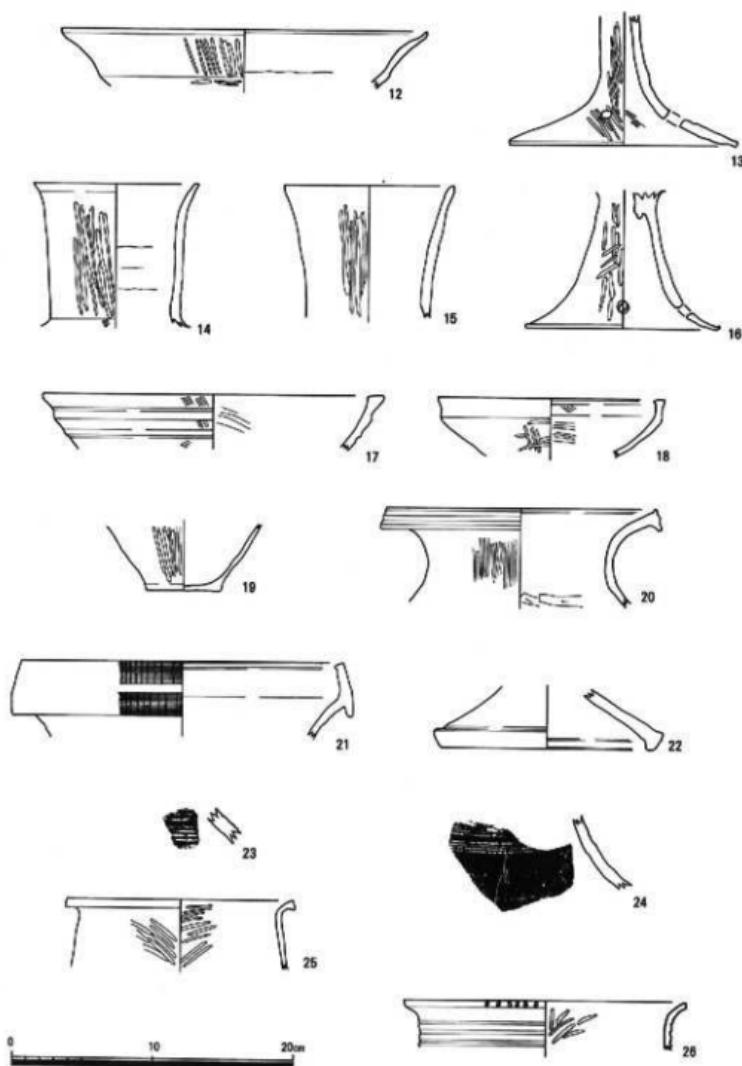
（12）は坏部が丸みをもち口縁部が外反する後期後半のものと思われ、河内VI-1様式<sup>註5</sup>に比定できる。（14）は頸部と体部の境が明瞭で、ヘラミガキを施す。河内V-2様式<sup>註5</sup>に比定される。（17）は外面に凹線文を施す。（18）は坏部から屈曲し直口した口縁をもつ。（17・18）は中期後半の様相を示しており、河内IV-4様式<sup>註5</sup>と思われる。（20）は口縁端部に凹線を、（21）は簾状文と刺突文を施し、河内IV-2様式頃以前のものと思われる。（23）はヘラ描の沈線を、（24）は櫛描の直線文を施す。前期末から中期初頭頃のものである。（26）は口縁端面のキザミ目を、体部に沈線を施す。河内I-4様式<sup>註5</sup>に比定できる。



写真4 摂剤状況（北西から）



写真5 調査状況（北から）



第5図 第5層(12・13) 第6層(14~16) 第7層(17~19) 第8層(20~22) 第9層(23~25)  
第10層(26) 出土遺物実測図

### 3 まとめ

今回の調査により弥生時代前期末から中期初頭、中期後半、後期前半、後期後半の遺構が存在していることが判明し、弥生時代の全般を通してこの地で生活している結果が得られた。

第4面で検出した溝（SD-401）は、多条の沈線を施している甕（11）と中期の様相をもつ櫛状直線文を施す甕（8）が出土していることから、弥生時代前期末から中期初頭まで機能していたと推定される。

SD-401が埋没した後、10層～8層が堆積し、8層の上面（第3面）から切り込んでいる中期後半の溝（SD-301）が検出された。SD-301は、幅、深さ等の詳細は不明であるが、溝の南唇の形状が、南東から北西方向に伸びていることがわかった。今回の調査地の南に隣接している第13次調査地（第1図の⑧）で、同時期の同じ方向に伸びる溝を3条検出している。  
<sup>註2</sup>

また、第12次調査地（第1図の⑦）では弥生時代全般を通して遺構の検出があり、この事から、SD-301は、人為的に掘られた弥生時代中期の集落を囲む溝（環濠）の可能性が高いと推定される。

上記の環濠と推定されるSD-301が埋没した後、洪水等の要因で堆積した第7層には中期後半の遺物が含まれていた。また第6層内からは後期前半の遺物の出土があった。この層の上面から切り込む後期前半の溝（SD-201）を検出した。周辺には後期前半の時期の集落が存在していると推定できる。

SD-201が埋没した後、第5層の粘土が堆積し、層内からは後期後半と推定される遺物の出土があり、この層の上面から切り込む溝（SD-101）を検出した。溝内からは銅鏡が1点出土した。

銅鏡（1）は、有茎鏡の逆刺をもつ回基式で、鏡身幅指数34を測る。田中勝弘氏の分類ではB-b-4にあたる。弥生時代後期後半の高环（2）とともに出土していることから、この銅鏡は、弥生時代後期後半以前に鋳造されていると推定できる。  
<sup>註3</sup>

また、跡部遺跡内では、当調査研究会の第5次調査で、弥生時代後期頃に埋納されたと推定される銅鏡が出土した埋納坑の中から銅鏡が1点出土している。鋳造された時期は後期以前であったことが判明している。  
<sup>註4</sup>

#### 註記

註1 塚田真一 1994. 4「跡部遺跡第12次調査（AT93-12）」「平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告」 財團法人八尾市文化財調査研究会

註2 塚田真一 1994. 4「跡部遺跡第13次調査（AT93-13）」「平成5年度 八尾市文化財調査研

究会事業報告』 財團法人八尾市文化財調査研究会

- 註3 田中勝弘 1989. 7「銅鏡」『季刊考古学 第27号 特集青銅器と弥生社会』 雄山閣出版
- 註4 安井良三他 1991 『跡部遺跡発掘調査報告書』 一大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸一  
八尾市文化財調査研究会報告31 務 八尾市文化財調査研究会
- 註5 寺沢薰・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年 -近畿編I-』 木耳社



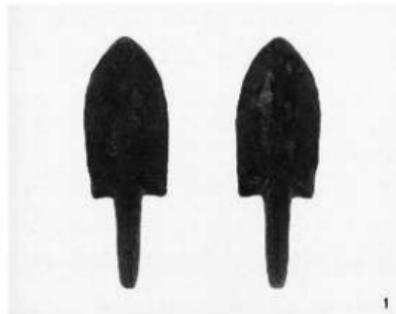
第1面全景（東から）



第2面全景（東から）



第4面全景（東から）



SD-101 (1) 出土遺物



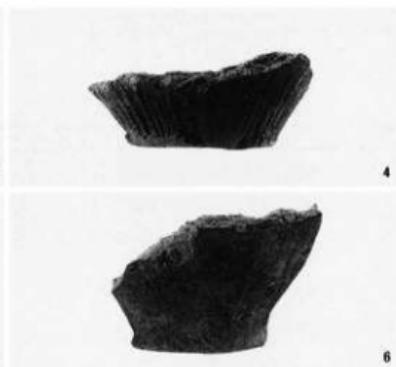
3



4

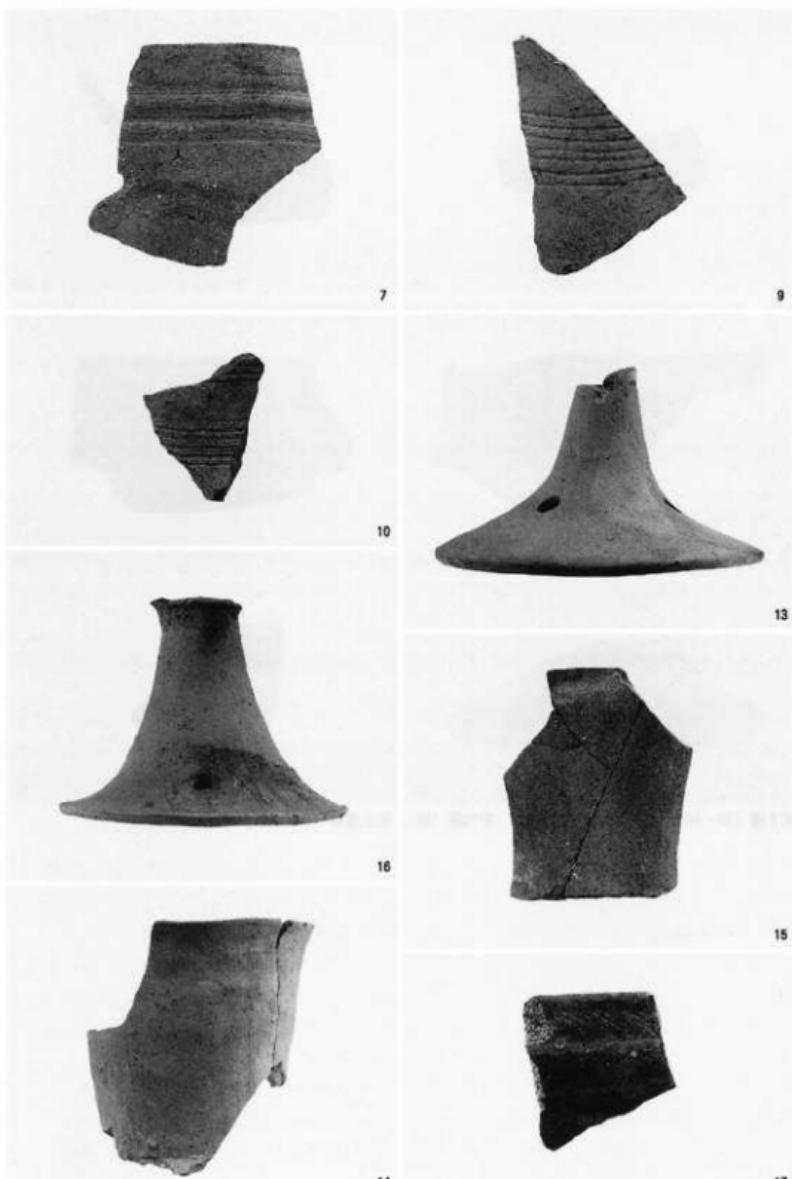


5



6

SD-201 (3・4・5) SD-301 (6) 出土遺物



SD-301 (7) SD-401 (9・10) 第5層 (13) 第6層 (14・15・16) 第7層 (17) 出土遺物



18



19



20



21



22



26

第7層（18・19） 第8層（20・21・22） 第10層（26） 出土遺物

## II 跡部遺跡第11次調查 (AT93-11)

### 大　　目

- 一、調査概要
- 二、調査方法
- 三、調査結果
- 四、考察
- 五、結論
- 六、参考文献
- 七、著者

## 例　　言

- 1 本書は、大阪府八尾市東太子1丁目106で実施した八尾市立龍華小学校講堂兼屋内運動場増改築工事に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第11次調査（AT93-11）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第3号 平成5年4月5日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は平成5年5月17日から7月14日にかけて成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は上幅で約1215m<sup>2</sup>、最終面で約380m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査・内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音字順）。  
磯上サカエ・澤井 幹・高柳恵美・西田 寿・宮崎寛子・村井俊子

## 目　　次

1 はじめに.....	15
2 調査の方法と経過.....	20
3 調査概要	
1) 地区割.....	21
2) 基本層序.....	22
3) 検出遺構と出土遺物.....	24
4) 検出遺構一覧表.....	30
5) 出土遺物観察表.....	32
4まとめ.....	34

## II 跡部遺跡第11次調査 (AT93-11)

### 1 はじめに

跡部遺跡は、八尾市南西部の跡部本町・跡部北の町・跡部南の町・太子堂1丁目・太子堂2丁目・東太子1丁目・春日町にその範囲が設定されており、地理的には、東側から北側を旧長瀬川、東側から南側をその支流に開まれた氾濫原にあたっている。当遺跡の北側には、久宝寺遺跡が位置しており、南側の旧流路（旧平野川）の自然堤防上には、上流の東から植松遺跡・太子堂遺跡・龜井遺跡・竹渕遺跡・加美南遺跡（大阪市）などが占地している。また、遺跡の北東部、久宝寺遺跡と接する春日町1丁目から渋川町5丁目にかけては、飛鳥時代の寺院である渋川廃寺の推定地がある。

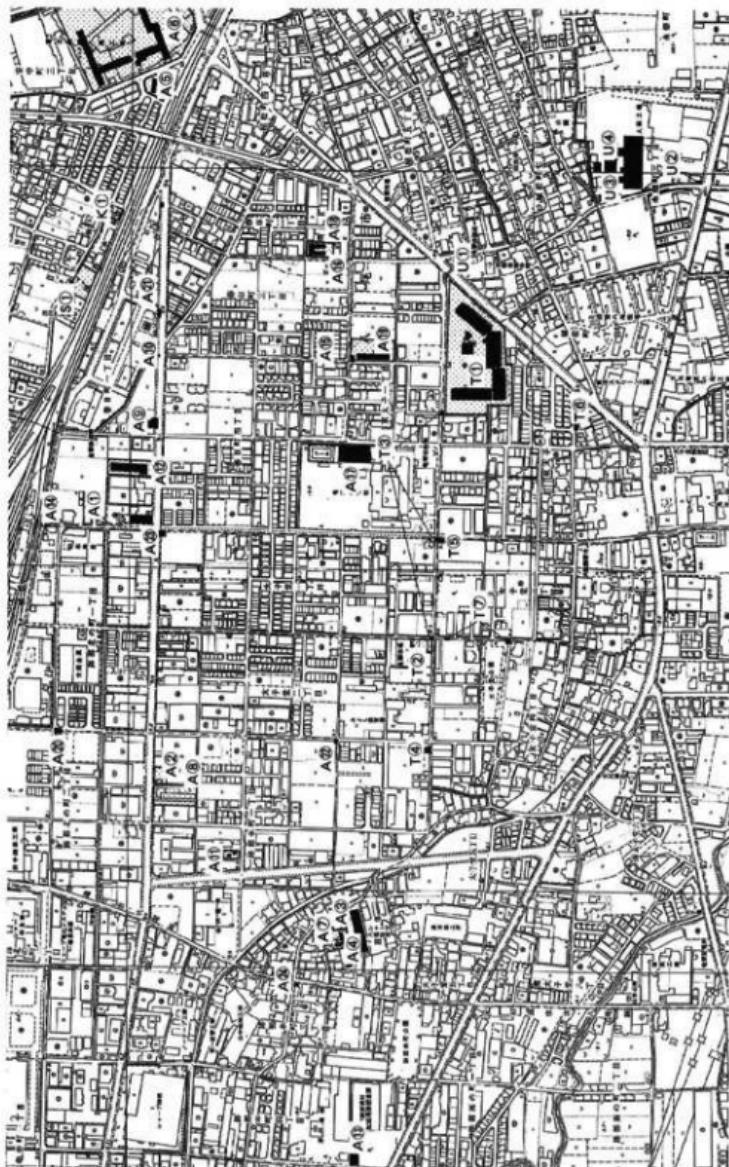
今回報告する調査地（八尾市東太子1丁目106 八尾市立龍華小学校）は、遺跡の中央南部に位置しており、南側の東西に伸びる道路を隔てて、太子堂遺跡と区画されている。

当遺跡は、昭和53年に行われた工事の際に弥生時代前期の上器や鎌倉時代の屋瓦が出土したことによって周知された遺跡であるが、昭和56年以降、八尾市教育委員会・当調査研究会が実施している発掘調査によって、弥生時代前期～古墳時代前期・中期・後期～奈良時代・平安時代・鎌倉時代にわたる生活面が検出されており、豊富な内容が明らかにされてきている。

まず、当地から東200mのA18地点（AT93-12）で弥生時代前期の居住域、中期の墓域、同後期の土器集積、古墳時代前期（庄内期）の居住域が検出されている。また、当地から北西200mのA23地点（AT94-17）では、弥生時代前期の小穴・落ち込みが検出されており（本書III 跡部遺跡第17次調査参照）、A1地点（市教委昭和56年度調査地）では、弥生時代前期～中期の溝が検出されている。また、当地から北東300mのA21地点（AT93-15）では、弥生時代前期の河川流路がみられる（本書III 跡部遺跡第15次調査参照）。

一方、A1地点では、弥生時代の遺物包含層を盛土とする古墳時代前期（庄内期）の方形周溝墓が検出されており、そこから東100mのA9地点（AT89-5）では、弥生時代終末に埋納された銅鐸が出土しているほか、古墳時代前期の居住域が検出されている。これらの地点の周辺、遺跡北部にあたるA10（AT91-6）・A12（AT92-7）・A14（AT92-9）・A21（AT93-15）の各地点では、古墳時代前期前半（庄内～布留式古相）の構造・遺物が散見されている。さらに、そこから南側にあたる当調査地（A17地点=AT93-11）やA19地点（AT93-13）地点では、弥生時代中期後半～後期の大規模な溝が検出されており、周辺のA15地点（AT92-10 本書I 跡部遺跡第10次調査）・A16地点（92-541）地点では、弥生時代前期～古墳時代前期までの各時期の溝、あるいは濃密な遺物包含層が確認されている。

第1図 調査地周辺図



調査の実施機関者	調査番号	調査主体(略号)	調査原因	調査地住所	調査期間	文書	執行
路基道路	A 1	市教委	共同住宅建設	春日町1-57 新宿本町1-3	811/08-811119 821/05-821/05	八尾市埋蔵文化財調査会報告1980・1981年度	市教委 1983
	A 2	研究会 (AT82-1)	舗装工事	新宿本町2-45	840/30-840/331	八尾市文化財調査研究会報告25	研究会 1986
	A 3	研究会 (AT83-2)	土石災害復旧	新宿本町2-44-1	840/30-840/331	八尾市文化財調査研究会報告5	研究会 1986
	A 4	市教委	共同住宅建設	安中本町3-52-2	840/68-840/701	八尾市文化財調査研究会報告11	市教委 1986
	A 5	研究会 (AT88-1)	ビジョネットシステム建設	安中本町3-26地	870/08-870/18	八尾市文化財調査研究会報告11	研究会 1988
	A 6	研究会 (AT88-3)	共同住宅建設	新宿本町2-47-1	860/33-860/331	八尾市文化財調査研究会報告19	市教委 1986
	A 7	市教委	共同住宅建設	新宿本町1-4-1	881/001-881/011	八尾市文化財調査研究会報告25	研究会 1986
	A 8	研究会 (AT88-4)	共同住宅建設	春日町1-4-1	881/001-881/011	八尾市文化財調査研究会報告25	研究会 1986
	A 9	研究会 (AT89-5)	公共下水道工事	春日町1-4-1	891/02-891/130	八尾市文化財調査研究会報告31	研究会 1986
	A 10	研究会 (AT91-6)	公共下水道工事	春日町1-地内	910/03-911/054	八尾市文化財調査研究会報告34	市教委 1983
	A 11	市教委 (92-164)	公共住宅建設	新宿本町1-4-47	920/06-921/029	八尾市文化財調査研究会報告27	研究会 1986
	A 12	研究会 (AT92-7)	店舗付共同住宅建設	春日町1-43-48	920/07-920/2601	八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983
	A 13	研究会 (AT92-8)	新築新設	新宿本町1-4-20	920/08-920/005	八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983
	A 14	研究会 (AT92-9)	公共下水道工事	春日町1-地内	921/001-921/013	八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983
	A 15	研究会 (AT92-10)	公共下水道工事	春日町3地内	920/12-930/215	今回報告 本審議	市教委 1994
	A 16	市教委 (92-541)	公共下水道工事	春日町1-地内	930/04-941/9	今回報告 本審議	市教委 1994
	A 17	研究会 (AT93-11)	園内運動場改築	東大字1-196	930/17-930/714	今回報告 本審議	研究会 1994
	A 18	研究会 (AT93-12)	共同住宅建設	春日町2-35-1億	950/17-930/615	平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A 19	研究会 (AT93-13)	共同住宅建設	東大字1-15	950/18-930/730	平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A 20	研究会 (AT93-14)	公共下水道工事	新宿本町1地内	931/11-931/210	平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A 21	研究会 (AT93-15)	公共下水道工事	春日町1-2地先	931/23-940/218	今回報告 本審議	研究会 1994
	A 22	研究会 (AT94-16)	公共下水道工事	新宿本町1地内	940/912-941/013	今回報告 本審議	研究会 1994
	A 23	研究会 (AT94-17)	公共下水道工事	太子堂1地内	940/916-941/108	今回報告 本審議	研究会 1994
	A 24	研究会 (AT94-18)	公共下水道工事	新宿本町3地内	940/922-941/027	今回報告 本審議	研究会 1994
太子堂道路	T 1	研究会 (TS83-1)	共同住宅建設	東大字2-1他	856/006-831/027	八尾市文化財調査研究会報告36	研究会 1983
	T 2	市教委 (87-152)	共同住宅建設	太子堂2-3地内	87/0121	八尾市文化財調査研究会報告17	研究会 1983
	T 3	研究会 (TS90-2)	共同住宅建設	太子堂2-3地内	901/127-910/215	八尾市文化財調査研究会報告36	研究会 1983
	T 4	研究会 (TS91-3)	公共下水道工事	太子堂2地内	920/201-920/229	今回報告 本審議	研究会 1983
	T 5	研究会 (TS93-4)	公共下水道工事	東大字2地内	930/006-930/06	八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983
	T 6	研究会 (TS93-5)	公共下水道工事	東大字2地内	931/130-931/203	平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	T 7	研究会 (TS94-6)	公共下水道工事	太子堂3-4地内	941/124-950/113	今回報告 本審議	研究会 1983
	T 8	研究会 (K TS99-1)	共同住宅建設	太子堂2-3地内	900/007-930/005	八尾市文化財調査研究会報告28	研究会 1991
洪川道路	K 1	研究会 (KH90-7)	共同住宅建設	新宿町5-33	901/217-901/221	八尾市文化財調査研究会報告32	研究会 1991
久宝寺道路	U 1	市教委 (90-433)	公共下水道工事	新宿町5地内	910/622-910/627	八尾市文化財調査研究会報告26	研究会 1983
横松道路	U 2	研究会 (UM92-1)	公共下水道工事	永畠町3地内	930/118-930/202	八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983
	U 3	研究会 (UM92-2)	共同住宅建設	永畠町3-1地内	940/119-940/219	平成5年度 八尾市文化財調査研究会事業報告	研究会 1983
	U 4	研究会 (UM92-3)	共同住宅建設	永畠町3-1地内	940/210-940/331	平成5年度 八尾市文化財調査研究会報告39	研究会 1983

一方、当遺跡北西部に位置するA2（AT82-1）・A8（AT88-4）・A11（92-164）の各地点では古墳時代前期（布留期）の遺構・遺物が見られ、A11地点では祭祀の行われた可能性のある井戸が検出されている。これらの地点では弥生時代～古墳時代前期前半（庄内期）の遺構・遺物は認められていない。また、当遺跡の南端、太子堂遺跡との接点にあたるT3地点（TS90-2）のうち西側の2か所（2区・3区）とT5地点（TS92-4）では、古墳時代前期（布留期）の井戸・溝などから多量の遺物が出土しているが、それ以前には河川の堆積が見られる。ほぼ同時期に、近隣のT2地点（87-152）・T3地点のうち東端の1か所（1区）・植松遺跡のU1地点（90-433）には河川（旧平野川）の流路があり、T2地点・U1地点ではこの河川内部から、古墳時代前期後半（布留式新相）から古墳時代中期に至る土器類が出土している。

古墳時代中期～後期にかけての遺構・遺物は、八尾市の低平地では減少する傾向にあり、当遺跡でも同様のことがいえる。ここでは、A18地点（AT93-12）で後期の溝と填築の可能性のある盛土が見られ、東部に位置するA5地点（市教委昭和59年度調査地）で土坑が検出されている程度である。この時期に対応する遺物包含層は、A5地点のさらに東、遺跡推定範囲の東端にあたるA6地点（AT88-3）で古墳時代中期～後期、遺跡北東側の渋川廃寺推定地のS1地点（SKT89-1）で古墳時代中期、同じく遺跡北西側の久宝寺遺跡のK1地点（KH90-7）で古墳時代後期のものがわずかに確認されている。このうち、A6地点では、長瀬川旧流路の下で古墳時代中期～後期の遺物包含層が検出されていることから、長瀬川の流路は、この時期より後にA6地点の付近を流れようになっていたことがわかる。

一方、遺跡中央から南側、太子堂遺跡にかけて位置する当調査地やA19地点・A22地点（AT94-16 本書II 跡部遺跡第16次調査）・T2地点・T7地点（TS94-6 本書VI 太子堂遺跡第6次調査）では、この時期に対応する河川跡（旧平野川）および洪水層が認められる。この河川は、古墳時代後期以降から流れはじめる平野川の旧流路で、平安時代前半には埋没してしまう。

飛鳥時代～奈良時代では、S1地点で渋川廃寺に関連する遺構・遺物があり、A6地点では長瀬川の旧流路から渋川廃寺の瓦が出土している。また遺跡北東部のA10地点（AT91-6）で溝、西部のA13地点（AT92-8）および太子堂遺跡のT1地点（TS83-1）では、奈良時代の井戸などが検出されており、T4地点（TS91-3 本書V 太子堂遺跡第3次調査）でも、この時期の遺構面が確認されている。また、当該時期の遺物包含層はK1地点・T6地点（TS93-5）でも確認されており、この時期に生活の場がこれまでの地域から、北東部へ移動していく様子がわかる。

平安時代末期以降になると、ほとんどの調査地で農耕に伴う鍬溝などが認められるが、西部

のA3（AT83-2）・A4（市教委昭和59年度調査地）・A7（市教委昭和62年度調査地）の各地点では、古墳時代後期までに埋没した旧平野川の自然堤防を選んで、平安時代後期～鎌倉時代前期の集落が営まれるようになる。また、これらの地点よりさらに西側にあたるA13地点では農耕に伴う鋤溝が検出されている。A24地点（AT94-18 本書 IV 跡部遺跡第18次調査）では、この埋没河川の下から、古墳時代前期（布留期）の土器が出土していることから、平野川の旧流路がこの付近を流れているのは、古墳時代前期（布留期）より後であることがわかる。また、前述のA13地点の遺構面を構成する基盤層の下には、古墳時代前期初頭（庄内期）の埋没河川があり、A3・A4・A7・A24の各地点とは、遺跡の形成過程が異なっているものと考えられる。

一方、東側のT1地点では、鎌倉時代の鋤溝などが検出され、この時期にこの付近は田畠として利用されていたことがわかる。さらに北東端のA6地点では、この時期に大河となる長瀬川の本流が認められている。

これから、当遺跡の集落の中心は、弥生時代を通じて、中央東部のA15地点・A16地点・A18地点付近にあることがわかる。当調査地では、弥生時代中期前半と後半の二時期に大規模な溝がみられるが、同時期の同様の溝はA15地点・A19地点でもみられ、これらが集落を区画する溝である可能性が考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期初頭（庄内期）でも、やはり中央東部のA15地点・A16地点・A18地点に集落の中心があり、その集落（居住域）の北西側のA1地点に墓域、A9地点に祭祀の場を控えていることがわかる。このように、これらの時期を通じた跡部遺跡の中心は、時代が下るにつれ、拡大していくようである。

古墳時代前期後半（布留期）には周縁部に生活の場が移動し、北部のA9地点、北西部のA2地点・A8地点・A11地点、南部の太子堂遺跡T3地点などで、生活に密着した遺構が構築されるようになる。

古墳時代中期以降になると、生活の場は東のA5地点・A6地点へと移動し、A18地点に大型の墳墓が構築される。この間の集落の移動は、河川の氾濫などによる集落廃絶の可能性が高く、当調査地点やA19地点などで厚い粗砂の堆積が認められている。

さらに時代が下ると、S1地点の付近に寺院が建立され、A13地点・T1地点で奈良時代の生活の場が展開されるようになる。この頃に南側の流路（旧平野川）は埋没していたようで、それと符合するように旧長瀬川が大河川へと発達していったようである。

平安時代に入ると、この南側の埋没河川の上面に集落が形成され（A3地点・A4地点・A7地点）、その北側、もとの集落の中心部は農地として利用されるようになり、近年までその土地利用が踏襲され続けている。

## 2 調査の方法と経過

今回の調査は、龍華小学校の講堂兼屋内運動場増築工事に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した11度目の発掘調査（AT93-11）である。調査面積は、既存の屋内運動場・プールの解体後に建て替えられる屋内運動場建築予定地の約1,215m<sup>2</sup>（上幅）である。

試掘調査の結果から、当初予定の掘削深度は、まず現地表下2.5m前後までの砂層の底までを重機によって掘削し、それ以下の約0.65mの遺物包含層（古墳時代前期相当層）を人力によって掘削することとされていた。ただし、この調査地付近については、弥生時代前期にまでさかのぼる遺構や遺物が検出されていることから、古墳時代前期以下についても確認するべきであるとの判断から、「下層確認」に重きを置いた。

その結果、当初の調査対象面である砂層直下から0.65mの範囲より、さらに0.4～0.7m下層でも遺構の存在が明らかになったため、最終的には1.2～1.5mを人力で掘削し、6枚の遺構面を確認することができた。また、調査終了後の埋め戻しの時点で、部分的に機械によって深さ1m前後を掘削し、さらに下層部分の土層堆積状況を確認した。

発掘調査は平成5年5月17日から開始した。この時点では、プールの解体は終了していなかったが、建築工事にかかる日程を最優先にしたため、とりあえず解体作業に支障のない範囲の調査を先行することにし、機械掘削をプールの解体作業と並行して行った。先行した範囲は、全調査区の南側約2/3で、便宜上その部分をI区、残りの1/3をII区と呼んだ。

I区の機械掘削は南東側から開始し、5月19日に終了したが、砂層からの湧水が甚だしかったため、東側および北側に機械によって幅・深さ1mほどを掘削し、排水溝と同時に下層確認用のトレーナーとした。このI区北端のトレーナーが、I区とII区の境界線となった。次いで、I区の人力掘削に並行して、5月22日からII区の機械掘削を開始し、5月24日に終了した。

当地は、現地表下1.0～1.4m前後までは、旧建物の基礎による搅乱が及び、それ以下には砂が1m以上の厚さで堆積している。盛土や砂が軟弱な土質であること、砂からの湧水が多いことなどから、壁面の勾配は充分に控え、砂層の底までを重機によって除去した。機械掘削の深さは、結果的に南側で現地表下2.0m、北側で2.8m、T.P.+6.7～7.0mである。この時点での断面観察では、砂層の底以下から0.5～0.8mまでの範囲に4枚の遺構面が確認できた。

平面的な人力掘削は5月25日から開始したが、壁面保持のため、周間に犬走りやトレーナーを設けてその内側を掘り下げたため、人力掘削の面積は約560m<sup>2</sup>と大幅に減少した。

平面的な調査に並行し、下層確認のためのトレーナー掘削を数回行って断面観察を繰り返した結果、4枚目の遺構面よりさらに0.4～0.6m下層で大規模な溝状遺構を伴う複数の時期の遺構面（第5面・第6面）を確認したことから、急速、下層部分も平面的な調査対象とすることに決定した。

道	路	路線番号	路線名	調査主体(略号)	調査地住所	調査期間	実行
鶴見区東部	A1	市教委	共同住宅施設	春日町1-1~57	81109-8611119	八尾市埋蔵文化財調査企画報1980・1981年度	市教委 1983
	A2	研究会 (AT82-1)	公営住宅	越前本町1-3	82100-821005	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告25	研究会 1989
	A3	研究会 (AT83-2)	社会住宅	越前本町2-46	840301-840331	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告5	研究会 1984
	A4	市教委	社員寮建設	越前本町2-44-1	840301-840331	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告5	市教委 1986
	A5	市教委	ビンクスホーリング建設	安中木町3-53-2	840648-840701	八尾市埋蔵文化財調査企画報11	研究会 1986
	A6	研究会 (AT88-3)	共同住宅施設	安中木町3-53-20他	870406-870518	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告16	研究会 1988
	A7	山教委 (62-307)	共同住宅施設	新浜町3-2-47-1	880317-880331	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告19	山教委 1988
	A8	研究会 (AT88-4)	共同住宅施設	越前本町1-4-1	881001-881011	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告25	研究会 1991
	A9	研究会 (AT89-5)	公共下水道工事	春日町1-45-1	891001-891030	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告34	研究会 1993
	A10	研究会 (AT91-6)	公共下水道工事	春日町1-地内	910920-911004	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告34	研究会 1993
	A11	市教委 (92-64)	公共住宅施設	越前本町1-4-17	920705-921029	八尾市埋蔵文化財調査報告27	研究会 1993
	A12	研究会 (AT92-7)	店舗付共同住宅施設	春日町1-45-48	930101-930101	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告39	研究会 1993
	A13	研究会 (AT92-8)	検査新設	越前本町4-4-20	920820-920905	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告39	研究会 1993
	A14	研究会 (AT92-9)	公共下水道工事	春日町1-地内	921007-921013	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告39	研究会 1993
	A15	研究会 (AT92-10)	公共下水道工事	春日町3-地内	930129-930215	今回報告 本書1	研究会 1993
	A16	市教委 (92-541)	公共下水道工事	春日町1-地内	930119	八尾市埋蔵文化財調査報告30	市教委 1994
	A17	研究会 (AT93-11)	屋内排水管改築	東太子1-106	930117-930714	今回報告 本書2	研究会 1994
	A18	研究会 (AT93-12)	共同住宅施設	春日町1-35-1他	930617-930815	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A19	研究会 (AT93-13)	共同住宅施設	東太子1-16	930618-930730	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A20	研究会 (AT93-14)	公共下水道工事	越前本町1-地内	931109-931210	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	A21	研究会 (AT93-15)	公共下水道工事	春日町1-2他先	931219-940218	今回報告 本書3	研究会 1994
	A22	研究会 (AT94-16)	公共下水道工事	越前本町1-地内	940912-941013	今回報告 本書4	研究会 1994
	A23	研究会 (AT94-17)	公共下水道工事	太子堂1-地内	940916-941008	今回報告 本書V	研究会 1994
	A24	研究会 (AT94-18)	公共下水道工事	越前本町3-地内	940922-941027	今回報告 本書VI	研究会 1994
太子堂通路	T 1	研究会 (T 583-1)	共同住宅施設	太子堂2-1-他	850606-831007	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告36	研究会 1993
	T 2	市教委 (87-152)	共同住宅施設	太子堂2-35-2	871021	八尾市埋蔵文化財調査企画報17	研究会 1993
	T 3	研究会 (TS90-2)	公共下水道工事	太子堂2-3-地内	901271-910115	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告36	研究会 1993
	T 4	研究会 (TS91-3)	公共下水道工事	太子堂2-3地内	920201-920229	今回報告 本書1	研究会 1993
	T 5	研究会 (TS92-4)	公共下水道工事	太子堂2-3地内	930308-930406	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告39	研究会 1993
	T 6	研究会 (TS93-5)	公共下水道工事	太子堂2-3地内	931130-931203	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1994
	T 7	研究会 (TS94-6)	公共下水道工事	太子堂3-4地内	941124-941133	今回報告 本書	研究会 1994
洪川通路	T 1	研究会 (K TS99-1)	共同住宅施設	治川町5-11	900307-930406	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告28	研究会 1991
久宝寺通路	K 1	研究会 (KH90-7)	共同住宅施設	治川町5-33	901217-901221	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告22	研究会 1991
福松通路	U 1	市教委 (90-133)	公共下水道工事	福松町5地内	910522-910627	八尾市埋蔵文化財調査研究会報告26	研究会 1993
	U 2	研究会 (UM92-1)	公共下水道工事	木瀬町3-3地内	930308-930322	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会報告39	研究会 1993
	U 3	研究会 (UM92-2)	共同住宅施設	木瀬町3-1地内	930419-940719	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1993
	U 4	研究会 (UM92-3)	共同住宅施設	木瀬町3-1地内	940210-940531	平成5年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告	研究会 1993

一方、当遺跡北西部に位置するA2（AT82-1）・A8（AT88-4）・A11（92-164）の各地点では古墳時代前期（布留期）の遺構・遺物が見られ、A11地点では祭祀の行われた可能性のある井戸が検出されている。これらの地点では弥生時代～古墳時代前期前半（庄内期）の遺構・遺物は認められていない。また、当遺跡の南端、太子堂遺跡との接点にあたるT3地点（TS90-2）のうち西側の2か所（2区・3区）とT5地点（TS92-4）では、古墳時代前期（布留期）の井戸・溝などから多量の遺物が出土しているが、それ以前には河川の堆積が見られる。ほぼ同時期に、近隣のT2地点（87-152）・T3地点のうち東端の1か所（1区）・植松遺跡のU1地点（90-433）には河川（旧平野川）の流路があり、T2地点・U1地点ではこの河川内部から、古墳時代前期後半（布留式新相）から古墳時代中期に至る土器類が出土している。

古墳時代中期～後期にかけての遺構・遺物は、八尾市の低平地では減少する傾向にあり、当遺跡でも同様のことがいえる。ここでは、A18地点（AT93-12）で後期の溝と墳墓の可能性のある盛土が見られ、東部に位置するA5地点（市教委昭和59年度調査地）で土坑が検出されている程度である。この時期に対応する遺物包含層は、A5地点のさらに東、遺跡推定範囲の東端にあたるA6地点（AT88-3）で古墳時代中期～後期、遺跡北東側の渋川廃寺推定地のS1地点（SKT89-1）で古墳時代中期、同じく遺跡北西側の久宝寺遺跡のK1地点（KH90-7）で古墳時代後期のものがわずかに確認されている。このうち、A6地点では、長瀬川旧流路の下で古墳時代中期～後期の遺物包含層が検出されていることから、長瀬川の流路は、この時期より後にA6地点の付近を流れようになっていたことがわかる。

一方、遺跡中央から南側、太子堂遺跡にかけて位置する当調査地やA19地点・A22地点（AT94-16 本書II 跡部遺跡第16次調査）・T2地点・T7地点（TS94-6 本書VI 太子堂遺跡第6次調査）では、この時期に対応する河川跡（旧平野川）および洪水層が認められる。この河川は、古墳時代後期以降から流れはじめる平野川の旧流路で、平安時代前半には埋没してしまう。

飛鳥時代～奈良時代では、S1地点で渋川廃寺に關連する遺構・遺物があり、A6地点では長瀬川の旧流路から渋川廃寺の瓦が出土している。また遺跡北東部のA10地点（AT91-6）で溝、西部のA13地点（AT92-8）および太子堂遺跡のT1地点（TS83-1）では、奈良時代の井戸などが検出されており、T4地点（TS91-3 本書V 太子堂遺跡第3次調査）でも、この時期の遺構面が確認されている。また、当該時期の遺物包含層はK1地点・T6地点（TS93-5）でも確認されており、この時期に生活の場がこれまでの地域から、北東部へ移動していく様子がわかる。

平安時代末期以降になると、ほとんどの調査地で農耕に伴う耕溝などが認められるが、西部

のA3（AT83-2）・A4（市教委昭和59年度調査地）・A7（市教委昭和62年度調査地）の各地点では、古墳時代後期までに埋没した旧平野川の自然堤防上を選び、平安時代後期～鎌倉時代前期の集落が営まれるようになる。また、これらの地点よりさらに西側にあたるA13地点では農耕に伴う鋤溝が検出されている。A24地点（AT94-18 本書 IV 跡部遺跡第18次調査）では、この埋没河川の下から、古墳時代前期（布留期）の土器が出土していることから、平野川の旧流路がこの付近を流れていたのは、古墳時代前期（布留期）より後であることがわかる。また、前述のA13地点の遺構面を構成する基盤層の下には、古墳時代前期初頭（庄内期）の埋没河川があり、A3・A4・A7・A24の各地点とは、遺跡の形成過程が異なっているものと考えられる。

一方、東側のT1地点では、鎌倉時代の鋤溝などが検出され、この時期にこの付近は田畠として利用されていたことがわかる。さらに北東端のA6地点では、この時期に大河となる長瀬川の本流が認められている。

これから、当遺跡の集落の中心は、弥生時代を通じて、中央東部のA15地点・A16地点・A18地点付近にあることがわかる。当調査地では、弥生時代中期前半と後半の二時期に大規模な溝がみられるが、同時期の同様の溝はA15地点・A19地点でもみられ、これらが集落を区画する溝である可能性が考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期初頭（庄内期）でも、やはり中央東部のA15地点・A16地点・A18地点に集落の中心があり、その集落（居住域）の北西側のA1地点に墓域、A9地点に祭祀の場を控えていることがわかる。このように、これらの時期を通じた跡部遺跡の中心は、時代が下るにつれ、拡大していくようである。

古墳時代前期後半（布留期）には周縁部に生活の場が移動し、北部のA9地点、北西部のA2地点・A8地点・A11地点、南部の太子草遺跡T3地点などで、生活に密着した遺構が構築されるようになる。

古墳時代中期以降になると、生活の場は東のA5地点・A6地点へと移動し、A18地点に大型の墳墓が構築される。この間の集落の移動は、河川の氾濫などによる集落廃絶の可能性が高く、当調査地点やA19地点などで厚い粗砂の堆積が認められている。

さらに時代が下ると、S1地点の付近に寺院が建立され、A13地点・T1地点で奈良時代の生活の場が展開されるようになる。この頃に南側の流路（旧平野川）は埋没していたようで、それと符合するように旧長瀬川が大河川へと発達していったようである。

平安時代に入ると、この南側の埋没河川の上面に集落が形成され（A3地点・A4地点・A7地点）、その北側、もとの集落の中心部は農地として利用されるようになり、近年までその土地利用が踏襲され続けている。

## 2 調査の方法と経過

今回の調査は、龍華小学校の講堂兼屋内運動場増築工事に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した11度目の発掘調査(AT93-11)である。調査面積は、既存の屋内運動場・プールの解体後に建て替えられる屋内運動場建築予定地の約1,215m<sup>2</sup>(上幅)である。

試掘調査の結果から、当初予定の掘削深度は、まず現地表下2.5m前後までの砂層の底までを重機によって掘削し、それ以下の約0.65mの遺物包含層(占墳時代前期相当層)を人力によって掘削することとされていた。ただし、この調査地付近については、弥生時代前期にまでさかのぼる遺構や遺物が検出されていることから、占墳時代前期以下についても確認するべきであるとの判断から、「下層確認」に重きを置いた。

その結果、当初の調査対象面である砂層直下から0.65mの範囲より、さらに0.4~0.7m下層でも遺構の存在が明らかになったため、最終的には1.2~1.5mを人力で掘削し、6枚の遺構面を確認することができた。また、調査終了後の埋め戻しの時点で、部分的に機械によって深さ1m前後を掘削し、さらに下層部分の土層堆積状況を確認した。

発掘調査は平成5年5月17日から開始した。この時点では、プールの解体は終了していなかつたが、建築工事にかかる日程を最優先にしたため、とりあえず解体作業に支障のない範囲の調査を先行することにし、機械掘削をプールの解体作業と並行して行った。先行した範囲は、全調査区の南側約2/3で、便宜上その部分をI区、残りの1/3をII区と呼んだ。

I区の機械掘削は南東側から開始し、5月19日に終了したが、砂層からの湧水が甚だしかったため、東側および北側に機械によって幅・深さ1mほどを掘削し、排水溝と同時に下層確認用のトレンチとした。このI区北端のトレンチが、I区とII区の境界線となった。次いで、I区の人力掘削に並行して、5月22日からII区の機械掘削を開始し、5月24日に終了した。

当地は、現地表下1.0~1.4m前後までは、旧建物の基礎による搅乱が及び、それ以下には砂が1m以上の厚さで堆積している。盛土や砂が軟弱な土質であること、砂からの湧水が多いことなどから、壁面の勾配は充分に控え、砂層の底までを重機によって除去した。機械掘削の深さは、結果的に南側で現地表下2.0m、北側で2.8m、T.P.+6.7~7.0mである。この時点での断面観察では、砂層の底以下から0.5~0.8mまでの範囲に4枚の遺構面が確認できた。

平面的な人力掘削は5月25日から開始したが、壁面保持のため、周間に犬走りやトレンチを設けてその内側を掘り下げたため、人力掘削の面積は約560m<sup>2</sup>と大幅に減少した。

平面的な調査に並行し、下層確認のためのトレンチ掘削を数回行って断面観察を繰り返した結果、4枚目の遺構面よりさらに0.4~0.6m下層で大規模な溝状遺構を伴う複数の時期の遺構面(第5面・第6面)を確認したことから、急速、下層部分も平面的な調査対象とすることに決定した。

第1面から第4面までの調査は6月21日までに終了したが、第4面への掘削途中の6月18日から、遺構の認められなかった調査区南部（I区南）から部分的に下層の掘削を始めた。7月5日に第5面、7月8日に第6面を完掘した。7月13日には、岡化の終了したII区北部から、調査に並行して埋め戻しを開始し、翌14日には埋め戻しに伴ってさらに下層の確認を行い、すべての調査を終了した。

### 3 調査概要

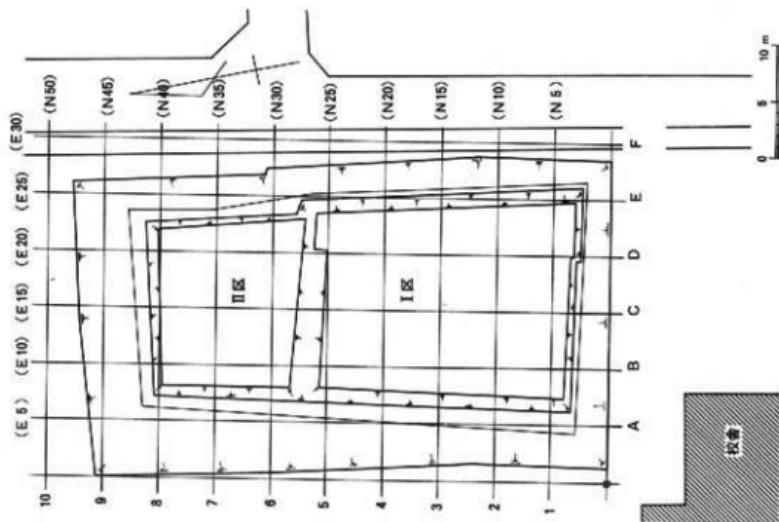
#### 1) 地区割

前述のとおり、調査の手順から、調査区を南側の3分の2と北側の3分の1に分割することになった。そこで、便宜上、調査を選考した南側をI区、北側をII区と呼び、大区画とした。

全体の区画は、南西隅の板ベンチマークを基準点（0）として、東西の軸は西から東へ5mごとにアルファベット（A～F）、南北の軸は南から北へ5mごとにアラビア数字（1～10）を設定し、5m四方のメッシュを小区画とした。小区画の表示は、南北ライン（A～F）、東西ライン（1～10）の北東交点を使用し、たとえば「1 A」と呼んだ。

また、地点の表示については、すべて基準点からの距離を用い、たとえば北へ10m・東へ25mの地点については「N10・E25」とした。

なお、地区割りは任意の方向で、南北ラインは北に向かって西へ12°振っている。



第2図 地区割図 ( $S = 1/500$ )

## 2) 基本層序

現地表以下約6mまでの間で、第1層～第25層までの25枚の基本層を確認した。現地表面のレベル高はT.P.+9.0～9.6m、で、現地表下1.0～1.8mまでは旧屋内運動場の基礎の搅乱が部分的に及んでいる。

第1層旧耕土上面のレベル高はT.P.+8.2～8.4m前後にあたり、南東が高く北西が低い。この「北西下がり」の地形は、最終造構面から踏襲されている。第2層緑灰色疊混粘質シルトは床を形成する土層で、厚さは0.1～0.2mである。

それ以下の土層堆積は、南部では第2層以下0.5m前後、北部では0.6～0.7mで埋没河川の堆積土である粗砂層（第10層）に至る。この間には、褐色系の疊混粘質シルト（第3層・第4層）、青灰色疊混粘質シルト（第5層）、灰色粘土（第6層）、暗褐色粗砂混粘土～粘土混じり粗砂（第7層・第8層）、灰色シルト～微砂混粘質シルト（第9層）が見られる。

第3層・第4層には土師器や須恵器の小破片が含まれる。第7層・第8層は北側にのみ認められた土層で、なかでも第8層には平安時代の遺物（第4回-1）が含まれており、河川埋没後、当該時期の生活面が形成されていたものと考えられる。

埋没河川の堆積土はおおむね3枚にわかれ、上部が粘質シルト～細砂、中央部には粗砂中に植物遺体を含むシルト～微砂が数枚堆積しており、下部には細砂～粗砂があり、流水・溜水を数回繰り返したものと考えられる。上部の砂には平安時代までの遺物が、下部の砂には古墳時代前期（布留式新相）までの遺物が含まれている。

第11層～第19層までには、シルト～微砂と植物遺体の互層や、粘質シルトが1m前後の厚さで堆積している。これらのうち、第11層・第13層・第18層が植物遺体を多量に含む層で、河川の底・沼沢地状の土層堆積状況を示している。このうち、第12層褐色粘質シルト・第14層青灰色粘質シルト・第15層青灰色疊混粘質シルト・第16層暗褐色粘質シルトの各上面で、造構面をとらえた（第1面～第4面）。

第12層からは古墳時代前期（庄内式新相）～古墳時代中期初頭の土器類（2～17）、第14層からは弥生時代後期～古墳時代前期（布留式新相）の土器類（18～27）が出土しており、第15層からは弥生時代後期後半の土器類（30～33）、第17層からは弥生時代後期前半の土器類（34）、第19層からは弥生時代中期前半～後期の土器類（35）が出土している。

第20層黒灰色粗砂混粘土は層厚0.1m前後で、この層上面には、南東～北西方向の2条の溝が切り込まれている（第5面）。層中には弥生時代中期前半の土器類（40）が含まれており、直上からは弥生時代前期以降の土器類（37～39）が出土している。

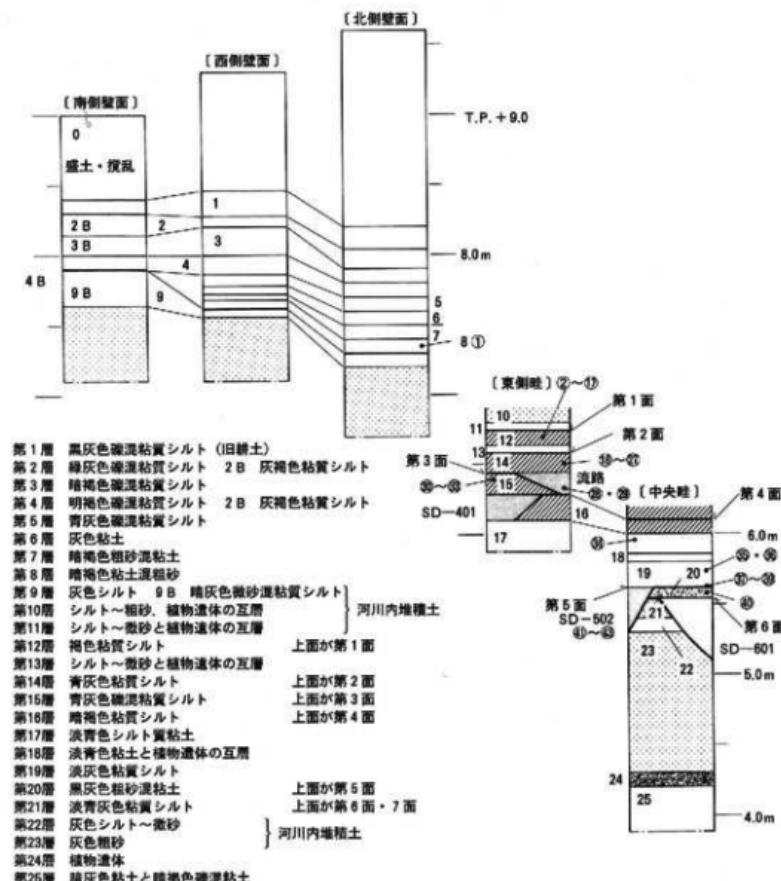
第21層淡青灰色粘質シルトは層厚0.1～0.2mで、この層上面には、南北方向の溝1条ほかが切り込まれている（第6面）。

第22層灰色微砂～シルトの層厚は0.1m未満、不安定な土層で、認められない部分もある。直下の第23層とともに含水量が多い。

第23層灰色粗砂は弥生時代遺構面の基盤をなす層で、層厚は1m以上を測る。この層上面には、窪みの内部に有機物を含む上層堆積が部分的に認められ、遺構の存在が示唆されたが、遺構をとらえるまでには至らなかった。

第24層は植物遺体の沈殿層で、0.1m程度の厚みがある。

第25層は暗灰色粘土と暗褐色疊混粘土の互層で、層厚0.3mまでを確認した。



第3図 柱状模式図 (○数字は遺物番号)

### 3) 棟出遺構と出土遺物

当初の断面観察では、第12層・第14層が水田耕作土の可能性が考えられたが、平面的に掘削した結果、畦畔等の施設は見いだせなかった。第15層・第16層上面では、流路および溝状遺構が認められた。下層部分の第20層上面では、故意に埋め立てられた大規模な溝が2条検出された。第21層上面でも、故意に埋め立てられた大規模な溝1条と、それに切られた溝状遺構や小穴などが認められた。

#### 第1面（第12層褐色粘質シルト上面）

上面のレベル高はT.P.+6.6~6.8mで、南東部が高く北西部が低い。上面には波状痕跡がみられ、上層の第11層は河川底の堆積状況を示すもので、シルト～粗砂に植物遺体が多量に含まれている。この面を形成する第12層中から、古墳時代前期後半～中期初頭の土器類（第4図-2～17）が出土している。

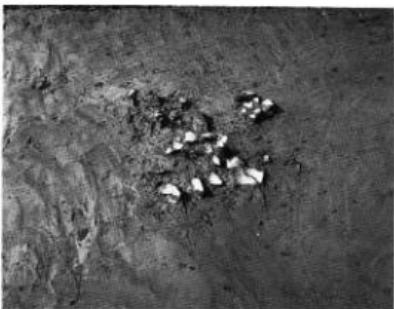


写真2 第14層中遺物(27)出土状況(南から)

#### 第2面（第14層青灰色粘質シルト上面）

上面のレベル高はT.P.+6.5~6.6mを指し、この面でも南東部が高く北西部が低い。第1面同様、上面には波状痕跡が見られ、上層に堆積する第13層もシルト～微砂中に植物遺体が多量に含まれている。この面を形成する第14層中からは、古墳時代前期後半（布留式新相）を下限とする土器類（第4図-18～27）が出土している。



写真1 第1面全景(北から)

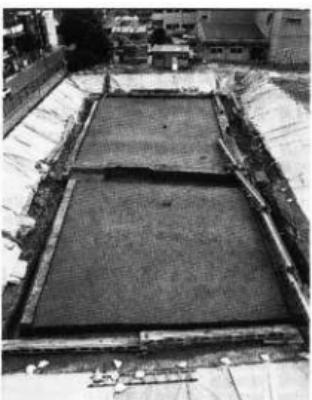
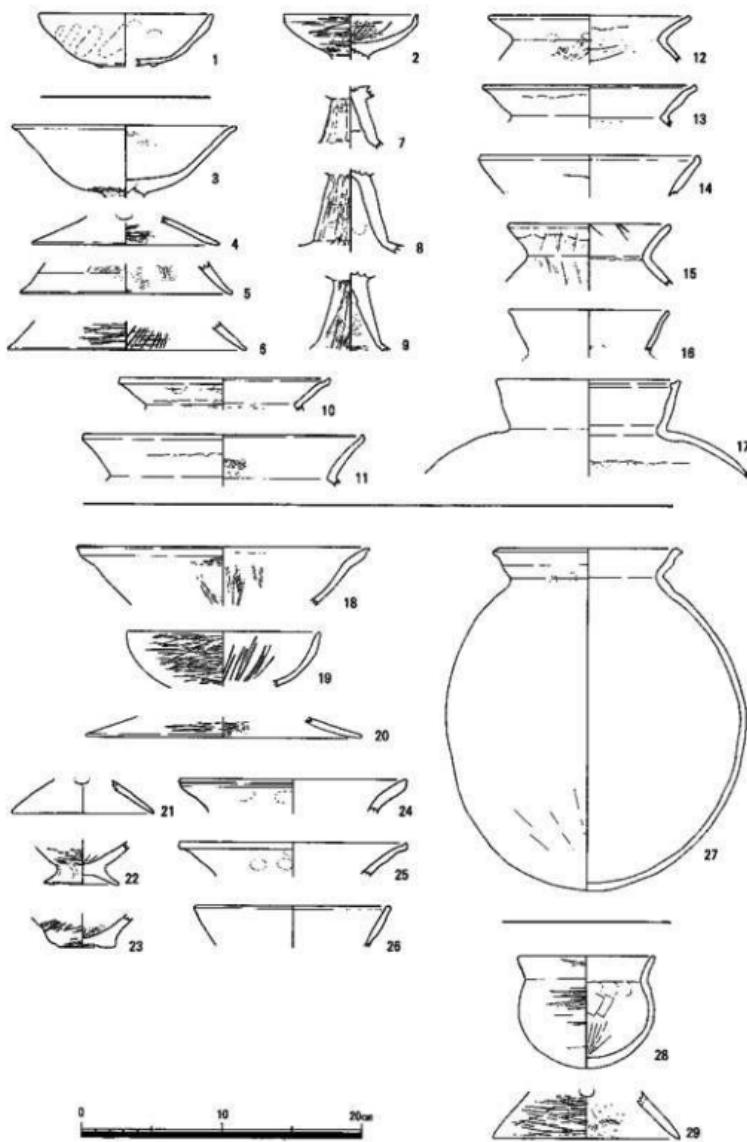


写真3 第2面全景(北から)



第4図 出土遺物実測図1 (S=1/4)

### 第3面(第15層青灰色疊混粘質シルト上面)

第3面のレベル高は、南東部がT.P.+6.3~6.4m、北西部がT.P.+6.2m前後である。第3面は、北から西に向かってゆるやかに落ち込んでおり、調査区中央部(I区北側)で、北西方向の流路が形成されている。この流路の南側の肩には杭が数本認められたが、遺存状況はきわめて悪い。

内部には、301層青灰色疊混じり粘質シルトと白灰色粗砂の互層、302層灰白色細砂~粗砂、303層灰色シルト~微砂、304層暗灰色粘質シルトと灰色細砂の互層、305層灰色粘質シルト混じり細砂、306層灰色粘質シルトが堆積しており、最下の306層灰色粘質シルトには、植物遺体が含まれている。

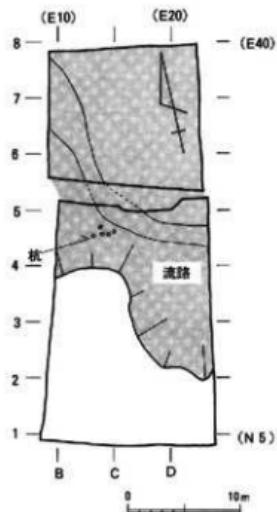
このうち、304層から古墳時代前期(布留式古相)の鉢・高杯(第4図-28・29)が出土しており、遺構面を構成する第15層からは弥生時代後期後半の鉢・壺・壺(第7図30~33)が出土している。

### 第4面(第16層暗褐色粘質シルト上面)

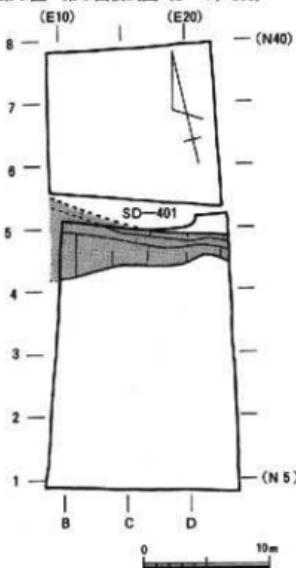
第4面では、I区北側からII区南側にかけて、東西方向に伸びる溝状遺構(SD-401)が検出されたが、I区・II区間に設けたトレンチと重複してしまい、平面的には不明瞭な結果となってしまった。この面のレベル高はT.P.+6.0~5.8mを測る。

溝内部および遺構ベースである第16層中からの出土遺物はないが、直下に堆積する第17層からは、弥生時代中期後半に比定される壺底部(第7図-34)などが出土している。

溝SD-401:幅は東側で1m前後・西側で3m前後、深さは0.1~0.3mで、東から西への流路を持っている。内部には401層灰色粗砂、402層灰色粗砂と暗褐色粘質シルトの互層が堆積しており、底には植物遺体の互層が堆積している。



第5図 第3面模式図( $S=1/500$ )



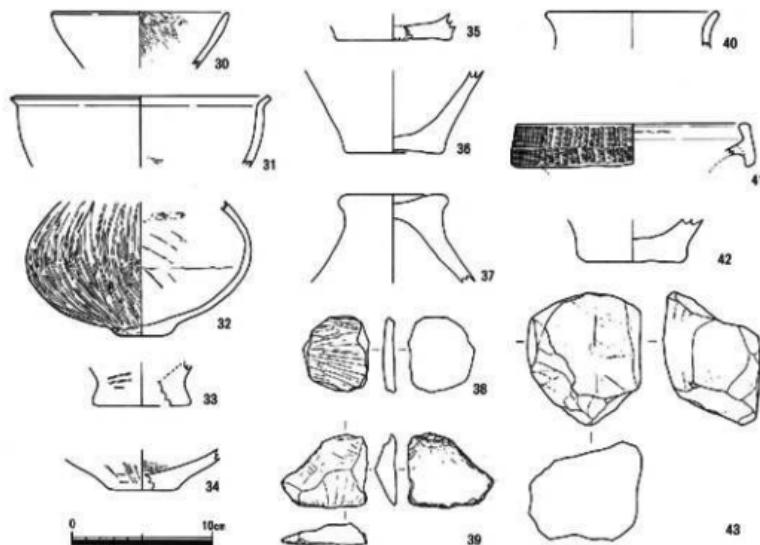
第6図 第4面模式図( $S=1/500$ )

## 第5面（第20層黒灰色粗砂混粘土上面）

第5面では、南東から北西の流路をもつ2条の溝（SD-501・SD-502）を検出した。この面上面のレベル高は、T.P.+5.2~5.8mである。遺構面直上に堆積する第19層からは、弥生時代中期以降の土器類（35・36）が出土しており、遺構面である第20層直上では、弥生時代前期～中期前葉（第I様式～第II様式）の壺用蓋（37）、円板形土製品未成品（38）、サヌカイト剝片（39）などが検出された。円板形土製品およびサヌカイト剝片は、弥生時代中期前葉（第II様式）を上限とするものであろう。さらに、第20層中にも弥生時代前期～中期前葉（第I様式から第II様式）までの小型甕（40）が含まれている。

溝SD-501：II区北西隅で検出した。検出長7.0m・幅2.5m・深さ0.5~0.6mを測る。断面の形状は鈍い逆台形で、底は平坦である。内部には、上層に粘質シルトと粗砂の互層（11層）、中層に灰色シルト質粘土を主体とするブロック層（12・13層）、下層に植物遺体を多く含む灰褐色シルト質粘土（14層）があり、肩の斜面にはベースの転落層である粗砂混じりの灰褐色シルト質粘土（15層）が堆積している。

上層のブロック層（11層）からは、弥生時代中期後半の土器片が少量出土しており、最下層（14層）からは植物遺体とともに、炭化した木片や未加工の木片などが出土している。



第7図 出土遺物実測図2 (S=1/4)

溝SD-502：溝SD-501の南西約3.5mで検出した。SD-501の南側に並行し、Ⅰ区の北東隅からⅡ区北西隅へやや蛇行しながら伸びるもので、Ⅱ区中央部では下層の溝SD-601を切り込んでいる。検出長16.0m・幅2.0m~2.5m・深さ0.5~0.8mを測る。断面の形状は、肩に鈍い段を持ち、底部は鈍いV字形を呈している。

内部堆積土は、上層に粘質シルトと粗砂の互層（21層）と灰色・淡青色粘質シルトを主体とするブロック層（22層）、中層の灰黒色粘質シルトを主とするブロック層（23層）・粗砂に粘質シルトのブロック層（24層）、下層の黒灰色粘質シルトを主とする粗砂混じりのブロック層（25層~27層）からなる。上層のブロック層（21層）から、弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）の壺口縁部（41）、それよりやや時期の遅る壺底部（42）、砥石（43）などが少量出土している。

（41）は複合口縁部側縁に籠状文を施す第Ⅲ様式のもので、壺底部（42）はそれより古く弥生時代前期～中期前半（第Ⅰ様式～第Ⅱ様式）までにおさるものであろう。

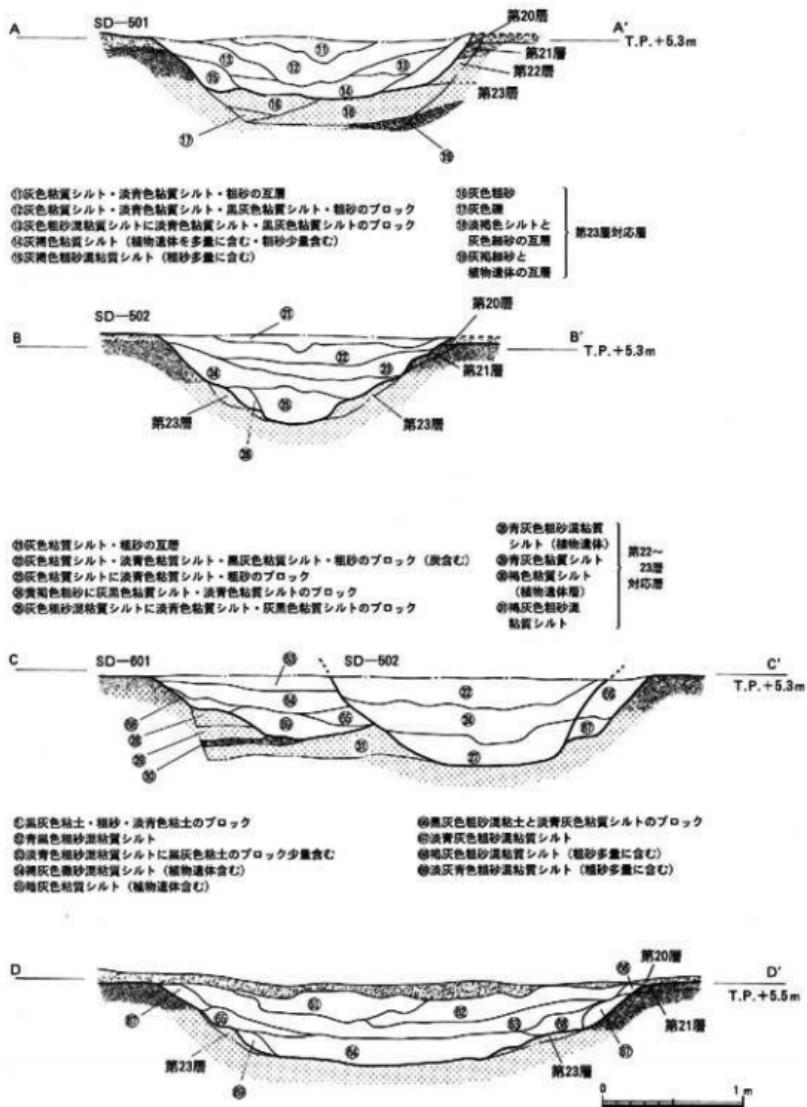
#### 第6面（第21層淡青灰色粘質シルト上面）

ここでは、南～北に流路をもつ溝1条（SD-601）のほか、それに切られる形で方形・隅丸方形にめぐる溝状遺構（SD-701～SD-711）やピット（SP-701～SP-709）などを検出した。前者を第6面上層遺構、後者を第6面下層遺構と呼んだが、遺構面は明確に分けることはできなかった。この面上面のレベル高はT.P.+5.1~5.7mを測り、ここでも南が高く北が低いが、溝SD-601をはさんで東西で0.1~0.2m前後の高低差があり、西が高く東が低い。

なお、第6面下層遺構の法量等の詳細については本文ではふれず、別表（表2 検出遺構一覧）にまとめている。

溝SD-601：調査区中央部西よりで検出した。わずかに蛇行しながら、ほぼ南から北に伸びるもので、Ⅱ区の北側では、上層の溝SD-502と交差し、切られている部分がある。検出長35m・幅2.7~4.0m・深さ0.5m前後を測る。断面の形状は、肩に鈍い段を持ち、底はやや丸みをおびる。内部には、上層に黒灰色粘質シルトを主体とするブロック層（61層）、中層に淡青灰色粘土を主体とするブロック層（62層・63層）、最下に植物遺体を含む灰色系粘質シルト（64層・65層）、肩の斜面にはベースの転落層（66層～69層）がみられる。溝SD-501・SD-502と同様、上層のブロック層から、弥生時代中期前半の土器片や木片などが少量出土している。

溝SD-701～SD-711：これらの溝は、幅0.25~0.6m・深さ0.05~0.2m程度の小規模なものである。調査区中央部の溝SD-601に切られている部分が多く、現状では、SD-704～SD-706・SD-709がL字形・J字形を呈しているが、本来は方形から隅丸方形に巡っていたものと思われる。平面の形状からは、堅穴住居の壁溝または墓の周溝などの痕跡とも考えられるが、他の積極的な施設は見いだせなかった。これらの主軸は、おおむね磁北にのっとっており、他の溝SD-701・SD-703・SD-707・SD-708などもほぼ同一の方向に伸びている。



第8図 SD-501・SD-502・SD-601 断面図 (S=1/40)

溝内部の堆積土は、おもに上層に淡青灰色粘質シルトを主体とするブロック層と下層の黒灰色粗砂混じり粘土からなり、堆積土からは流水・滲水は認められず、これらの溝群も故意に埋められた可能性がある。

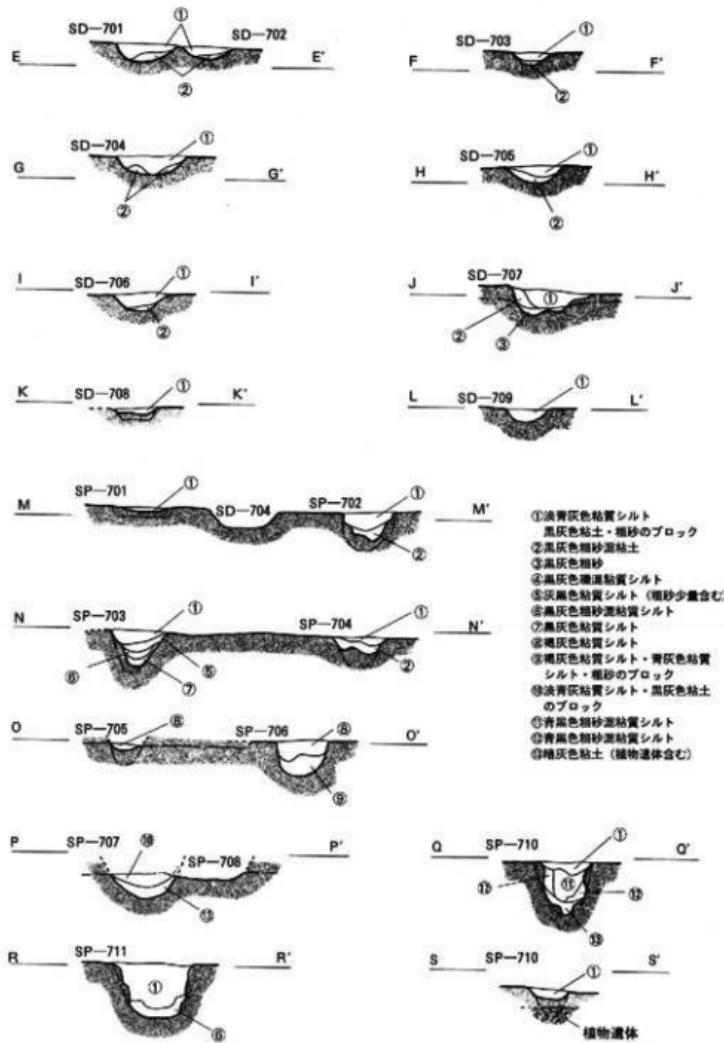
小穴SP-701～SP-712：小穴は、ほとんどが直径0.3m以下、深さ0.1m未溝の小規模なものである。比較的大型で深く、しっかりした掘形を持つものには、SP-702・SP-703・SP-706・SP-710・SP-711があるが、土層堆積や断面の形状から、柱の痕跡らしきものを残すのはSP-710のみで、これらすべてが柱穴であったとは考えにくい。

平面的に見れば、隣あった2個1組の各小穴間の距離は1.2～1.3mと1.7～1.8mの2種があり、並びの方向にも3種があるが、明確な規則性は見いだせず、前述の小溝や溝SD-601との関連は認められない。

内部堆積土は、小溝群と同様、そのほとんどにブロック層があり、ここでも、故意に埋め立てられた可能性が考えられる。

#### 4) 検出遺構一覧表

遺構名	地区	法量(m)	内部堆積土	形状・他の遺構との関係
SD-701	I区 2C	幅0.45～0.6 深さ 0.1 検出長 3.0	①淡青灰色粘質シルト・黒灰色粘土・粗砂のブロック ②黒灰色粗砂混じり粘土	南北に伸びる。南端はSD-601に切れ、北端はSD-702と合流する
SD-702	I区 2C	0.4 0.1 1.5		南東～北西に伸びる。南東端はSD-601に切れ、北西端はSD-701と合流する
SD-703	I区 2C	0.25 0.08 1.5		南北に伸びる。南端は途切れ、北端はSD-704に切れられる。
SD-704	I区 2C～3C	0.5～0.6 0.7 0.15～0.2		主軸を南北にもち、隅丸方形にめぐる。南東コーナーでSD-703を切り、北端は途切れ。
SD-705	I区 2D	0.35～0.5 0.15～0.2 4.5		東西～南北にL字形に屈曲する。西端はSD-601に切れ、北東角でSD-706を切る。
SD-706	I区 2D～3D	0.4～0.6 0.15～0.2 4.5		東西～南北にL字形に屈曲する。西端はSD-601に、南東部はSD-705に切れられ、北東角でSP-703に切れられる。
SD-707	I区 3D	0.45 0.15～0.2 1.8	① ② ③淡灰色粗砂	南北に伸び、南西端は途切れる。北部は調査区外へ至る。
SD-708	I区 4C～5C	0.3～0.4 0.05 1.5	①	南北に伸び、南西端は途切れる。北部は調査区外へ至る。
SD-709	I区 5C	0.45 0.1 4.5		東西～南北にL字形に屈曲する。東部はSD-601に切れ、北部は調査区外へ至る。
SD-710	I区 4E～5E	0.6 0.06～0.1 5.0		東西～南北にL字形に屈曲する。東部は調査区外へ至る。
SD-711	I区 4E～5E	0.5～0.8 0.06～0.1 5.0		南北～北東伸び、南西端・北西端・中央部は途切れる。



※ 高さの基準はT.P.+5.5m



第9図 第6面下層検出遺構断面図 (S = 1/40)

遺構名	地区	法量 (m)	内部堆積土	形状・他の遺構との関係
SP-701	I 区 3 C	幅0.35~0.4 深さ 0.05	①淡青灰色粘質シルト・黒 灰色粘土・粗砂のブロック	平面は南北に長い横円形、断面はさわめて浅い皿形を呈する。SD-704の北東側に位置する。
SP-702	I 区 3 C	0.35 0.2	①、 ②黒灰色粗砂混じり粘土	平面は円形、断面は逆凸字形を呈する。SD-704の南西側に位置する。
SP-703	I 区 3 D	0.4 0.3	①、⑤灰黒色粘質シルト ⑥黒灰色粗砂混じり粘土 ⑦黒灰色粘質シルト	平面は円形、断面は逆凸字形を呈する。SD-706の北東側に位置し、SD-706を切る。
SP-704	I 区 3 D ~ 3 E	0.2~0.3 0.25 ②	① ②	平面は円形、断面は逆凸字形を呈する。SD-707の南東側に位置する。
SP-705	I 区 4 C	0.35~0.4 0.25	⑧補灰色粘質シルト	平面は円形、断面は深い半円形を呈する。上部は削平される。
SP-706	I 区 4 C	0.35~0.4 0.25	④、⑨褐色粘質シルト・青 灰色粘質シルト・粗砂のブ ロック	平面は円形、断面は深い半円形を呈する。
SP-707	I 区 4 E	0.45 0.2	⑩淡青灰色粘質シルト・黒 灰色粘土上のブロック	平面は円形?、断面は深い半円形を呈する。SP-708を切る。上部は削平され、南部は調査区外へ至る。
SP-708	I 区 4 E	0.55~0.65 0.1	⑪、⑫暗灰色粘土（植物遺 体を含む）	平面は円形、断面は深い半円形を呈する。SP-707に切られ、上部は削平される。
SP-709	I 区 4 E	0.25 0.1	⑬	平面は円形、断面は深い半円形を呈し、上部は削平される。
SP-710	I 区 5 D	0.4~0.6 0.4	⑪、⑫青黒色粘質シルト、 ⑬青黒色粗砂混じり粘土、 ⑭	平面は南北に長い横円形、断面は深い逆凸字形を呈する。
SP-711	I 区 5 D ~ 5 E	0.5 0.4	⑮、⑯	平面は馬蹄形～円形、断面は深い逆凸字形を呈する。
SP-712	I 区 5 E	0.5 0.4	⑰	平面は円形、断面は深めの皿形を呈する。

### 5) 出土遺物観察表

番号	器種	出土地区	出土土層	法量 (cm)	色調	地土・焼成	形態・調査等の特徴	備考
1	土器蓋杯 (平安時代)	II 区 北東壁面	第8層	口径 12.4 器高 3.7	褐鐵褐色	密 良好	指揮さえ、ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ	
2	小形蓋台	II 区 北側牆	第12層	口径 9.4	灰茶褐色	密 良好	細かいヘラミガキ、見込みに 抜削状略文	
3	溝杯	I 区～II 区 5 D ~ 5 E	第12層	口径 16.0	灰～淡灰茶褐色	密 良好	ハケ、ナデ、ヨコナデ	
4	高杯	II 区 8 C	第12層	幅径 13.3	明暗褐色	密 良好	(外) ナデ (内) ハケ	孔隙存
6	高杯	II 区 8 C	第12層	幅径 15.0	明暗褐色	密 良好	(外) ナデ (内) ハケ	
6	高杯	II 区 8 C	第12層	幅径 12.4	淡茶褐色	密 良好	ヘラミガキ	
7	高杯	I 区 2 K	第12層	-	淡棕褐色	密 良好	(外) 細かいヘラミガキ (内) シギリ、ナデ	
8	高杯	II 区 北側牆	第12層	-	にぼい灰茶色 ～暗灰褐色	密 良好	(外) ケズリ後ハケ、ヘラナデ (内) シギリ後、ナデ	
9	高杯	II 区 6 C	第12層	-	淡茶褐色	薄～やや粗 良好	(外) ヘラナデ後ハケ (内) ケズリ後ハケ	
10	庄内甕	II 区 8 C	第12層	口径 15.0	淡茶褐色	やや粗 良好	(外) ハケ、ヨコナデ (内) ケズリ、ヨコナデ	
11	甕 (庄内系)	II 区 8 C	第12層	口径 20.0	淡茶褐色	やや粗 良好	(外) ヨコナデ (内) ハケ、ナデ、ヨコナデ	縁付甕
12	甕 (布留系)	II 区 8 C	第12層	口径 14.1	灰茶褐色	密 良好	(外) ナデ、ヨコナデ (内) ケズリ、ヨコナデ	
13	甕 (布留系)	II 区 8 C	第12層	口径 15.1	にぼい灰茶褐色	やや粗 良好	(外) ナデ、ヨコナデ (内) ケズリ、ヨコナデ	縁付甕

番号	種類	出土地区	出土土層	測量 (cm)	色調	胎土・焼成	形態・調整等の特徴	備考
14	甕 (布質系)	II区 8C	第12層	口径 15.5	乳灰褐色	滑 良好	ヨコナデ	
15	甕	II区 8C~8D	第12層	口径 11.4	明灰褐色	滑 良好	(外) ヨコナデ、腰ハケ (内) ナデ、ヨコナデ	
16	布質式甕	II区 北側溝	第12層	口径 11.5	乳灰褐色	やや粗 良好	ヨコナデ、ナデ	
17	布質式甕	II区 7D~8E	第12層	口径 13.0	淡褐色	滑~やや粗 良好	(外) ナデ、ヨコナデ (内) ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ	
18	甕	II区 8C	第14層	口径 18.9	淡明橙色~淡灰褐色	やや粗 良好	ヘラミガキ、ナデ	内面剥離
19	高杯	II区 8C	第14層	口径 13.8	(外) 黒色 (内) 灰褐色	滑~やや粗 良好	(外) 鋸かいヘラミガキ (内) ナデ後放射状ヘラミガキ	
20	高杯	II区 8C	第14層	底径 19.5	淡明灰色	滑 良好	(外) 鋸かい ヘラミガキ (内) ナデ後ハケ	1孔残存?
21	小壺蓋合	II区 8C北側溝	第14層	幅径 10.1	淡灰茶色	滑 良好	ナデ、ヨコナデ	1孔残存
22	製埴土器	II区 8C西側溝	第14層	幅径 5.1	淡乳茶色~暗灰褐色	滑~やや粗 良好	(外) 右上がりタキ、南ナデ (内) ハケ	焼付着
23	甕 (V様式系)	II区 8C	第14層	底径 3.9	灰灰褐色	滑~やや粗 良好	(外) 右上がりタキ、ナデ (内) ハケ	
24	甕 (V様式系)	II区 8C	第14層	口径 16.2	淡灰褐色	やや粗 良好	(外) ヨコナデ (内) ナデ、ヨコナデ	焼付着
25	甕 (店内系)	I区 2H	第14層	口径 16.3	灰茶褐色 (内) 乳灰色	やや粗 良好	ヨコナデ	
26	甕 (布質系)	II区 6C~7C	第14層	口径 14.0	淡茶褐色	やや粗 良好	ヨコナデ	
27	甕 (近江系)	II区 6C~7C	第14層	口径 12.8 器高 24.0	白灰褐色	やや粗 良好	ヨコナデ	ほぼ完存、 表皮剥離
28	小型甕	II区 6C~7C	流路内 304層	口径 9.6 底径 8.0	淡茶灰色	滑~やや粗 良好	(外) 鋸かいヘラミガキ、ナデ (内) ナデ	口縁部1/4、 全体1/2残存
29	小型蓋合	I区 5D	流路内 304層	底径 13.3	明褐色	滑 良好	(外) 鋸かいヘラミガキ (内) ケズリ後ナデ	1孔残存
30	小型杯 (V様式)	I区 3C~4C	第15層	口径 2.4	乳灰褐色	やや粗 良好	(外) ナデ (内) ハケ	
31	鉢 (V様式)	I区 3C~4C	第15層	口径 18.0	灰灰褐色	滑~やや粗 良好	ナデ	
32	甕 (V様式)	I区 2C	第15層	最大径 15.9 底径 3.7	淡黃灰色 底灰褐色	やや粗~粗 良好	(外) ハケ (内) ナデ	
33	甕 (V様式)	I区 3C~4C	第15層	底径 8.0	淡茶褐色	滑~やや粗 良好	(外) 右上がりタキ?、ナデ (内) ナデ	
34	甕 (Ⅲ様式~)	I区・II区西 中央トレンチ	第17層	底径 4.2	灰茶褐色 (内) 黑灰色	滑~やや粗 良好	(外) タキ?、ハケ (内) ナデ	
35	甕 (Ⅲ~Ⅳ様式)	I区 4C西側溝	第15層	底径 10.0	淡茶褐色	粗 良好	調整不明	表皮剥離
36	甕 (Ⅲ~Ⅳ様式)	I区 4C西側溝	第19層	底径 6.8	灰黄色	粗 良好	調整不明	表皮剥離
37	焼用甕 (~Ⅲ様式)	II区 7C	第20層直上	つまみ径 7.0	乳灰褐色	粗 良好	調整不明	表皮剥離
38	円板形土製品 (~Ⅲ様式)	I区 2H	第20層直上	径 4.8~5.4 厚さ 0.8	茶褐色 (内) 淡灰褐色	やや粗~粗 良好	(外) ヘラミガキ (内) ナデ 周縁を削る、	大型の器種名 転用、未成品
39	削片 (~Ⅲ様式)	II区 7C	第20層直上	最大幅 6.1	長さ5.3	厚さ1.7	2側斜に剥離面を有する	サスカイト
40	小型甕 (~Ⅲ様式)	I区 3C~4C	第30層	口径 12.1	乳灰色 ~淡灰茶色	やや粗~粗 良好	調整不明	表皮剥離
41	甕 (~Ⅲ様式)	II区 6D	SI0~502内 21層	口径 16.0	淡茶褐色	やや粗 良好	上下に拡張した口縁部外縁に 2帯の縦状文を有す	焼付着
42	甕 (~Ⅲ様式)	II区 5D	SD~502内 21層	底径 6.7	灰茶褐色	粗 良好	ナデ	
43	砾石 (~Ⅲ様式)	II区 5E	SD~502内 21層	最大幅 7.9	長さ9.3	厚さ6.9	上下端を欠損、3面に使用軌を 有する。	砂岩

#### 4 まとめ

今回の調査の結果、当地の下層部分には、弥生時代後期（第V様式）より前に3時期の生活面のあったことが明らかになった。最下層で検出された小型の溝状遺構や小穴群は、住居の痕跡の可能性もあり、この3時期の遺構の変遷から、弥生時代の集落の動向がわずかでも窺えるものと考えられる。

大型の溝SD-501・SD-502・SD-601は2時期に分かれるが、ともに人為的に埋め立てられている。これらの溝埋め立て後、第4面で溝SD-401が開削されるまでの間、当調査地内で遺構は構築されていないことから、第5面の溝SD-501・SD-502の埋め立てとともに、一時期集落が廃絶したことが考えられる。

第5面より上層に堆積する第17層からは、弥生時代後期前半を下限とする土器（34）、第5面遺構構築ベース直上に堆積する第19層からは、弥生時代中期前半の土器類（35・36）が出土している。また、第5面遺構構築ベースをなす第20層直上からは弥生時代前期～中期前半までの土器類（37～39）、第20層中からは弥生時代中期の土器類（40）が出土しており、SD-502内部のブロック層からは弥生時代中期後半の土器類（41～43）が出土していることから、各溝の掘削・埋め立ての時期は、以下のようになる。

SD-601が掘削された時期は不明であるが、直上に堆積する第20層中の小型壺（40）から、弥生時代中期前葉（II様式）を含めて、それより後の時期にはすでに埋められていることがわかる。次いでSD-501・SD-502が掘削されるわけであるが、SD-502内部の簾状文の壺など（41・42）から、弥生時代中期中葉（III様式）を含めて、それより後には、すでに埋められていたことがわかり、SD-601の埋め立てからSD-501・SD-502の掘削に至るまでの時期差はあまりないものと考えられる。さらに、最下の小遺構群の掘削時期には、SD-601掘削以前の弥生時代中期前葉（II様式）までの時期が与えられるが、この間にも時期的な隔たりはそれほどないものと思われる。このように、当地では、早くも弥生時代中期前葉（II様式）には生活が開始され、中葉（III様式）に一旦廃絶してしまうようである。

その後、第4面の溝SD-401が掘削されるが、この溝が機能していた時期は、第17層出土の壺底部（34）・第15層出土の土器類（30～33）などから弥生時代後期（第V様式）中頃までであると思われるが、この溝は、同後期後半にはすでに埋没してしまう。第5面での生活が放棄されてから、この第4面の溝SD-401掘削に至るまでの空白期間は、最大で弥生時代中期後葉から後期（IV様式～第V様式）までの間であろう。

統いて第3面で流路が形成されるが、内部の出土遺物（28・29）から、この流路の時期は古墳時代前期中頃（布留式古相）で、古墳時代前期後半（布留式新相）には完全に埋没しまっ

たことが、直上第14層の出土遺物（18~27）からわかる。

その後は古墳時代中期初頭までに第12層・第13層が堆積し、やがて当地は河川（旧平野川）の流路によって埋没してしまうが、この河川は平安時代中期初頭までに埋没することが、第8層出土遺物（1）からわかる。この河川に符合する堆積層や洪水層などは、跡部遺跡では南部のA10（AT94-6）・A23（AT94-17）・A24（AT94-18）、太子堂遺跡のT2（市教委昭和62年度調査地）・T7（TS94-6）・植松遺跡のU1（市教委90-433）・U3（UM92-2）などの各地点でもみられる。

河川内部には古墳時代後期以降の遺物が認められることから、旧平野川の流路がこれらの地点を流れている時期は、河川内部の出土遺物から、古墳時代後期以降であることがわかる。

一方、当調査地の東約100mに位置するA9地点（AT93-13）では、溝SD-501・SD-502に対応する時期の大規模な溝が3条検出されている。その北隣の調査地A15地点（AT92-10）では、弥生時代前期末から後期後半にかけての溝が数条検出されていることから、調査地点がこの溝に一致していることも考えられ、さらに北から東側に数条の溝がめぐる可能性もある。

このA9地点（AT93-13）の3条の溝には堤状の盛土が遺存しており、溝内は自然に堆積した状況が認められる。当調査地の溝に堤は認められなかったが、溝内に充填されているブロック層が堤を構成する盛土であった可能性があり、堤を壊して埋

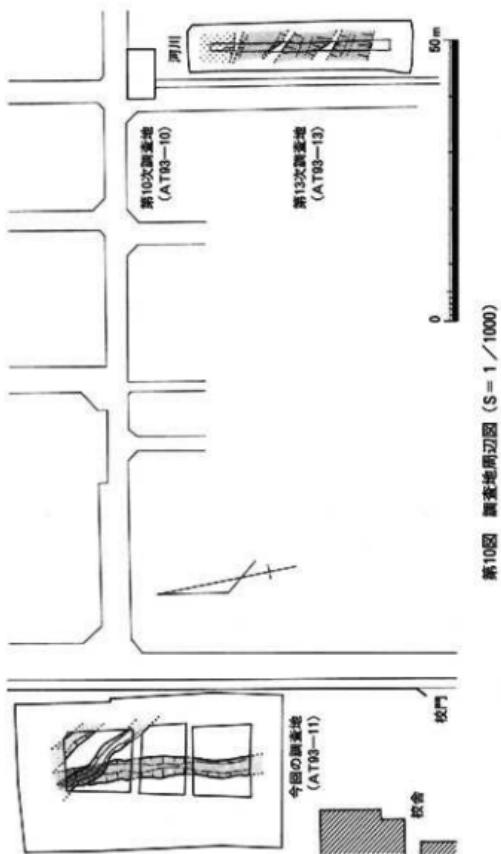
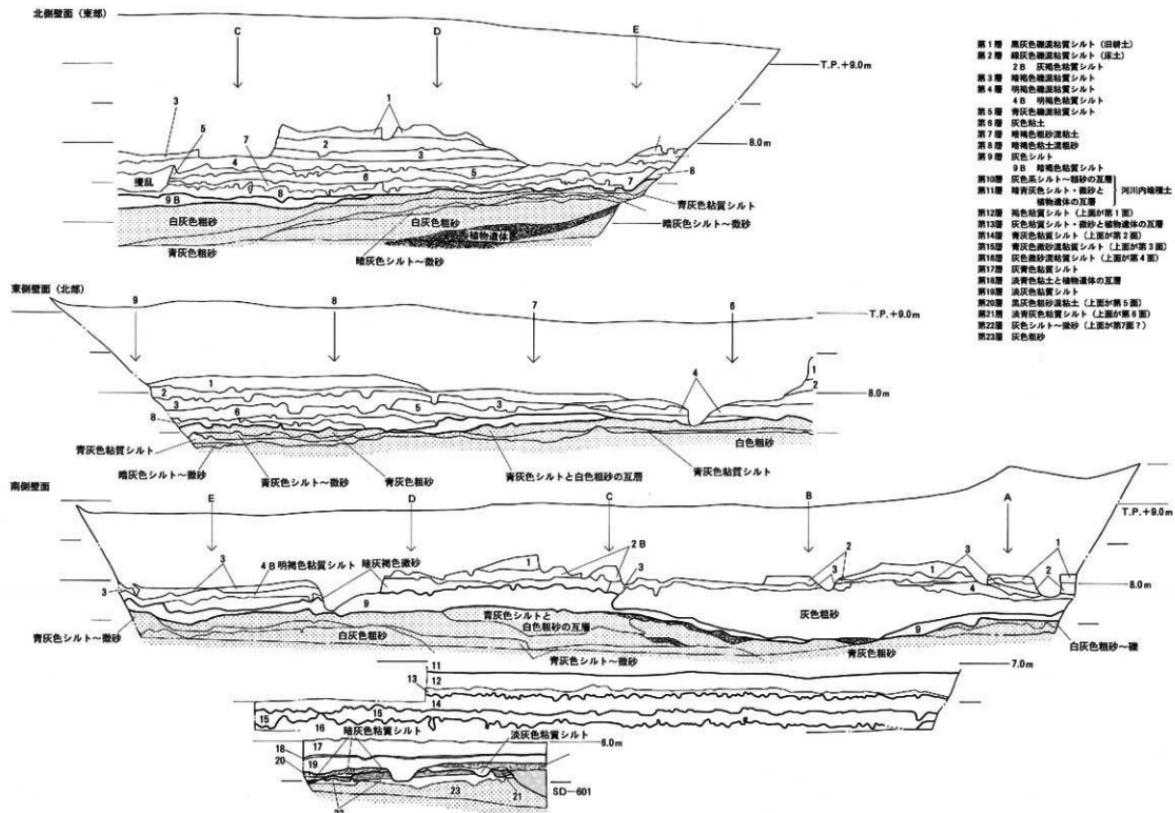


図10図 調査地周辺図 (S=1/1000)

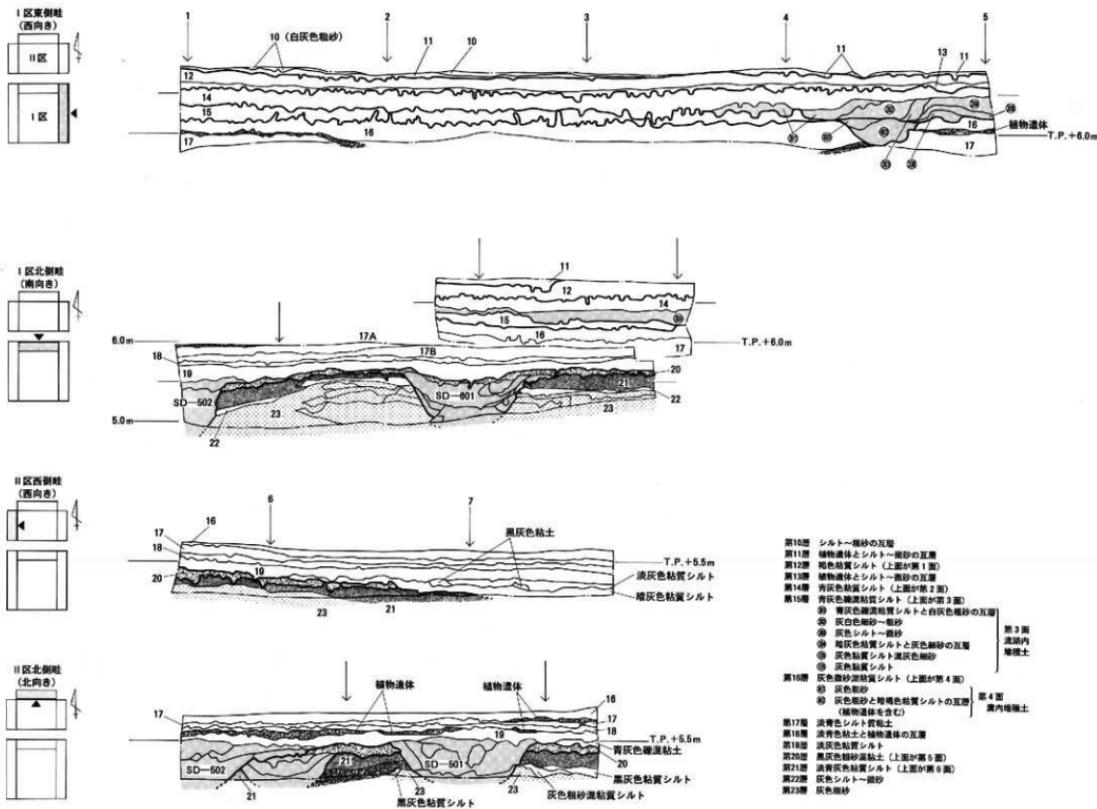
め立てられたことも考えられる。

なお、当調査地の北200mのには、銅鐸出土地であるA9地点（AT89-5）があり、当調査地の溝開削・埋め立ての時期が、銅鐸製作や使用の時期に一致することは重要なポイントであるといえ、今後周辺の調査に注意が必要であろう。

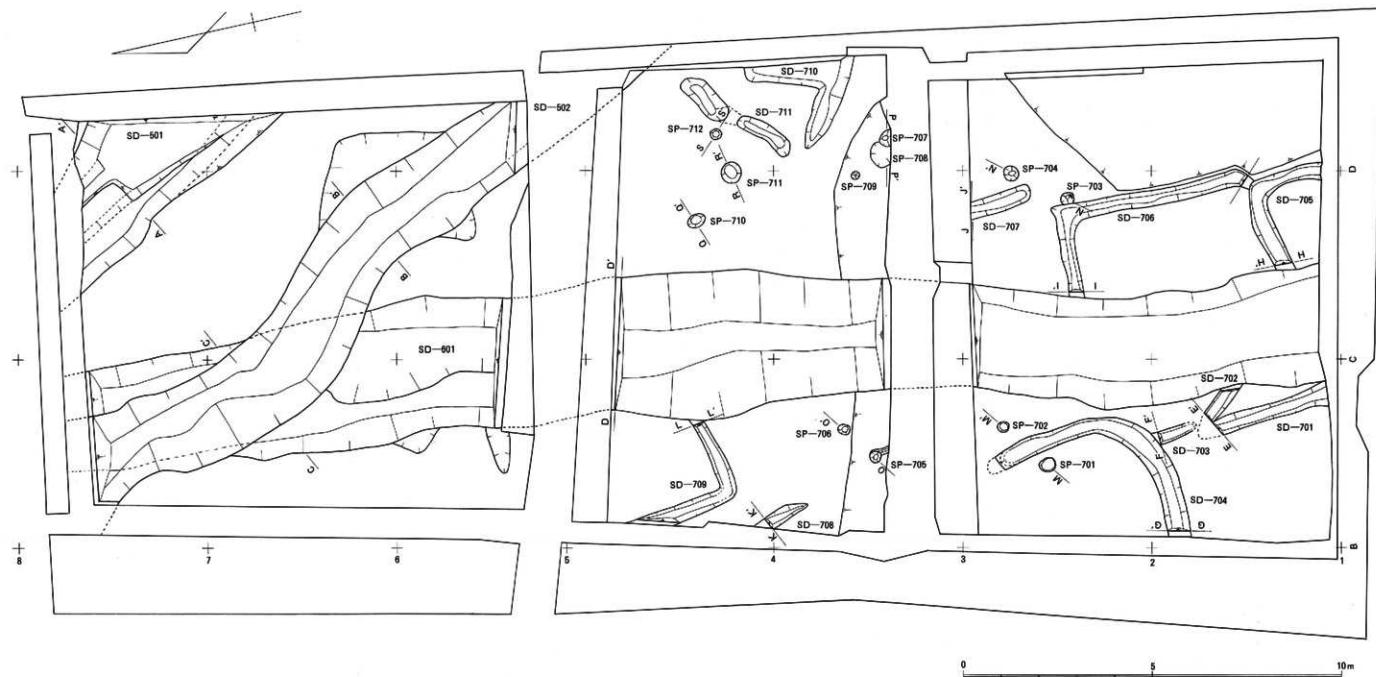
また、最下層の遺構面より下に堆積する第23層直上には、部分的に有機物を含む土層堆積が認められること、当調査地の東250mのA18地点（AT93-12）・北西350mのA23地点（AT94-17）でも弥生時代前期にまで遡り得る遺構が検出されていること、近隣に位置するA9地点（AT89-5）・A15地点（AT92-10）・A19地点（AT93-13）でも弥生時代前期の良好な遺物が含まれていることなどから、この付近においては、さらに下層の弥生時代前期までを調査対象とする必要があるものと考えられる。



第11図 上層壁面図 (水平S = 1/100, 垂直S = 1/50)



第12図 下層管面図(水平S=1/100, 垂直S=1/50)



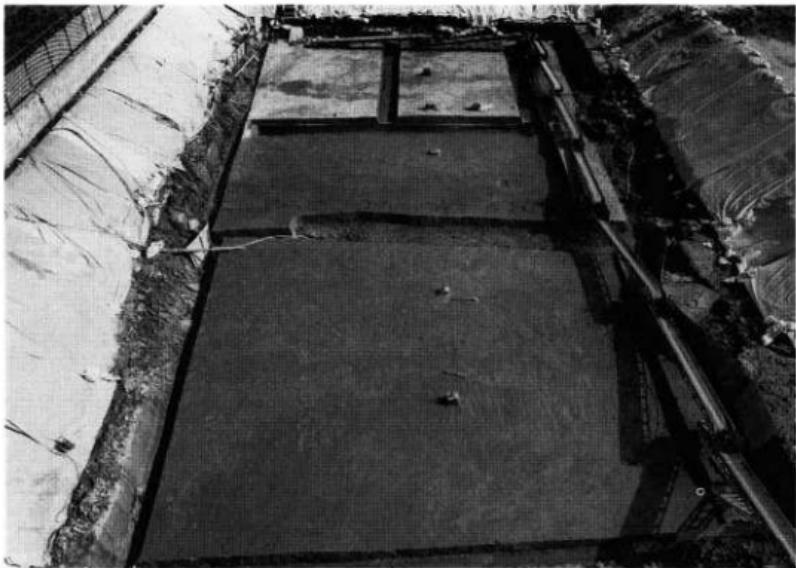
第13図 第5面～第7面 検出造構平面図 (S=1/100)



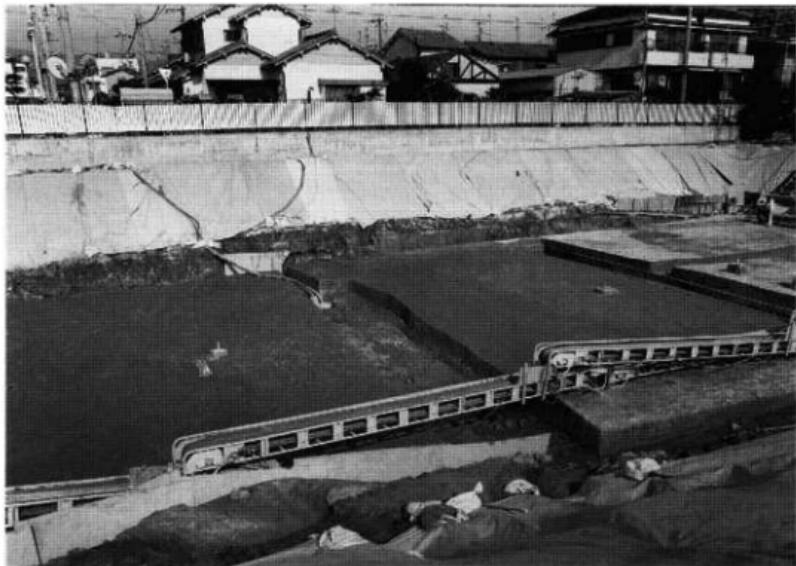
第3面全景（北から）



同上部分（東から）



第4面全景（北から）



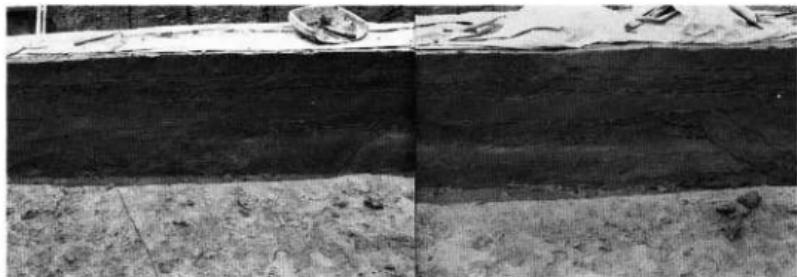
同上部分（西から）



第5面・第6面（北から）



同上全景（南から）



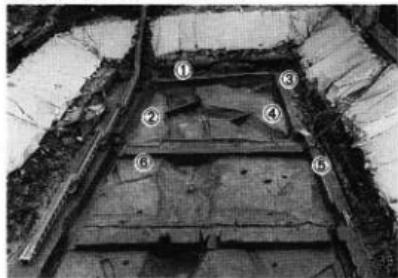
①北側畦



②溝SD-502・SD-801セクション



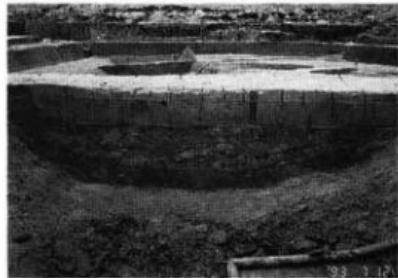
③溝SD-501セクション



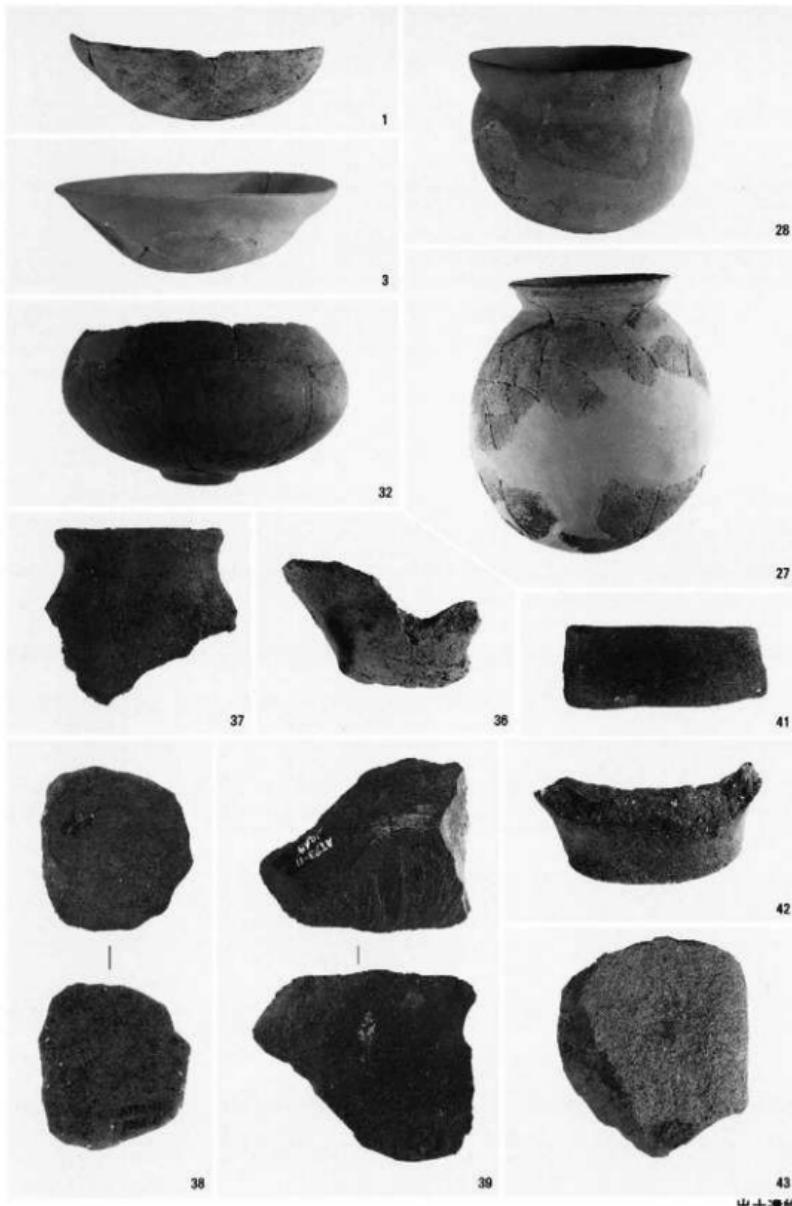
④溝SD-502セクション



⑤Ⅰ区北側溝（溝SD-501）



⑥Ⅰ区北側畦（溝SD-501）



出土遺物



### III 跡部遺跡第15次調查 (AT93-15)

此次調查在前次調查的基礎上，繼續進行。調查範圍擴大到北側和東側，並對南側的遺跡進行了進一步的調查。在北側，發現了一處新的遺跡，位於北側的山腳下，距離上次調查點約100米。這處遺跡由幾塊石頭堆砌而成，形狀不規則，表面有明顯的磨損痕跡。在東側，發現了一處新的遺跡，位於東側的山腳下，距離上次調查點約150米。這處遺跡由幾塊石頭堆砌而成，形狀不規則，表面有明顯的磨損痕跡。在南側，發現了一處新的遺跡，位於南側的山腳下，距離上次調查點約200米。這處遺跡由幾塊石頭堆砌而成，形狀不規則，表面有明顯的磨損痕跡。

## 第三章

在這次調查中，發現了多處新的遺跡。這些遺跡主要分布在北側、東側和南側的山腳下。這些遺跡由幾塊石頭堆砌而成，形狀不規則，表面有明顯的磨損痕跡。這些遺跡可能屬於同一個時期，但由於缺乏更多的考古學證據，無法確定其確切年代。這些遺跡的發現，為我們提供了更多的考古學資訊，有助於我們更好地了解該地區的歷史和文化。

## 例　　言

- 1 本書は、八尾市春日町1丁目2～44番地先で実施した公共下水道（平成5年度 第19工区）に伴う発掘調査の報告書である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第15次調査（AT93-15）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第75号 平成5年10月1日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成5年12月13日～平成6年1月27日（実働13日間）にかけて岡田清一を調査担当者として実施した。調査面積は、約34m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては辻野優子・吉田由美恵が参加した。
- 1 本書に関わる業務は、遺物実測－澤村妙子・吉田、図面トレース－北原清子、遺物写真撮影－岡田が行なった。
- 1 本書の執筆・編集は岡田が行なった。

## 本　文　目　次

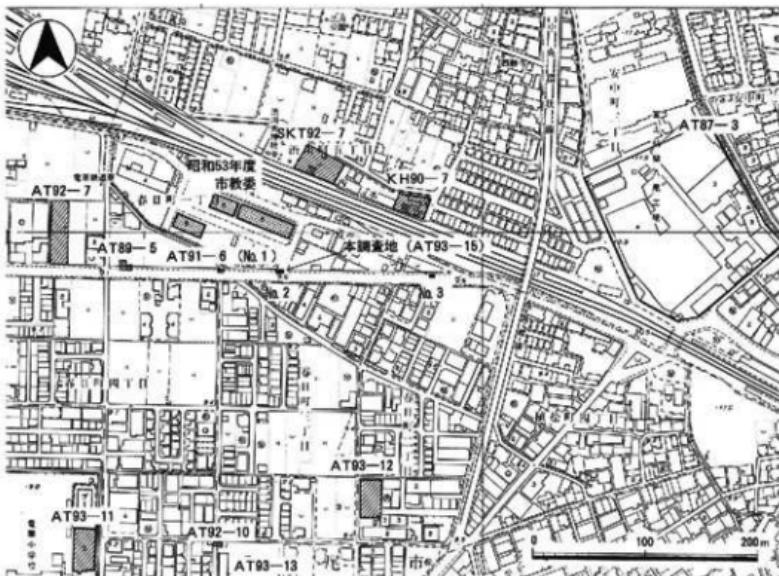
1 はじめに.....	49
2 調査概要	
1) 調査の方法と経過.....	50
2) 基本層序.....	51
3) 検出遺構と出土遺物.....	52
4) 出土遺物観察表.....	57
3まとめ.....	59

### III 跡部遺跡第15次調査 (AT93-15)

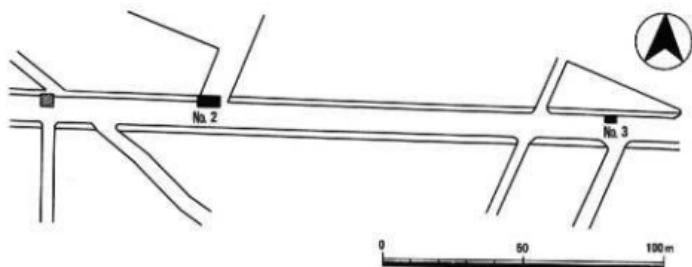
#### 1 はじめに

跡部遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸にあたる沖積地上に位置する。遺跡の推定範囲は、東西約1.5km・南北約0.5~0.7kmを測る東西方向に長い地域である。現在の行政区画上では八尾市の西部に位置し、跡部本町1~4丁目、跡部北の町1・2丁目、太子堂1・2丁目、東太子堂1丁目、春日町2~4丁目に所在する。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡があり、さらに当遺跡の北部には一説に物部守屋の旧蹟の跡に建てられたと伝えられる寺院跡「渋川廃寺」推定地が所在している。渋川廃寺については、平成2年度に渋川天神社の東側で当調査研究会が実施した渋川廃寺第1次調査(SKT90-1)で、創建期を示す建物群や区画溝を検出、さらに特筆すべき出土遺物に講堂・金堂などの建物の存在を示唆する「鶴尾」があり、寺院の一角を判明するに至った。

当遺跡は現在までに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会においても数多くの調査が実施



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図

されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。本調査地の近隣では、西に約50m地点で平成3年度に実施された第6次調査（AT91-6　今回の下水道工事のNo.1立坑部分にあたる）で、弥生時代前期・古墳時代前期・奈良時代の遺構・遺物を検出<sup>註2</sup>している。さらにそれより西に約50m地点では、平成元年度に実施された第5次調査（AT89-5）で、弥生時代後期末以前に埋められた銅鐸およびその埋納壙、古墳時代前期の竪穴住居、<sup>註3</sup>平安時代後期の土坑が検出されている。

## 2 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（5-19工区）に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施する第15次調査にある。調査対象となった立坑は西のNo.2地区（発進立坑）と東のNo.3地区（到達立坑）の2箇所で、No.1地区については既述したように平成3年度の第6次調査において既に調査済みである。調査区の規模はNo.2地区が4m×7mの面積約28m<sup>2</sup>、No.3地区が2m×3mの面積約6m<sup>2</sup>で総面積は約34m<sup>2</sup>を測る。掘削深度については工事に伴い、No.2地区が現地表（標高9.7m前後）下6.5m前後、No.3地区が現地表（標高9.7m前後）下5.0m前後を測る。掘削方法は現地表から0.7m前後間に堆積する第1層盛土および擾乱層部分を重機により掘削した後、最深部まで周辺の調査結果を参考に重機と人力を併用して掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、No.2地区において現地表下2.7m前後（標高7.0m前後）の第12層暗オリーブ灰色シルト層上面で古墳時代前期に比定される土坑1基（SK-101）、さらに同地区標高3.5m前後の第27層明オリーブ灰色粘土層上面で縄文時代晚期頃と推定される自然流路1条（NR-201）を検出した。

## 2) 基本層序

両地区において36層を数える堆積層を確認した。各層序名の詳細については第3図に掲載・表記するものである。本項では、各層内からの出土遺物および周辺の調査結果を踏まえながら、時代別に捉えることができた主要な土層についてのみ列記する。

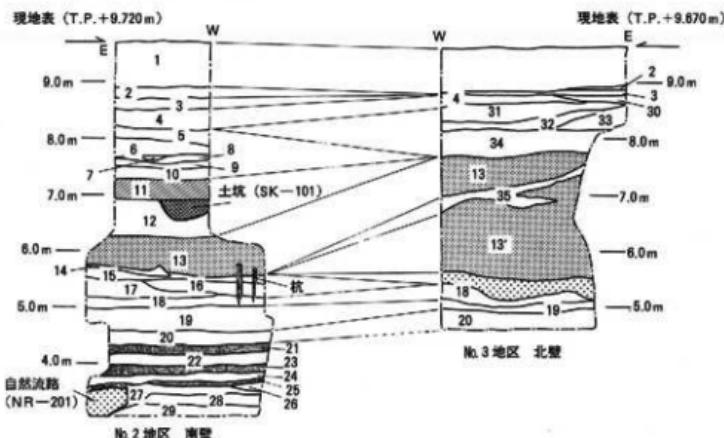
第1層：盛土および擾乱（層厚70cm前後）。道路建設の際に伴う現代の客土層である。

第2層：灰黒色砂質シルト（層厚10~20cm）。旧耕土にあたる堆積層である。No.3地区では大半が上層の擾乱によって削平されている。

第3層：暗緑灰色粘質土（層厚15~20cm）。近世陶磁器の小破片が僅かに含まれる。

第4層：淡灰褐色粘質シルト（層厚10~30cm）。鎌倉時代末頃に比定される土師器皿および瓦器碗の破片を少量含む。

第6層：褐色シルト（層厚10~30cm）。No.3地区には見られない。中世の所産と思われる土師器の小破片を含む。



第3図 土層断面図

第7層：黄灰色粘質土。No.2地区において確認した平安時代末頃に比定される耕作溝の埋土とおもわれる。規模は土層断面観察から幅30cm前後、深さ10cm前後を測る。

第11層：灰黒色シルト～粘質土（層厚25cm前後）。No.3地区には見られない。本層内には、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器類が包含される。調査区（No.2地区）内では、東部へいくほど希薄になる。

第12層：暗オリーブ灰色シルト（層厚80cm前後）。No.3地区には見られない。粘土質シルトがブロック状に混入する比較的厚い堆積層である。本層上面が古墳時代前期（布留式古相）に比定される土坑1基（SK-101）を検出した遺構面となる。上面の標高は7.0m前後を測る。

第13層および第13'層：灰白色極細粒砂～中粒砂（層厚50～220cm）。部分的に細礫が挟在する。層内には遺物はみられなかったが、第6次調査結果から弥生時代前期に比定される埋没河川あるいはその洪水層にあたる堆積層とおもわれる。両地区共に本層内からの湧水は著しい。本層の下部では、打設された6本の護岸杭が幅1m間で基部のみ検出された。杭の法量は、径4cm前後・残存長30～40cmを測る。これらの護岸杭は、水田畦畔の補強等何らかの役割を果たしたものと考えられ、下層の第14層灰色  
註4微砂混粘土が水田耕土となる可能性が高い。

秦以下、No.2地区

第20層～第25層：淡灰色粘土（第20層・第22層・第24層）と灰黒色粘土（第21層・第23層・第25層）の互層で、層厚は標高約3.5m～約4.2m間の0.7m前後を測る。灰黒色粘土内に含まれる植物遺体から、沼地状であった土地景観を暗示させる。

第27層：明オリーブ灰色粘土（層厚10～30cm）。本層上面（標高3.5m前後）において、縄文時代晚期頃と推定される自然流路（NR-201）1条を検出した。

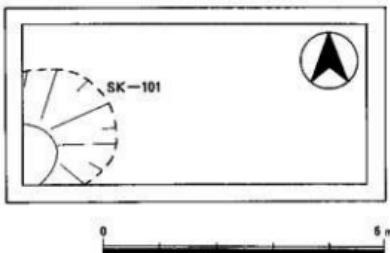
### 3) 検出遺構と出土遺物

#### [古墳時代前期]

##### 土坑（SK）

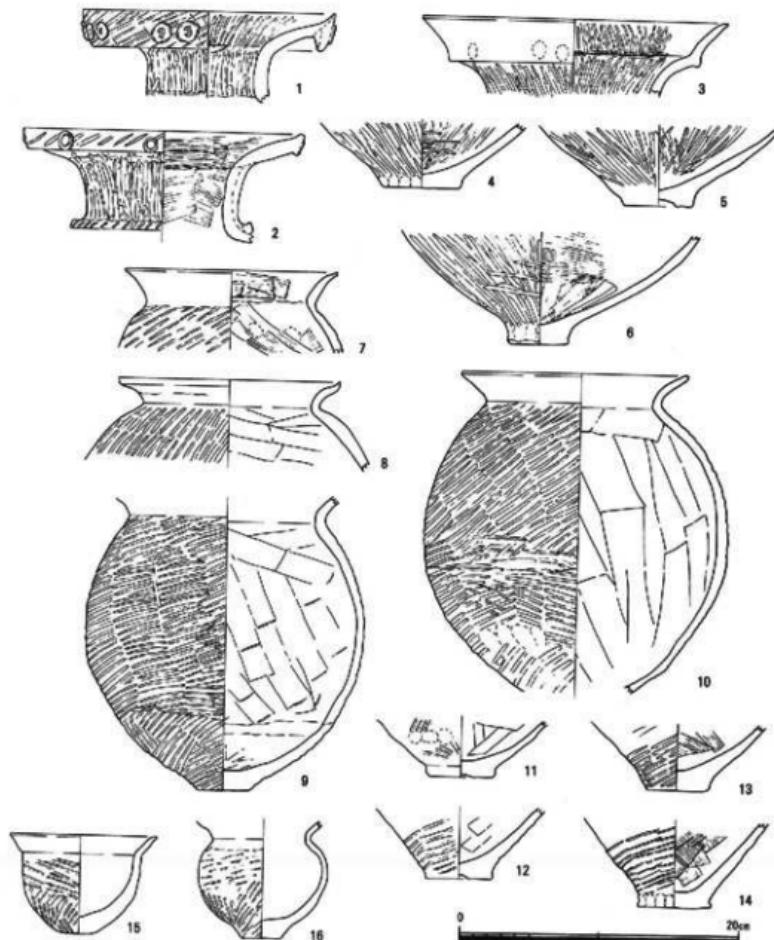
###### SK-101

No.2地区の南西隅で検出した。重機掘削によって遺構本来の上面を削平してしまったことに加えて、遺構の南部および西部が調査区外に至っている為、全容は不明である。検出規模は推定で径1.5m前後・深さ0.5m前後を測るものと思われる。遺構内埋土は上層が暗



第4図 No.2地区 第1遺構面実測図

灰色粘土質シルト、下層が灰黒色粘土質シルトの2層に分層でき、下層には炭化物が混入する。遺物は下層からは弥生時代後期末に比定される土器類、上層から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器類が、コンテナ箱（幅40cm×長さ60cm×深さ20cm）で約3箱分出土した。本土坑については、弥生時代の生活面を削平して古墳時代の生活面が形成されたと解釈する一方で、土坑内下層遺物とした弥生時代後期末に比定される土器類の比較的まとまった出土の在り



第5図 SK-101下層内出土遺物実測図

方の不自然さに懸念がもたれる。周辺の調査における弥生時代後期の遺構面検出例から、本来後世において削平および擾乱されない弥生時代後期末の遺物包含層として遺存していた可能性も含まれ、土坑内の一括遺物とする捉え方に危惧されるところがあり、今後周辺の調査の累積を待って再検討を要しよう。以下、遺構内の上層および下層から出土した遺物のうち復原・図化できたものについて器種毎に概説していきたい。なお、形態上の分類および時期的位置付けに関して、弥生時代後期末の遺物については寺沢薰・森岡秀人両氏の様式と編年、古墳時代前期の遺物については原田分類に従った。  
註5

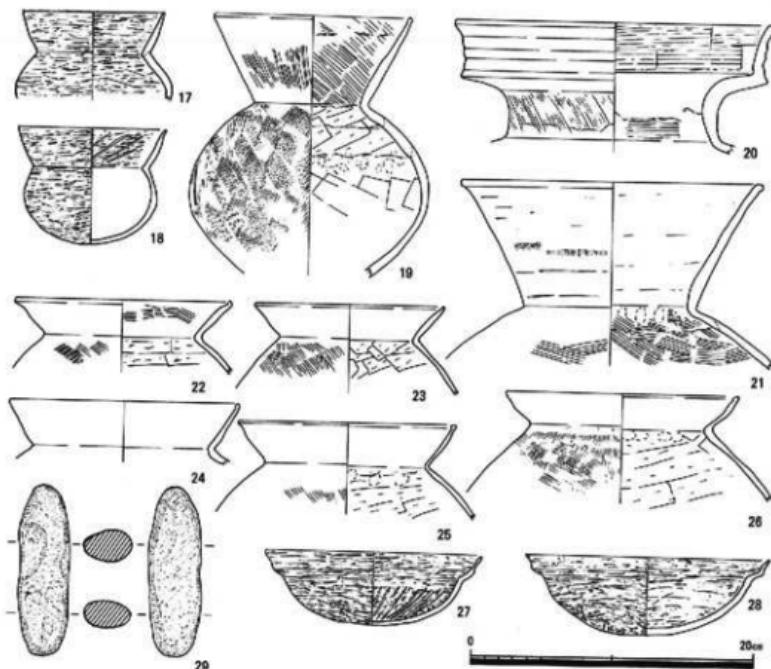
註6

#### ＜下層内出土遺物（弥生時代後期末）＞

壺6点（1～6）、甕8点（7～14）、小型鉢2点（15・16）の計16点である。下層から出土した遺物を両氏の編年で考察すると、従来の第V様式土器の後半部分を分離させた第VI様式に比定される。（1・2）の広口壺は、直立する頸部に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部外面は円形浮文の貼付けによって加飾される。（3）の広口甕は、外反する口縁部上にさらに別の口縁部を付加した新器種となる二重口縁広口甕で、付加した口縁端部外面には（1・2）のような円形浮文を施した痕跡が認められる。以上3点の壺についてはVI-1様式の範疇であろう。甕は本様式では最大径が胴部の中半にある（9・10）が主体となり、下半のタタキ方向が異なる。口縁端部は尖るもの（7）、つまり上げるもの（8）、丸く納めるもの（10）と多様である。甕についてはVI-2様式の範疇に納まるであろう。小型鉢（15・16）は本様式では盛行期となる。いずれもタタキが明瞭にみられるが、口縁部や底部に形態の違いが窺われ多様である。

#### ＜上層内出土遺物＞

小型壺2点（17・18）、直口甕1点（19）、複合口縁甕1点（20）、大型直口甕1点（21）、甕5点（22～26）、鉢2点（27・28）、敲石1点（29）の13点である。（17・18）の小型甕は、口径と体部最大径がほぼ等しく、外面はヘラミガキが施される。原田分類では小型甕B1にあたり、布留式古相に位置付けられる。（19・21）の直口甕のうち、（19）はやや球形の体部から上外方に直線的に伸びる口縁部が付く直口甕A1にあたるが、体部外面に施されるハケナデはやや粗めのハケメ（左上がり）後に細いハケメ（右上がり）が施される類例の少ないものである。（21）は口縁部がやや外反気味に伸びる大型直口甕Aにあたる。いずれも布留式古相にみられる。（20）は複合口縁甕いわゆる二重口縁甕で、二段に屈曲して上方へ直線的に伸びる口縁部を持つ大型のもので、頸部の内外面上に上段の口縁部を接続した接合（痕）跡が顕著に窺われる。時期的に布留式古相に位置付けられる。甕についてはすべて布留式古相の所産である。（22）はいわゆる河内型で、体部が球形に近くなると推察できる甕B4にあたる。（23）は布留式影響の庄内式甕で、分類では甕Dにあたる。体部外面のタタキがハケナデによって消去されているのが窺われる。一方、甕（24～26）はいわゆる布留式甕で、分類では甕F1にあたる。



第6図 SK-101上層内出土物実測図

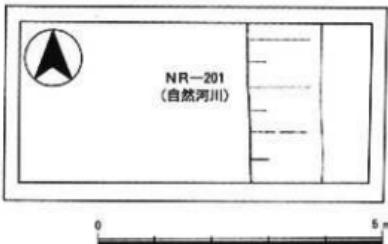
うち(24・25)は口縁屈曲部の彎曲化と口縁端部が丸味をもって肥厚する。(26)については、体外面の調整から先述の甕Dの技法を残すものである。(27・28)は、半球形の底部に短く斜上方に伸びる口縁部が付く精製品の小型鉢である。分類では口縁部が二段に屈曲する鉢H2にあたり、布留式古相に位置付けられる。敲石(29)の片面には径3cm前後の敲打痕が顕著に認められる。

## &lt;縄文時代晩期&gt;

自然流路(NR)

NR-201

No.2地区東部において、自然流路の西岸とみられる部分を検出した。切り込み面は第27層明オリーブ灰色粘土上面(標高3.5m前後)からで、検出規模は最大幅2.5m前後・深さについては最深部まで検出できなかったが、1m以上



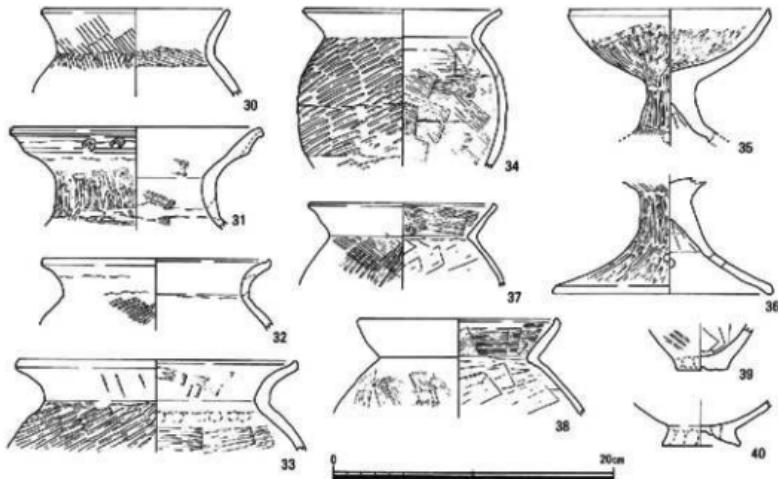
第7図 No.2地区 第2構造面実測図

は測られる。埋土は灰白色細粒砂～中粒砂で内部から遺物は検出されなかつたので明確な時期決定はできないが、河内平野の諸例から縄文時代晩期以前と考えられる。

註7

〔遺構に伴わない出土遺物〕

遺構に伴わない出土遺物のほとんどはNo.2地区の第11層からで、弥生時代後期末～古墳時代前期に比定される土器類がコンテナ箱にして約2/3出土した。その中で復原・図化できたものは総数11点で、弥生時代後期末（VI-1様式）に比定されるものが、壺2点（30・31）・甕3点（32～34）・高杯2点（35・36）、古墳時代前期（布留式古相）に比定されるものが、甕3点（37～39）・台付き鉢と見られるもの1点（40）である。（30）はやや外反気味の口頸部をもつ短頸壺である。（31）は曲線的な口縁部をもつ広口壺口縁部上に、別の口縁部を付加したもので二重口縁広口壺の母胎とも言えるものである。（32～34）の甕は、体部内面におけるヘラケズリ技法はまだ見れない。また（33）の頸部外面には接合（痕）部分をヘラナデによって摺り演している状況が窺える。（35・36）の高杯は、浅い椀状杯部から口径に及ぶほど裾部が進行する当該期に特徴的な形態のものと思われる。（37）はいわゆる河内型庄内式甕で甕B4、（38）は布留式影響の甕Dにそれぞれあたる。（40）の台付き鉢底部には穿孔がみられる。



第8図 遺構に伴わない出土遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

東北土-数字-最大粒子径(cm)/鉱物-長(長石)・雲(雲母)・石(石英)・角(角閃石)・チ(チャート)								
遺物番号 圆盤番号	基盤 出土地点	法量 (cm) 口径	口徑 (cm) 底径	調整・手法	色調 外表面 内面	粘土	焼成 温度	備考
1 三	広口壺 (弥生土器) SK-101	18.1		- 外面: ハケナデ(4本/cm)、ヘラミガキ、円形浮文付加 - 内面: ヘラミガキ	赤褐色	1/長、雲、角	良好 口縁部~ 腹部1/3	
2 二	同上	20.0		- 外面: ヘラミガキ、ヘラミガキ、円形浮文付加 - 内面: ヘラミガキ、ハケナデ(10本/cm)	淡黄灰色	2/長	良好 口縁部~ 腹部1/6	
3 二	同上	21.6		- 外面: ヨコナデ、ヘラミガキ、円形浮文付加の痕跡有り - 内面: ヨコナデ後ヘラミガキ、ヘラミガキ、ナデ	褐灰色	1/長、雲、角	良好 口縁部~ 腹部1/6	
4 一	壺 (弥生土器) SK-101	24.0	5.4	- 外面: ヘラミガキ、ユビオサエ - 内面: ヘラミガキ	淡茶褐色	4/長、雲、石	良好 底部のみ	
5 二	同上	24.0	4.8	- 外面: ヘラミガキ - 内面: ヘラミガキ	赤褐色	3/長、雲、石	良好 底部のみ	
6 二	同上	24.0	4.2	- 外面: ヘラミガキ、ユビオサエ - 内面: ハケナデ(10本/cm)、ヘラケズリ	暗茶色	1/長	良好 底部のみ 外面に黒斑を有する	
7 一	壺 (弥生土器) SK-101	15.0		- 外面: ヨコナデ、タタキ(3本/ cm)、接合部1条 - 内面: ヨコナデ後ヘラナデ、ハ ケナデ(8本/cm)、接合部1条	淡黄茶色	2/長、雲、チ	良好 口縁部 1/4	
8 二	同上	16.0		- 外面: ヨコナデ、タタキ(3本/ cm)、接合部1条 - 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	淡灰茶色	5/長、雲、石	良好 口縁部~ 腹部1/5 底を有する	
9 二	同上	19.7	3.7	- 外面: タタキ(3本/cm)、接合 部1条 - 内面: ヘラナデ、接合部2条	茶灰色	3/長、チ	良好 体部~底 部1/2 外面に黒斑を 有する	
10 二	同上	16.0		- 外面: ヨコナデ、タタキ(2~ 3本/cm)、ユビオサエ、接合部 1条 21.7 底径 内腹1条	赤褐色	1/長、雲	良好 3/5 体部外下位 に煤付着	
11 一	壺 (弥生土器) SK-101	4.4		- 外面: タタキ(3本/cm)、ユビ オサエ - 内面: ヘラナデ	灰褐色	3/長、雲、石	良好 底部のみ 内面に煤付着	
12 一	同上	4.6		- 外面: タタキ(2本/cm) - 内面: ヘラナデ	外/淡灰色 内/暗灰色	5/長、雲	良好 底部のみ 内面に煤付着	
13 一	同上	4.3		- 外面: タタキ(3本/cm) - 内面: ヘラナデ	外/赤褐色 内/暗灰色	4/長、石	良好 底部のみ 内面に煤付着	
14 一	同上	5.0		- 外面: タタキ(2本/cm) - 内面: ヘラナデ	外/暗褐色 内/暗灰色	4/長、石	良好 底部のみ 内面に煤付着	
15 三	小型壺 (弥生土器) SK-101	10.4 7.0 cm	2.1	外面: ヨコナデ、タタキ(3本/ cm) 内面: ヨコナデ、ナデ	外/暗灰色 内/暗褐色	3/長、雲	良好 1/2 体部外下位 に黒斑を有する	
16 三	同上	2.7		- 外面: ヨコナデ、タタキ(4本/ cm) 内面: ヨコナデ、ナデ	赤褐色	1/長、雲、角	良好 口縁部 欠損	

遺物番号 出版番号	器種 出土地点	法量 (cm) 基高	調整・手法	色調/外面 内面	粘土	焼成度	備考
17 三	小型壺 (土師器) SK-101	10.0 - 外面: ハラミガキ 内面: ハラミガキ、接合板1条	暗褐色	1/長	良好	口縁部～ 肩部1/4	外面に黒斑を 有する
18 二	同上	10.6 8.3 外面: ハラミガキ 内面: ハラミガキ、ナデ	淡茶褐色	1/長、石	良好	ほぼ完形	外面に黒斑を 有する
19 四	直口壺 (土師器) SK-101	14.0 16.8 外面: ハケナデ (6～7本/cm)、 タキ (7本/cm) 後ハケナデ (10本/cm)、ハラミガキ 内面: ハケナデ (6～7本/cm)、 ハラナデ、ユビオサエ、接合板 3条	暗茶褐色	2/長、端、角	良好	3/5	体部外面下位 に煤付着
20 四	複合口縁壺 (土師器) SK-101	23.1 外面: ヨコナデ、ハケナデ (8 本/cm)、接合板1条 内面: ヨコナデ後ハラナデ、ナ デ、ハケナデ (8本/cm)、接合 板1条	淡黃灰色	1/長、端	良好	口縁部～ 肩部1/2	体部外面下位 に煤付着
21 四	直口壺 (土師器) SK-101	21.0 外面: ヨコナデ、ハケナデ (7 本/cm) 内面: ヨコナデ、ハケナデ (7 本/cm)、ユビオサエ、接合板1 条	茶褐色	2/長、端、角	良好	3/5	
22 四	壺 (土師器) SK-101	15.2 外面: ヨコナデ、タキ (5本 /cm) 後ハケナデ (8本/cm) 内面: ヨコナデ後ハケナデ (6 本/cm)、ハラケズリ	茶褐色	3/長、端	良好	口縁部～ 肩部3/4	
23 四	同上	13.2 外面: ヨコナデ、ハケナデ (11 本/cm) 内面: ヨコナデ、ハラケズリ	外/淡茶褐色 内/茶褐色	4/長、端、角	良好	口縁部～ 肩部1/4	外面に煤付着
24 四	同上	16.2 外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	外/淡茶褐色 内/淡灰色	3/長、端	良好	1/縁部 1/3	外面に黒斑を 有する 外面に煤付着
25 四	同上	15.4 外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ハラケズリ、 ユビオサエ	赤褐色	2/長、端、石、 角	良好	口縁部～ 肩部1/5	外面に黒斑を 有する
26 四	同上	16.4 外面: ヨコナデ、ハケナデ (12 本/cm) 内面: ヨコナデ後ハケナデ (11 本/cm)、ハラケズリ、ユビオサ エ	淡乳灰色	2/長、端、石	良好	1/縁部～ 肩部1/7	
27 四	鉢 (土師器) SK-101	15.3 外面: ハラミガキ 5.2 内面: ハラミガキ	茶褐色	1/長、端	良好	1/3	口縁部外間に 黒斑を有する
28 四	同上	17.2 外面: ヨコナデ、ハラミガキ 5.5 内面: ヨコナデ、ハラミガキ	外/灰茶色 内/灰褐色	1/長、端	良好	1/2	体部外側に黒 斑を有する
30 四	短脚壺 (発生土器) 包含層	13.0 外面: ヨコナデ後ハケナデ (7 本/cm)、ハケナデ (7本/cm) 内面: ヨコナデ、ハケナデ (7 本/cm)	淡乳灰色	4/長、端	良好	口縁部～ 肩部1/4	
31 四	広口壺 (発生土器) 包含層	17.5 外面: ヨコナデ、ハラミガキ、 ヘラ状の線彫り、接合板3条 内面: ヨコナデ、ナデ、ハケナ デ、接合板2条	褐色	3/長	良好	1/縁部 1/3	口縁部内面に 黒斑を有する
32 四	壺 (発生土器) 包含層	16.0 外面: ヨコナデ、タキ、接合 板2条 内面: ヨコナデ、ナデ、接合 板1条	赤茶色～暗茶 色	1/長、角	良好	口縁部～ 肩部1/5	
33 四	壺 (発生土器) 包含層	19.7 外面: ヨコナデ、ハケナデ、タ キ (3本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、 ハラナデ	外/灰褐色 内/暗茶色	4/長、石	良好	口縁部～ 肩部1/4	内面に煤付着

遺物番号 図版番号	岩層 出土地点	底面 口径 (cm) 器高	測定・手法	色調/外面 内面	胎土	焼成	遺存度	備考
34 四	甕 (弥生土器) 包含層	18.6 — 14.7	外面: ヨコナダ、タタキ (3本/cm)、接合痕3条 内面: ヨコナダ、ハケナダ (8本/cm)、接合痕3条	淡褐色	1/長、裏、角 良好	1/4		
35 四	高杯 (弥生土器) 包含層	13.9 — 16.3	外面: ヨコナダ、ヘラミガキ、 底部に三方孔の痕跡有り 内面: ヨコナダ、ヘラミガキ	乳灰色	1/長、角 良好	杯部～脚 部1/2		
36	同上	— 塔部延	外面: ヘラミガキ、ヨコナダ、 側面に四方孔有り 内面: ナダ、ヨコナダ	茶灰色	1/長、裏、角 良好	脚部1/4		
37	甕 (土器底) 包含層	13.2	外面: ヨコナダ、タタキ (7本/cm)、後ハケナダ (8本/cm) 内面: ヨコナダ後ハケナダ (8本/cm)、ヘラケズリ	茶灰色	1/長、裏 良好	口縁部 1/4	外面上黒斑を 有する	
38	同上	14.0	外面: ヨコナダ、ハケナダ (8本/cm) 内面: ヨコナダ後ハケナダ (12本/cm)、ヘラケズリ	茶灰色	1/長、裏 良好	口縁部～ 脚部1/4	外面上黒斑を 有する	
39	同上	— 底桿 3.5	外面: タタキ、ユビオサエ 内面: ヘラナダ	淡褐色	1/裏、角 良好	底部のみ 底部外面上黒 斑を有する		
40	古村3林 (土器底) 包含層	3.5	外面: ナダ、ユビオサエ。底部 穿孔。 内面: ナダ	淡褐色	1/長、角 良好	底部のみ		

### 3まとめ

今回の調査では、No.2地区では縄文時代晚期頃と推定される自然流路1条(NR-201)・古墳時代前期(布留式古相)に比定される土坑1基(SK-101)、No.3地区では明確に判断できる遺構は確認されなかったが、弥生時代前期～中期にかけての河川または洪水層とおもわれる厚い堆積層を各々検出するに至った。自然流路や洪水層については本書であえて言うまでもなく、沖積地にみられる度重なる河川の氾濫を物語るものであるが、No.2地区第13層の砂層直下で確認した数本の護岸杭は、当地に水田遺構の存在を暗示しており、今後近隣における調査に注意を促すものである。古墳時代前期(布留式古相)の土坑(SK-101)については、狭小な調査区内であったことも含め、弥生時代後期末に比定される遺物の混在等から一括遺物として捉えることに危惧されるところはある。しかし、いずれにせよ当地周辺においては弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落域が形成されていたことは必然である。それは本調査地西側で実施された3件の調査結果から、第5次調査では弥生時代後期末の銅鐸埋納壙・溝、古墳時代初頭(庄内式古相)の土坑、古墳時代前期(布留式古相)の竪穴住居・土坑・溝・小穴、第6次調査では弥生時代後期の土器類(第V様式)、古墳時代前期(布留式古相)の上坑、第7次調査では弥生時代後期の河川、古墳時代前期の遺物包含層と各調査地において二時期におよぶ遺構・遺物が検出されていることからもうなづけよう。また、今回の調査地を含めた東西に並ぶ4件の調査結果から集落域の広がりを線的に見た場合、No.2地区内では東へいくほど遺

物包含層が希薄となり、No.3地区では遺構はおろか遺物すら遺存しておらず、第5次～第6次調査地点を弥生時代後期末～古墳時代前期の集落の中核部と仮定すると、No.2地区は集落域の東端部に位置するといった想定がなされる。今回の調査は、既述の3件の調査で得られた弥生時代後期末～古墳時代前期の集落の存在を追証するとともに、当該期における当遺跡北部の集落域の一端を垣間見ることができた。

#### 註記

- 註1 青木勘時 1989「23. 渋川庵寺（S K T90-1）」『八尾市文化財調査研究会年報 半成元年度』  
備 八尾市文化財調査研究会報告28 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註2 高萩千秋 1992「X III 跡部遺跡第6次調査（A T91-6）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』  
備 八尾市文化財調査研究会報告34 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註3 安井良一 他 1991『跡部遺跡発掘調査報告書－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－』  
備 八尾市文化財調査研究会報告31 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註4 江浦 洋他 1991.3「V. 調査成果（90-3調査区）-3. 弥生時代」『東大阪市池島町・八尾市福万寺町・池島・福万寺遺跡発掘調査概要II-90-3・6調査区（1990年度）の概要－弥生時代小区画水田・古墳時代集落・平安時代～近世条里型水田の調査』財団法人大阪文化財センター
- 註5 寺沢 熊・森岡秀人 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編I』図書出版 木耳社
- 註6 原田昌則 1993「II 久宝寺遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』備 八尾市文化財調査研究会報告37 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註7 中西靖人 他 1987『河内平野遺跡群の動態I 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－プロローグ編－』大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター  
森井貞雄 1989.3『1988年度 龜井遺跡発掘調査概要－八尾市南龜井町・藤部南の町所在－』大阪府教育委員会



No. 2 地区 古墳時代前期SK-101（東から）



No. 2 地区 弥生時代前期遺構面（北から）



No. 3 地区 完掘削状況



No. 2 地区 西壁面（標高 5～6 m 北東から）



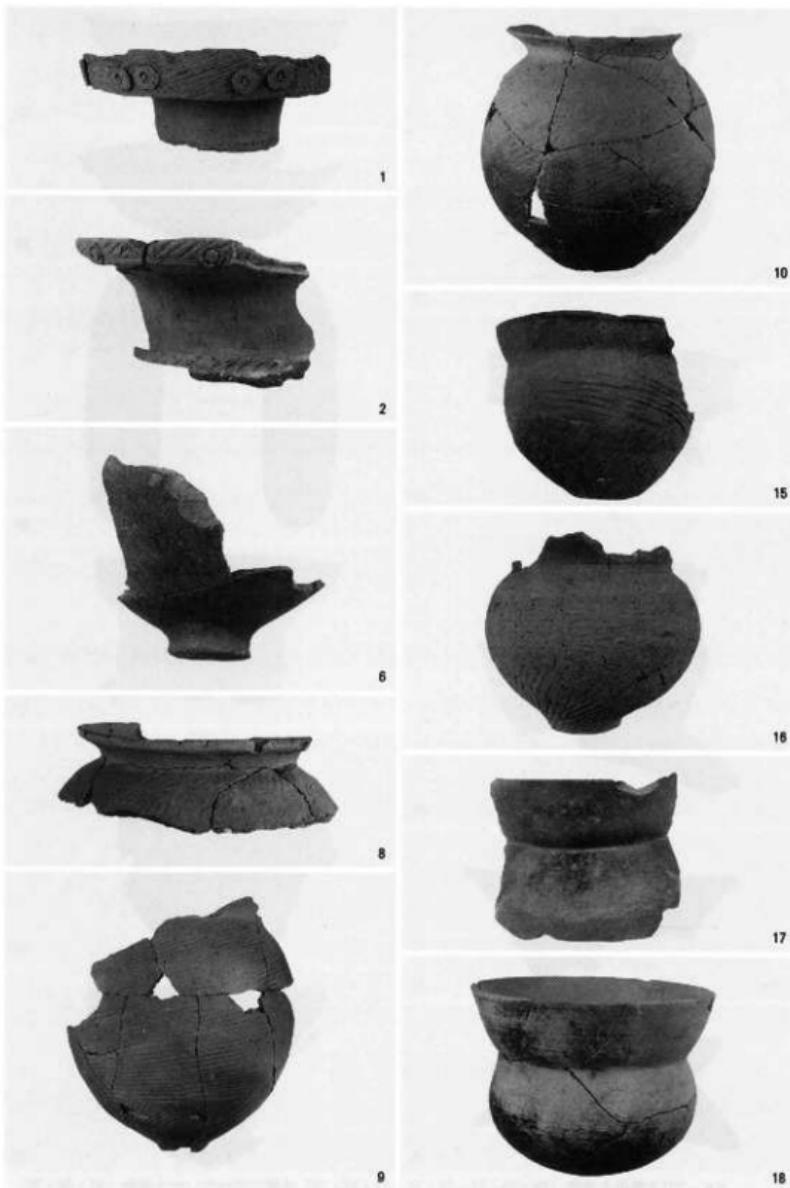
No. 2 地区 南・西壁面（標高 3～4 m 北東から）



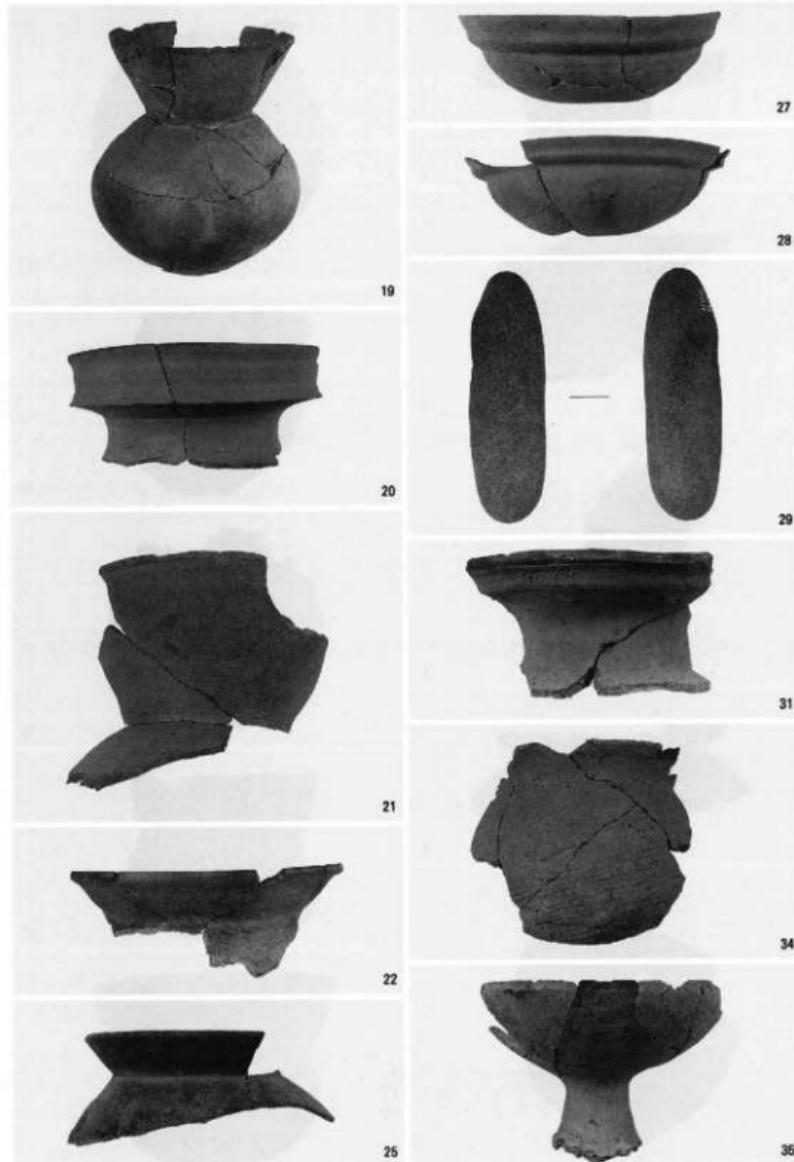
No. 3 地区 北壁面（標高 5～6 m 南から）



調査地遠景（南東から）



SK-101出土遺物 (下層-1・2・6・8・9・10・15・16 上層-17・18)



SK-101上層出土遺物 (19・20・21・22・23・26・27・28・29) 造構に伴わない出土遺物 (31・34・35)

## IV 跡部遺跡第16次調査 (AT94-16)

大月

## 例 言

- 1 本書は、八尾市跡部本町1丁目地内で実施した公共下水道工事（平成5年度 第111工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第16次調査(AT94-16)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋60-3号 平成6年5月27付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は平成6年9月12日から10月13日にかけて成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は約43.52m<sup>2</sup>を測る。現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。

## 目 次

1 はじめに.....	65
2 調査の方法と経過.....	65
3 調査の概要.....	66
4 まとめ.....	67

## IV 跡部遺跡第16次調査 (AT94-16)

### 1 はじめに

今回の発掘調査は公共下水道工事(平成5年度-第111工区)に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した発掘調査のうち16件目にあたり、略号は「AT94-16」である。

当調査地の近辺では、北西250mのA2(AT82-1)・A8(AT88-4)・A11(市教委92-164)地点、西250~350mのA3(AT83-2)・A4(市教委87-152)・A7(市教委62-307)・A24(AT94-18 本書IV 跡部遺跡第18次調査)地点、南東150mのT2(市教委87-152)・T3(TS92-2)地点、南100mのT4(TS91-3)地点などで、発掘調査が行われている(地点については本書II 跡部遺跡第11次調査 第1図・表1参照)。

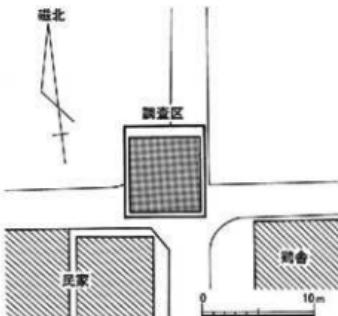
### 2 調査の方法と経過

下水道工事にかかる掘削は、八尾市道龍華45号線にある既設マンホールから約200mの間をシールド工法によってつなぐものであるが、調査対象となったものは、跡部本町1丁目と太子堂2丁目を区画する道路内の発進立坑部分の1か所である。調査にあたっては、工事の進捗状況に合わせて機械掘削・人力掘削を併用し、随時記録作業を行い、工事による掘削がすべて終了する時点まで立ち会った。調査期間は平成6年9月12日から10月13日までのうちの5日間、調査面積は矢板うらのりで約40m<sup>2</sup>を測る。

9月12日、鋼矢板打設および覆工のための機械掘削に立ち会った。掘削深度は1.0~1.2m程度である。調査区のはんどでその範囲まで擾乱が及んでいたが、地表下約1.0m付近で、旧耕土・土床がわずかに遺存していた部分があった。鋼矢板打設・覆工などの作業終了後、地盤改良を終え、10月7日から1次掘削を開始することになった。

10月7日、1次掘削の深さは地表下約2.6mまでである。土層観察用のセクションは北側に残し、機械・人力を併用して掘削を行ったが、この間造構・遺物は認められなかった。掘削終了後、壁面の写真撮影・柱状図作成を行い、統けて1段目の支保工設置作業に移行し、10月11日から2次掘削を行うことになった。

10月11日、2次掘削の予定深度は2次掘削か



第1図 調査区設定図 (S = 1/500)

ら1.5m下の地表下4.0~4.1mまでである。ここでは、工事の手順から、土層観察用のセクションは東側に残して掘削を行った。最下層では弥生土器または古式土師器の小破片が1点認められたが、不安定な土層堆積が続き、遺構は認められなかった。ここでも掘削終了後、壁面の写真撮影・図面作成を行い、周辺の測量も行った。以後2段目の支保工が設置され、10月13日に最終掘削を行うことになった。

10月13日、最終掘削の深度は、2次掘削から1m前後の地表下5.1~5.2mまでである。2次掘削同様東側にセクションを残して掘削を続けたが、粗砂を主とする微砂～シルト・植物遺体の互層からなる沼沢地または河川流路状の土層堆積を示しており、最下部で含水量の多い粗砂に至った。掘削終了後これまで同様、壁面の写真撮影・実測図作成を行い、同日10月13日にすべての掘削を終え、調査を終了した。

### 3 調査の概要

現地表面のレベル高はT.P.+9.21m前後である。東側・南側の道路下では、そのほとんどが地表以下1.3~1.4m程度の深さまで擾乱されていたが、北西部の民地側では、厚さ0.8m程度の盛上以下に、第1層Ⅱ耕土・第2層床土が部分的に遺存しており、地表下1.1m (T.P.+8.1m) 程度で第3層の粗砂に至る。旧耕土上面のレベル高は、T.P.+8.4m程度である。

第3層褐色粗砂は層厚0.5~0.6m、上面には酸化鉄の沈着がみられ、砂粒は下ほど細かい。それ以下には、粘質シルトと微砂～粗砂を主とする含水量の多い不安定な第4層～第6層が堆積している。第4層上面のレベル高はT.P.+7.5~7.6mで、西が高く東が低い。第6層の層厚は0.5m前後あり、底に炭酸カルシウムや植物遺体が沈殿する。第3層～第5層は河川内堆積土・洪水層と考えられ、第6層は沼沢地状の上層堆積を示している。

第7層暗灰色微砂混じり粘質シルトは、下層の第8層・第9層のくぼんだ部分に厚く堆積するもので、層厚は北西部で0.5m、南東部では0.1mを測る。硬く絡まった土質で、植物遺体や炭化物が混入している。第8層青灰色粘質シルトは南東部にのみ堆積している。厚さは南東で0.3m以上と厚く高まりとなり、北西へ下がって厚さは数cmとなり、とぎれている。上面レベルは南東端でT.P.+6.8m、北西部でT.P.+6.3m程度である。

第9層青灰色砂質シルト～微砂の層厚は0.1~0.2m、土層上面は南東から北西へなだらかに下がるもので、上面レベルはT.P.+6.25~6.4mを測る。比較的安定した堆積状況を示しており、上層の第7層・第8層の堆積状況から、一時期の遺構ベースになるものと思われ、そうであれば第7層・第8層が遺構の内部堆積上になる可能性がある。

そこより下の第10層～第15層は、植物遺体を含む灰色～灰褐色の粘質シルト～シルト～微砂～粗砂などの互層からなり、再び含水量の多い不安定な土層堆積が0.7m程度続く。

次いで、比較的安定した堆積状況を示す第16層暗青灰色粘土（層厚0.1～0.15m）・第17層暗灰色粗砂混じり粘土（層厚0.1～0.2m）に至るが、第17層からは土器の小破片が1点出土している。

第18層青灰色シルトは、上層の第17層から土器の出土があったことからも、ふたたび造構ベースとして捉えられそうな土層である。層厚は0.1～0.2m、上面レベルはT.P.+5.2～5.4mを指し、ここでも南東が高く北～西が低い。

以下には硬くしまった第19層暗灰色粘質シルト（層厚0.1～0.2m）、粘性の強い第20層灰黒色粘質シルト（層厚0.1～0.15m）が安定した状態で堆積し、再び含水量の多い第21層青灰色粘質シルトに至る。

#### 4 まとめ

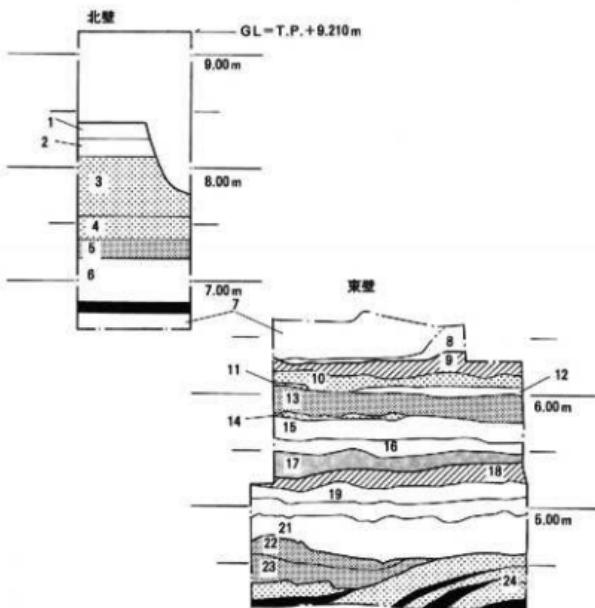
今回の調査地は、小面積であったにもかかわらず、地表下5mという深層部までの断面観察ができ、遺跡の動向を知るうえで非常に有意義なものであった。

ここでは、第1層旧耕土以下第24層までの24枚の土層を確認した。そのうち、造構ベースの可能性のある上層は、第9層と第18層の青灰色シルトである。土層の堆積状況は、粗砂を主とする互層→粘質シルトを主とする互層→硬く締まった粘質シルト→青灰色シルトの繰り返しが観察できた。そこから、当地では、河川の氾濫・滯水・退水が幾度も繰り返されたことがわかる。

河川の氾濫による洪水層は、(I期)第3層～第5層の褐色粗砂および粘質シルトと粗砂～微砂の互層、(II期)第10層～第14層の灰色粗砂を主とする互層、(III期)第22層～第24層の灰色粗砂および青灰色微砂と粘質シルトの互層の3時期に分かれる。

近隣の調査結果からは、古墳時代後期～平安時代前半までの間に複数の時期の洪水層が確認されている(A17・A19・T2地点)ことから、(I期)の洪水層を平安時代に、(II期)の洪水層を古墳時代後期に比定することができる。それと同時に第9層上面が平安時代以前の生活面に、第18層上面が古墳時代後期以前の生活面に相当するものと考えられる。

一方、第17層から出土した土器片は、ごく小さな破片で、そこから年代を決定するのは困難であるが、おおむね弥生時代後期から古墳時代前期（いわゆる古式土師器）におさまるものと考えられることから、出土遺物から見れば、第18層上面を古墳時代前期の生活面と考えることも可能である。また、A17地点（本書II 跡部遺跡第11次調査）では、古墳時代後期～平安時代前半までの洪水層より下層の地表下約4m(T.P.+4.8～5.2m)で、厚さ1m以上に達する基盤層となる粗砂の堆積を確認していることから、(III期)の洪水層は、この基盤層に対応する可能性がある。ちなみにこの基盤層は、弥生時代中期以前の洪水層である。



- 第1層 旧耕土  
 第2層 底土  
 第3層 棕色粗質シルト（上面に鍛鉄鉱）  
 第4層 棕色粘質シルトと淡褐色粗砂の互層  
 第5層 灰色粘質シルトと灰色鐵砂の互層  
 第6層 淡褐色粘質シルト（炭化カルシウム・植物遺体沈澱）  
 第7層 灰色粘質シルト（植物遺体・炭化物混入）  
 第8層 青灰色粘質シルト～微砂  
 第9層 青灰色砂質シルト～微砂  
 第10層 青灰色粘質シルト  
 第11層 灰色粗砂と青灰色シルトの互層  
 第12層 灰褐色粘質シルト  
 第13層 淡褐色粘質シルト・植物遺体の互層  
 第14層 灰色粗砂  
 第15層 灰色シルトと棕褐色粘質シルトの互層  
 第16層 灰褐色粘質シルト（炭化カルシウム含む）  
 第17層 棕灰色粘質シルト（硬質）  
 第18層 青灰色シルト  
 第19層 雜灰褐色粘質シルト  
 第20層 灰褐色粘質シルト（粘性強い）  
 第21層 青灰色粘質シルト（微砂少々・植物遺体混入）  
 第22層 青灰色粘質シルト（微砂少々）  
 第23層 青灰色粘質シルトと灰色鐵砂の互層  
 第24層 灰色粗砂に暗灰色粘質シルト・褐灰色粘質シルト・植物遺体の互層

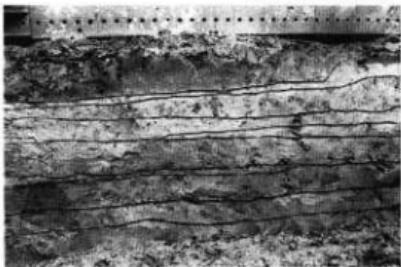
第2図 壁面図 (水平S=1/100, 垂直S=1/50)



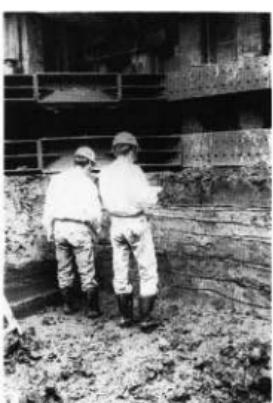
北側壁面（第3層～第7層）



作業風景（2次掘削）



東側壁面（第7層～第17層）



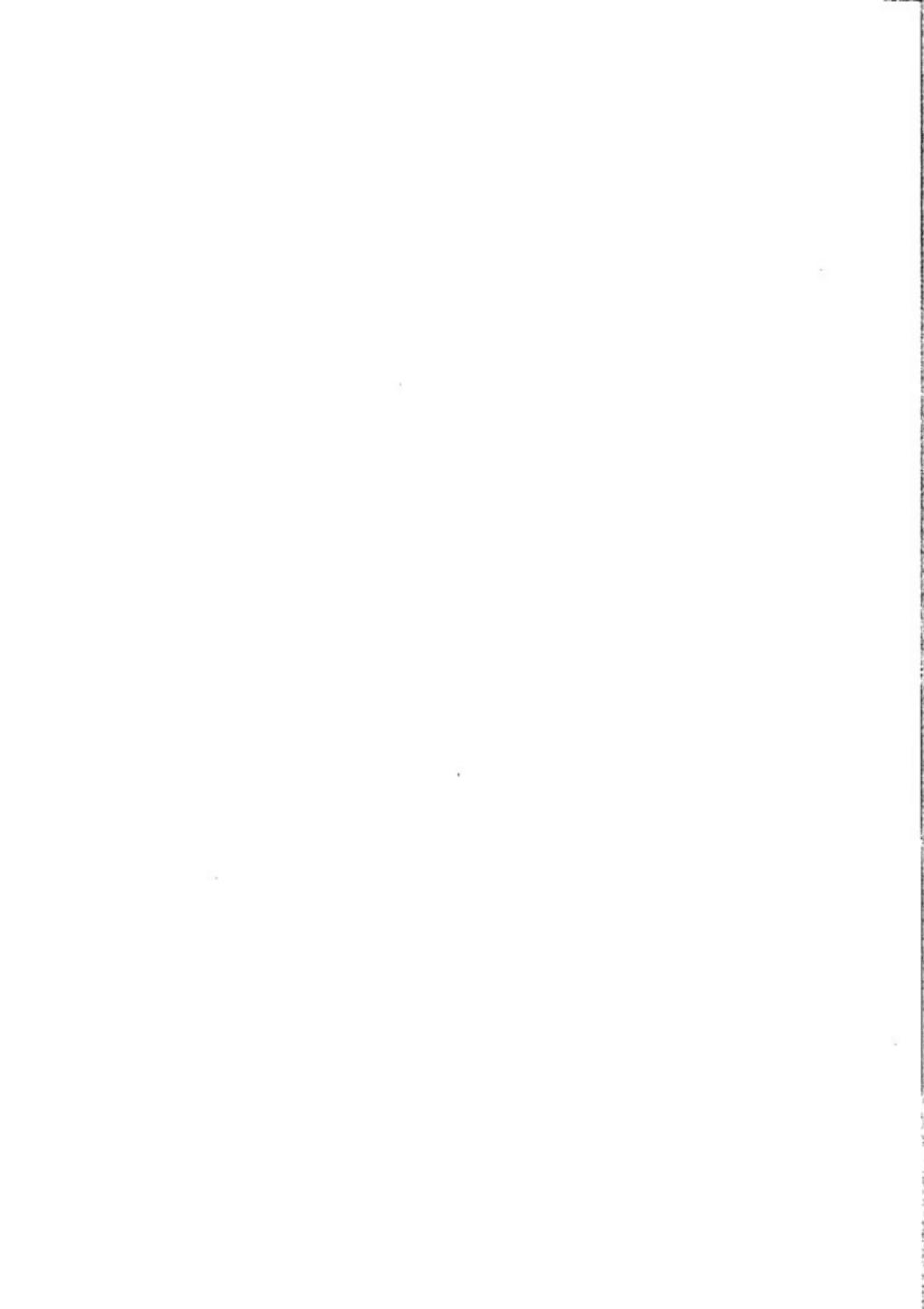
調査風景（壁面実測）



作業風景（最終掘削）



東側壁面（第18層～第24層）



## V 跡部遺跡第17次調査 (AT94-17)

## 例　　言

- 1 本書は、八尾市太子堂1丁目地内で実施した公共下水道工事（平成5年度 第116工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第17次調査（AT94-17）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋61-3号 平成6年5月27日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成6年9月16日から11月8日にかけて成海佳子を担当者として実施したが、一部を高萩千秋が補佐した。調査面積は、約43.52m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。

## 目　　次

1 はじめに.....	71
2 調査の方法と経過.....	71
3 調査の概要	
1) 基本層序.....	73
2) 検出遺構.....	73
3) 出土遺物.....	74
4 まとめ.....	74

## V 跡部遺跡第17次調査 (AT94-17)

### 1 はじめに

今回の発掘調査は、公共下水道工事（平成5年度 第116工区）に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した17度目の発掘調査にあたり、略号は「AT94-17」である。

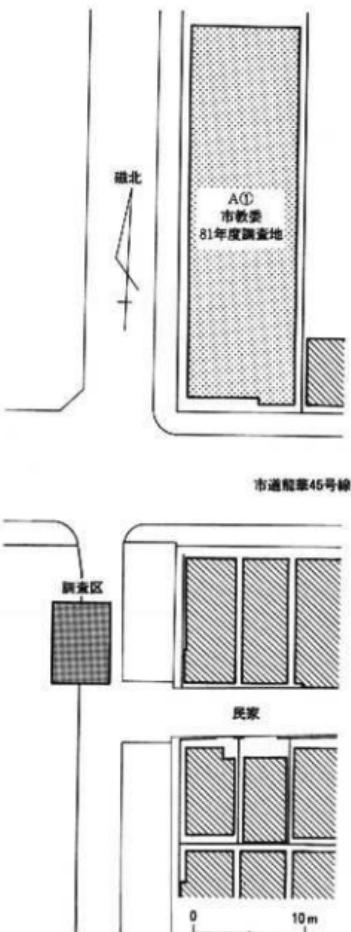
下水道工事にかかる掘削は、八尾市道龍華45号線にある既設マンホールから約100mの間を、シールド工法によってつなぐものであるが、調査対象となったのは、春日町4丁目と太子堂1丁目を区画する道路内に位置する立坑1か所のみである。

今回の調査地点はA23地点（本書V 跡部遺跡第16次調査）から北東350mにあたり、近辺では、北東10mのA1地点（市教委56年度調査地）、北～西40～70mのA9地点（AT89-5）、A12地点（AT92-7）で調査が行われている（本書II 跡部遺跡第11次調査 第1図・第1表参照）。

### 2 調査の方法と経過

調査においては、工事の進捗状況に合わせて機械掘削・人力掘削を併用し、隨時、記録作業を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。調査期間は平成6年9月16日から11月8日までのうちの7日間、調査面積は矢板うちのりで約37m<sup>2</sup>を測る。

9月16日、鋼矢板打設のための機械掘削に立ち会った。掘削深度は1m程度である。北側・東側の道路上には搅乱が及んでいたが、南西部



第1図 調査区設定図 (S = 1/500)

では地表下1m前後に旧耕土が遺存していた。矢板打設後地盤改良を終え、10月31日から覆工に伴う掘削を開始することとなった。

10月31日、覆工に伴う掘削は、現地表下1.0~1.3mまでの旧耕土内におさまったため、統けて覆工作業に移行し、翌11月1日から、1次掘削を行うこととなった。掘削中、周辺の測量などを行った。

11月1日、1次掘削の深さは地表下約2mまでの予定であったが、土層観察用のセクションを調査区中央の東西方向に残し、東側から機械掘削を行ったところ、地表下2.2~2.5m (T.P.+7.0m) 前後で弥生時代後期から古墳時代前期に相当する可能性のある土層（暗灰色粘土）に至ったため、そこで機械掘削を一旦終了し、壁面の写真撮影・実測図作成などを行った。その後、統けて西側の機械掘削を行った。

11月2日、工事の手順から、土層観察用のセクションを東端に変更し、東から一部を掘り下げたところ、地表下3.1m (T.P.+6.3m) 前後で青灰色シルトが見られ、その間の層に遺物が含まれていたことから、青灰色シルト上面で遺構の存在を確認する必要があるものと判断された。東側壁面の写真撮影・実測図作成を行い11月4日から平面的な調査を行うこととした。

11月4日、青灰色シルト上面までの掘削・精査を行ったところ、落ち込み状遺構・小穴を検出した。この面で写真撮影・平面実測などを行い、平面的な調査を終えた。

11月7日、東端のセクションを統けて残し、現地表下5m程度までの掘削を行ったが、以下には粘土とシルトが水平に堆積し、最下では植物遺体の沈殿層が見られた。

11月8日、工事による最終掘削まで立ち会い、土層観察を続けたが、これ以下では、粘土・シルトの水平堆積が見られた。最終掘削深度は地表下5.4m (T.P.+3.9m前後) に達する。



写真1 矢板工に伴う機械掘削



写真2 覆工に伴う機械掘削



写真3 壁面精査

### 3 調査の概要

#### 1) 基本層序

現地表面のレベル高は、西側の民地でT.P.+9.5m前後、東側の道路側では、T.P.+9.2~9.3m程度を測る。道路下には、水道管やガス管などで部分的に現地表下2.0m前後までの搅乱が及んでいた。盛土は厚さ1m程度で、以下に第1層旧耕土（層厚0.15~0.3m）・第2層床上（層厚0.1~0.2m）が遺存している。旧耕土上面のレベル高はT.P.+8.3m程度である。

床上以下には、第3層~第8層褐色系の粘質~砂質シルトが、0.7~0.8mの厚さで堆積している。これらの層中には、マンガン・鉄分が多く含まれている。

次に第9層~第12層灰色系の粘土~粘質シルトに至るが、これらの層中には炭化物や上器の小破片が含まれている。

第9層灰色粘土は層厚0~0.3m、粘性は強く、炭化物が薄く挟在している。南西部では認められない部分があり、遺構内堆積土の可能性がある。上面レベルはT.P.+7.0m前後である。第10層暗灰色粘土は層厚0.1~0.3m、粘性は強い。炭化物や弥生時代前期から古墳時代前期までの時期幅の広い土器片を少量含んでいる。上面のレベルはT.P.+6.5~6.7mで、西が高く、南側へ落ち込み、この下がった部分に遺構内堆積土の可能性のあるa層灰黑色粘土・b層灰青色粘土が堆積している。第11層暗灰青色粘土の層厚は0.15~0.35m弥生時代前期の遺物を少量含んでおり、第10層同様南側が低い。

第12層暗灰青色粘質シルト層厚0~0.35m、北側にのみ堆積するもので、第9層とともに遺構内堆積土の可能性がある。次いで、遺構ベースである第13層青灰色シルトに至る。第13層青灰色シルトは層厚0~0.4m、弥生時代前期の遺構ベースとなるもので、上面のレベル高は、T.P.+6.3m前後を測る。上面には凹凸が見られ、小穴・落ち込みなどが構築されている。

以下には第14層~第26層青灰色系のシルト~細砂などが1.5~1.6mの厚さでほぼ水平に堆積し、植物遺体の沈殿層である第27層黒色粘土に至る。第27層の厚みは4~5cmである。それ以下には第28層黒灰色粘土（層厚0.2m）、第29層暗灰青色粘質シルト（0.2m）、第30層暗青灰色シルト混じり粘土（0.1m以上）が再び水平な堆積状況を見せる。

#### 2) 検出遺構

第13層青灰色シルト上面で小穴・落ち込みを検出した。

小穴は東壁際中央部で検出したもので、径0.45m・深さ0.2mを測り、断面の形状は逆三角形を呈する。内部堆積土はc層暗灰色粘質シルトで、弥生時代前期新段階の壺・甕（第5図-1・2）などの土器が少量出土している。落ち込みは調査区南東隅で検出したもので、平面の形状は径2~3m程度の扇形を呈し、なだらかに下がる。深さは0.4~0.5m、底には凹凸がある。内部には、上からd層暗灰色粘質土・e層暗青灰色シルト混じり粘土が堆積する。

### 3) 出土遺物

小穴内からは壺(1)・甕(2)をはじめとして、弥生時代前期新段階に属する破片が少量出土している。第10層・第11層からは、壺(3)・鉢(4)などの他に、弥生時代後期～古墳時代前期の土器片も数点含まれている。

### 4まとめ

今回の調査地は、小面積であったにもかかわらず、地表下5mに及ぶ深層部までの掘削が行え、八尾市内の低平地では、検出例の少ない弥生時代前期の遺構を捉えることができた。

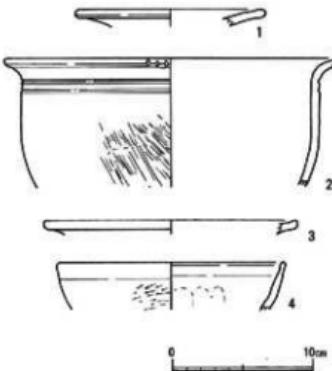
ここでは、第1層旧耕土以下第30層までの30枚以上の土層を確認した。そのうち、弥生時代前期後半の遺構面は第13層青灰色シルト上面にあることが明らかになった。また、そこより上層の第11層暗灰青色粘土・第10層暗灰色粘土も遺構ベースの可能性のあるもので、第9層以下第12層までには炭化物や遺物が含まれている。

近隣のA1地点では、弥生時代前期～中期の遺物包含層をマウンドの盛土とした、古墳時代前期初頭(庄内期)の方形周溝墓が検出されていることから、第10層上面が古墳時代前期の生面に相当するものと考えられる。

第13層以下には、粘土～シルトを主とする土層がほぼ水平に堆積しており、周辺の他の地点(A17・A19・A22・A24・T2～T7)の下層部分で見られたような厚い粗砂の堆積はなかった。これは、当地点が南・北の旧流路(旧平野川・長瀬川)の影響を受けることが少なかったためと考えられる。



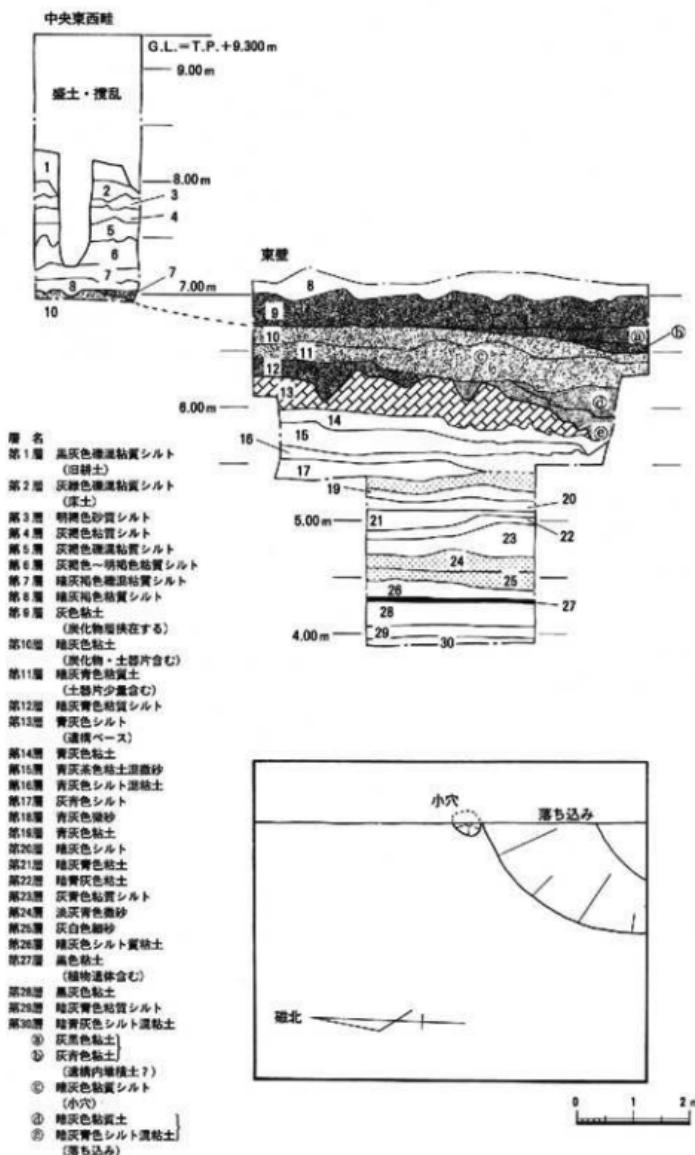
写真4 小穴内出土遺物(2)



第2図 出土遺物実測図(S=1/4)

出土遺物観察表

番号	器種 口径(cm) 出土地点	色調 粗	形態・調整等の特徴
1	壺 口径 12.7 小穴	明褐色～茶褐色 粗：チャート・石英 良好	* 水平近くに開く口縁部 * ヘラミガキ、ヨコナデ
2	甕 口径 23.5 小穴	明褐色(内面淡褐色) 粗：石英・長石・チャート 良好	* 丸く屈曲する口縁部、頸部 に2条の凹溝、腹部に筋み目 * ハケ、ヨコナデ
3	壺 口径 17.8 第10層	乳白色 粗：花崗岩 良好	* 水平近くに開く口縁部 * ヨコナデ
4	鉢 口径 16.0 第11層	暗褐色 粗：花崗岩、角閃石 良好	* 椭形の直口鉢 * ヘラケメリ、ヨコナデ



第3図 整面図・平面図(水平S=1/100, 垂直S=1/50)



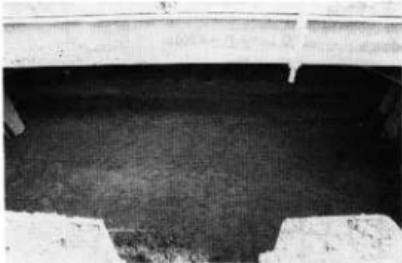
東西セクション (第0層～第10層)



調査風景 (壁面実測)



東側壁面 (第18層～第30層)



第13層上面 (西から)



東側壁面 (第8層～第13層)



下層掘削



東側壁面 (第8層～第17層)

## VI 跡部遺跡第18次調査 (AT94-18)

## 例　　言

- 1 本書は、八尾市跡部本町3丁目地内で実施した公共下水道（平成6年度 1工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 1 本書で報告する跡部遺跡第18次調査は（AT94-18）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋117-3号 平成6年8月12日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は平成6年9月22日から平成6年10月27日（実働6日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積40m<sup>2</sup>を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子が参加した。
- 1 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成9年2月28日に完了した。
- 1 本書作成に関わる業務は、遺物実測－沢村妙子、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。
- 1 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本文目次

1 はじめに.....	77
2 調査概要	
1) 調査の方法と経過.....	79
2) 検出遺構と出土遺物.....	80
3まとめ.....	80

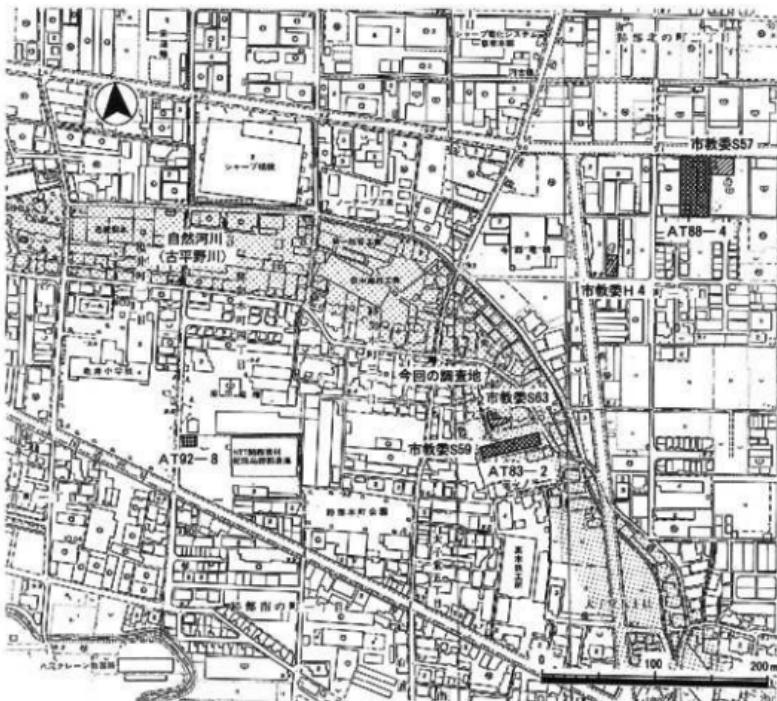
## VI 跡部遺跡第18次調査 (AT94-18)

### 1 はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町1～3丁目、跡部北の町1～3丁目、跡部南の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目付近の東西1.4km、南北0.5～1kmに展開する弥生時代前期から鎌倉時代の複合遺跡である。

地理的には長瀬川左岸の三角州状の微高地に位置し、現地表面の海拔高はT.P.+9.0～9.9mを測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に龜井遺跡、北に久宝寺遺跡が位置している。

今回の調査地点である跡部本町3丁目付近は、跡部遺跡範囲の西部に位置しており、これま

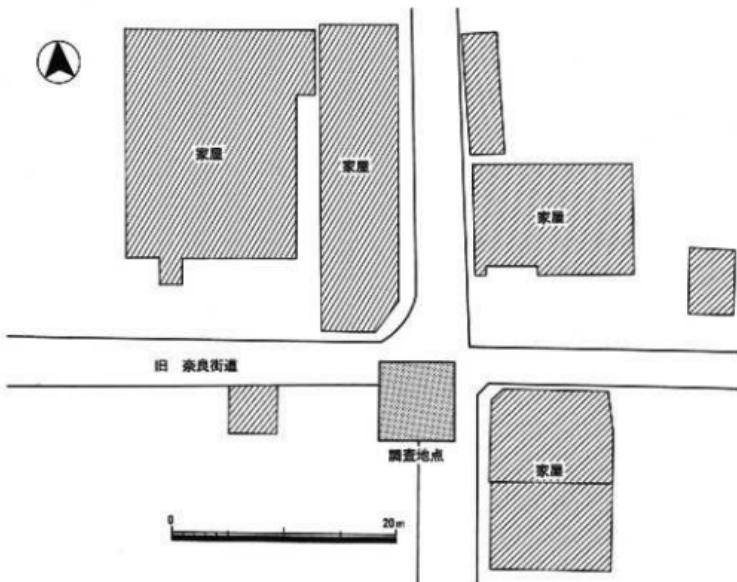


第1図 調査地周辺図

でに4ヶ所で発掘調査が実施されている。昭和58年に、当調査研究会が跡部本町2丁目46において実施した第2次調査(AT83-2)で平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。さらに、同地点で昭和59年と昭和63年に八尾市教育委員会により実施された調査においても、同様の調査成果が得られている。平成4年度に当調査研究会が跡部本町4丁目4-20で実施した第8次調査(AT92-8)では、奈良時代の居住域と鎌倉時代の水田が検出されている。今回の調査地点は、第2次調査(AT83-2)地点の北西約100mに位置している。

#### 註記

- 註1 米田敏幸・西村 歩 1991「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要5』八尾市教育委員会文化財室
- 註2 岬村友子 1885「1. 跡部遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告11 昭和59年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 註3 米田敏幸 1988「1. 跡部遺跡(62-307)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』八尾市文化財報告19 昭和63年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 註4 岡田清一 「II跡部遺跡(AT92-8)第8次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』8 八尾市文化財調査研究会報告39 8 八尾市文化財調査研究会

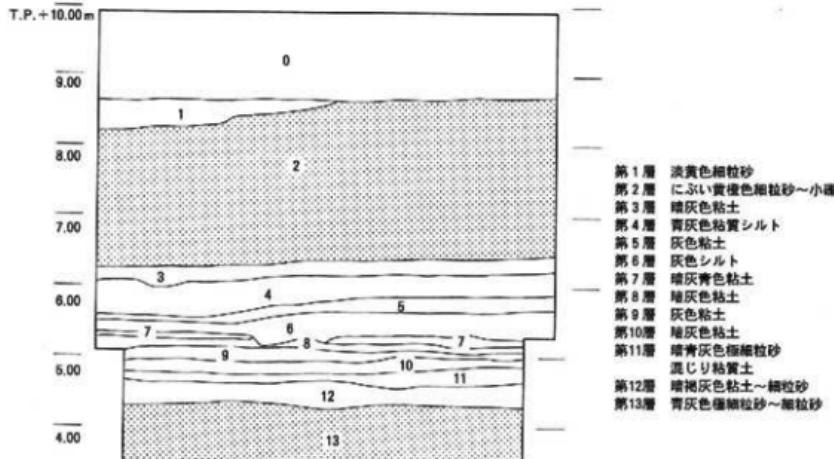


第2図 調査位置図

## 2 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（平成6年度、1工区）の発進立坑設置に伴うもので、鋼矢板で囲繞された東西幅6.1m、南北幅6.5m、面積約40m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査では、地表下1.2m前後に存在する盛土については、機械で掘削した後、以下は工事の進捗状況に合わせて、機械掘削と人力掘削を併用して層理毎に遺物の包含状況と生活面の有無の確認に努め、最終的には表土下6.4m（T.P.+3.5m）に達する範囲までを調査対象とした。調査の結果、第2層および第3層から遺物が極少量出土したが、生活面と認定される土層は確認できなかった。奈良時代の遺物が極少量出土した第2層は、表土下1.2~3.5m（T.P.+8.7~6.3m）付近に存在する層厚が2.3mにおよぶ土層で、細粒砂～小礫を主体とする河川堆積土層である。この土層の存在は、調査地点の南東約100m付近で実施された3ヶ所の調査においても確認されており、この土層上面で平安時代後期以降の遺構が検出されている。これらの土層の広がりは、土地条件図や地形図から埋没河川（古平野川）と考えられており、長瀬川が流路を北に変えるJR八尾駅付近（植松3丁目）から分岐して北西ないしは西に流下し、上町台地の東で西除川に合流する大規模な河川であったことが推定されている。また、調査地点の西方800m地点で近畿自動車道建設に伴って実施された龜井北・龜井遺跡の調査では、少なくとも古平野川が奈良時代後期まで存続した河川で、川幅が195mにおよぶことが確認されている。なお、下部の第

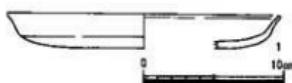


第3図 西壁断面図

3層暗灰色粘土層からは、古墳時代前期（布留式新相）の土器片が極少量出土しており、少なくとも第2層の河川堆積は古墳時代前期（布留式新相）以降と推定される。第3層以下の土層については、粘土・シルト・細粒砂の互層で、遺構・遺物は検出されていない。

## 2) 検出遺構と出土遺物

調査においては、現地表下から6.4m (T.P.+3.5m) までに存在する13層の層序を確認した。現地表下から1.3mまでは、盛土および擾乱層である。第1層の淡黄色細粒砂は、調査区の中央部から南部にかけて存在するもので、層厚0.05~0.4mを測り、南に行くにつれて層厚が漸増している。この土層については、調査地点が奈良街道上にあたるため、道路部分の可能性がある。第2層はにぶい黄色の色調を呈するもので、上質は細粒砂～小礫を主体としている。層厚が2.3m前後を測る河川堆積土層で、堆積している砂粒からみて、流勢が強い河川であったことが窺える。内部から、奈良時代の遺物が極少量出土している。第3層は粘性の強い暗灰色粘土層で、層厚0.2~0.3mを測る。上面のレベルはT.P.+6.2~6.4mを測る。古墳時代前期（布留式新相）の土器片が少量出土している。第4層青灰色粘質シルトは植物遺体を少量含むもので、層厚0.3~0.5mを測る。無遺物土層である。第5層青灰色粘土層（層厚0.1~0.2m）は南に傾斜をもつもので、北でT.P.+5.9m、南でT.P.+5.6mを測る。第6層～第12層はT.P.+5.7~4.3mの約1.3mの範囲に堆積する上層で、植物遺体を少量含む灰色～暗灰褐色の粘土・シルト・細粒砂の互層からなるもので、含水量が多い不安定な土層である。第13層はT.P.+4.3~3.7m付近に存在する土層で、青灰色の色調で、極細粒砂～細粒砂で構成される。層相からみて、河川に起因する洪水砂土層と推定されるが、遺物が出土していないため、形成された時期は不明である。遺物は第2層および第3層から極少量出土している。図化した1点(1)は上師器皿で第2層から出土したものである。(1)は復原口径19.5cmを測る。水平な底部からL字縁部が外反気味に伸びるもので口縁端部は内側に肥厚して終わる。ローリングを受けており調整等は不明である。色調は茶褐色で、胎土は精良である。



第4図 第2層出土遺物実測図

奈良時代に比定されよう。

## 3 まとめ

今回の調査は、小面積であったにもかかわらず、調査地点が奈良街道上に位置することや、さらに、埋没河川である古平野川の流路にあたることから、それらに関連した遺構・遺物の検出が想定された。奈良街道は、埋没河川である古平野川左岸の自然堤防に沿って伸びるもので、調査地点では東西方向に伸びていたものと推定される。奈良街道に該当する遺構としては、調査区の中央部から南部で検出した第1層が挙げられる。第1層は、南部が調査区外に至るが、

現状では溝状の堆積状況を呈することから、この部分が道路にあたる可能性が高いが、遺物が検出されておらず不明な点も多い。一方、古平野川に関連するものとしては、第2層におい黄褐色細粒砂～小礫層がある。層厚が2.3m前後と厚く、全体が細粒砂～小礫で充填されていることから、流勢の強い大河川であったことが推察される。古平野川に関連した土層の広がりは、調査地点の南東約100m地点で実施された3ヶ所の発掘調査においても確認されており、これら調査地点では、埋没河川に対応する十層上面で、平安時代後期以降の集落が検出されている。また、調査地の西方約800mで近畿自動車道建設工事に伴って実施された亀井北遺跡・亀井遺跡<sup>注1</sup>の発掘調査では、少なくとも奈良時代後期までは継続した河川であったことが確認されている。<sup>注2</sup>以上の既往調査の成果と、今回の調査で検出した古墳時代前期（布留式新相）の遺物を含む第3層の存在からみて、古平野川の存続時期が古墳時代前期（布留式新相）から奈良時代後期であったことが推定できよう。

## 註記

註1 赤木克視・竹原伸次・人楽康宏 1986『亀井北（その3）』人阪府教育委員会・<sup>側</sup>大阪文化財センター

註2 高島 徹・廣瀬雅信他 1983『亀井』<sup>側</sup>大阪文化財センター



調査区全景（南から）



西壁（上部）



西壁（下部）

## VII 太子堂遺跡第3次調査 (TS91-3)

（大正16年）第1回調査報告書

## 例 言

- 1 本書は、八尾市太子堂2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成3年度 第II工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する太子堂遺跡第3次調査（TS91-3）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋137-3号 平成3年12月9日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成4年2月1日から平成4年2月29日（実働7日間）にかけて藤田道子（現大阪府教育委員会文化財保護課技師）を担当者として実施した。
- 1 調査面積は約56m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査には西田 寿・村井俊子が参加した。整理作業には、前記のはか船倉早苗・松井三千子・宮崎寛子が参加した。
- 1 本書作成にあたっての作業のうち、遺物写真撮影・トレース・レイアウトは成海佳子がおこなった。また、文責は、出土遺物については成海、他のすべては藤田である。

## 目 次

1 はじめに.....	83
2 調査の方法と経過.....	83
3 調査の概要	
1) 基本層序.....	83
2) 検出遺構と出土遺物.....	85
4 まとめ.....	88
5 出土遺物観察表.....	90

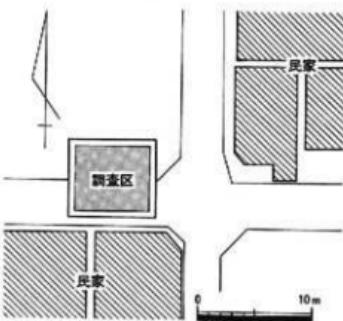
## VII 太子堂遺跡第3次調査 (TS91-3)

### 1 はじめに

太子堂遺跡は八尾市南西部に位置し、現在の行政区画では太子堂3丁目～6丁目・東太子2丁目・南太子堂1丁目～6丁目がその範囲となっている。

当遺跡は、旧平野川の自然堤防上に位置しており、同一の堤防上には、当遺跡の東に植松遺跡、西に龜井遺跡・竹測遺跡が連なっている。また、当遺跡の北辺は、銅鐸の出土で有名な跡部遺跡と接している。

今回の調査地 (T4地点 TS91-3) は、当調査研究会の第2次調査地 (T3地点 TS90-2) 2区の西約100mに位置している。(本書II 第1図・調査地一覧表参照)。



第1図 調査区設定図 (S=1/500)

### 2 調査の方法と経過

今回報告の発掘調査は、公共下水道工事 (平成3年度 第11工区) に伴うもので、当調査研究会が太子堂遺跡内で実施した3度目の発掘調査 (TS91-3) にあたる。

調査は立坑1か所 (約56m<sup>2</sup>) について行ったが、調査区の南側約3分の1は、NTTケーブル埋設時に現地表下約2mまで擾乱をうけている。

掘削については、現地表下約1.2mまでを機械によって行い、以下は人力と機械を併用し、現地表下約3.8m前後の深さまでを調査対象とした。調査の日程は平成4年2月1日から2月29日まで、実働日数は7日間である。

### 3 調査の概要

#### 1) 基本層序

調査地上面のレベルはT.P.+9.4m前後で、0.7m程度の盛土がなされている。以下には、第1層旧耕土 (層厚0.2～0.3m)、床土である第2層灰褐色礫混シルト (層厚0.2～0.3m) が堆積している。第2層には酸化鉄の集積層が含まれている。

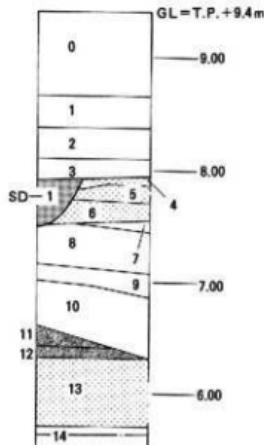
その下に堆積する第3層青灰色粘質シルトが奈良時代前期の遺物包含層で、厚さは0.15~0.2mを測る。この下の第4層淡灰色粗砂の上面が、同時期の造構面である。第4層上面のレベルは、T.P.+8.0m前後を測り、西側ほどやや高くなっている。この第4層は無遺物層である。

以下の第5層から第10層までは、青灰色~灰色の微砂~シルト~粘土やその互層からなる。第6層・第8層には植物遺体が含まれており、第9層は植物遺体のみの層である。これらのうち、第5層から第8層までにはほとんど遺物が含まれず、第9層と第10層から古墳時代中期の遺物がごくわずか出土した程度である。

その下に堆積する第11層暗灰色疎混粘質土（層厚0~0.2m）と第12層暗灰色疎混砂質土（層厚0~0.1m）が、古墳時代中期前半の土器類を多量に含む遺物包含層である。これらの層は、調査区の南東から北西に向かって下がっており、北西隅では検出されていない。第11層上面のレベル高は、南東がT.P.+6.7m、北西でT.P.+6.2mを測る。

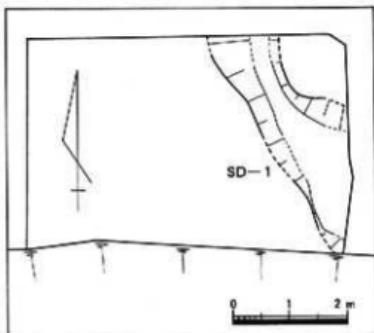
第13層黄灰色粗砂と青灰色微砂互層（層厚0.6m以上）は植物遺体を縞状に含んでおり、この層上面も北西方向へ落ち込んでいる。第13層上面のレベルは、南東がT.P.+6.4~6.5m、北西がT.P.+6.2m前後である。

最下に堆積する第14層灰褐色粘土は、厚さ0.1mまでを確認した。



- 第1層 旧耕土
- 第2層 淡灰色微砂シルト（礫化鉄集塊を含む）
- 第3層 青灰色粘質シルト
- 第4層 流灰色粗砂
- 第5層 青灰色微砂とシルトの互層
- 第6層 青灰色微砂（植物遺体層含む）
- 第7層 青灰色粘土（青灰色微砂のブロック混じり）
- 第8層 灰色粘土（植物遺体を点々と含む）
- 第9層 單色褐色粘土（植物遺体層）
- 第10層 灰色粘土（粘性高い）
- 第11層 單色疎混粘質土
- 第12層 單色疎混砂質土
- 第13層 黄灰色粗砂と青灰色微砂の互層（植物遺体層を縞状に含む）
- 第14層 灰褐色粘土

第2図 柱状図



第3図 第4層上面平面図 (S=1/100)

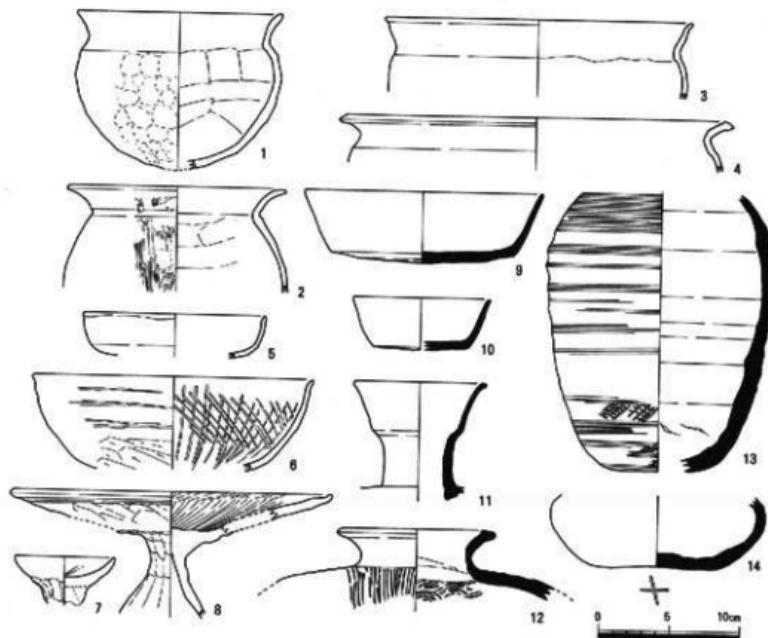
## 2) 検出遺構と出土遺物

第4層上面で、奈良時代前期の溝1条（SD-1）を検出した。また、第11層・第12層からは、古墳時代中期前半の遺物が多量に出土した。

## 溝SD-1（第3図）

SD-1は、調査区の北西隅にあり、南東から北西方向の流路をもつ。検出長約4.5m・検出幅約0.8~1.6m・深さ約0.4mを測る断面U字形の溝である。内部堆積土は、上から青灰色疊混粘土～灰色疊混粘質シルトとなっている。

遺物は、溝の肩から底にかけて多く出土している。これらは奈良時代前半のもので、器種には、土師器甕（1~4）・杯（5）・鉢（6）・高杯（7・8）、須恵器杯（9・10）・長頸壺（11）・横瓶（12）・甕（13）・壺（14）などがある。



第4図 SD-1出土遺物実測図 (S=1/4)

#### SD-1 出土遺物（第4図）

土師器の壺（1）は、球形の体部をもつもので、外面の体部には指押えの痕跡が顕著に認められ、口縁部との境には強いヨコナデによる鋭い稜線が走る。（2）には縦位のハケ調整がなされる。（3・4）は、ともに口径20cmを超える大型のもので、体部の指押えと口縁部の強いヨコナデによって調整されるものである。杯（5）は浅い半球形を呈し、ナデ・ヨコナデ調整がなされる。鉢（6）は深い半球形を呈し、外面はヘラケズリ成形の後粗い横方向のヘラミガキ、内面には2段のヘラミガキによる放射状の暗文が施されている。高杯（7）は手づくね成形の小型品である。（8）は杯部の内面にヘラミガキによる放射状の暗文が施されており、杯部と脚部の接合部は未調整のままで、内面に比して外面は粗雑なつくりである。

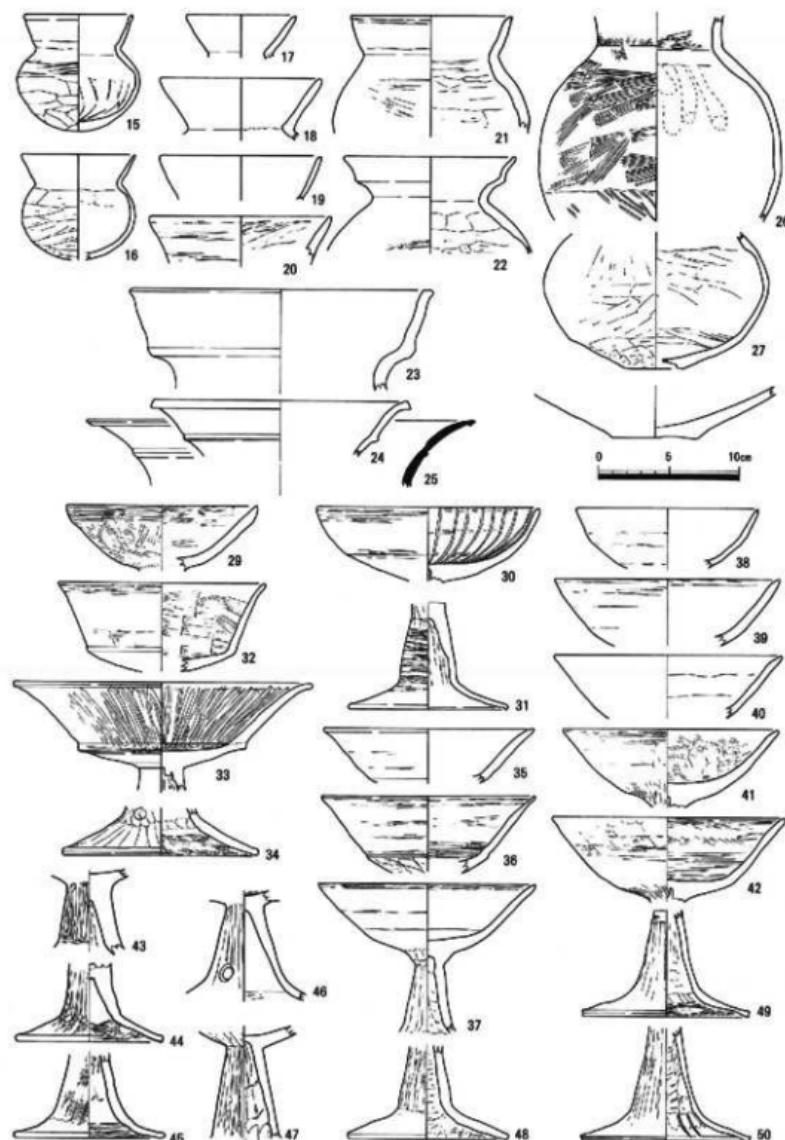
須恵器の杯（9・10）は、ともに外面の底部はヘラ切りの後未調整で、とくに（10）の底面には「ワラ」などの植物繊維の圧痕が残っている。長頸壺（11）は、内面の屈曲部のひび割れが著しく、口縁部に自然軋が付着している。横瓶（12）の外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで成形されている。壺（13）は長胴の俊形を呈する体部のみ遺存するもので、外面は格子状タタキの後、カキ目で調整されている。壺（14）は偏平な体部のみ遺存するもので、底の外面に「×」印のヘラ描き記号文が施されている。

#### 第11層・第12層出土遺物（第5図・第6図）

第11層・第12層からは、コンテナ箱に3箱分の遺物が出土している。そのうち図示したものは、第5図・第6図（15～84）の70点である。器種には、小型壺（15～21）、複合口縁壺（22・23）、広口壺（24・25）、壺の体底部（26～28）、高杯（29～50）、壺（51～67・70～84）、鉢底部（68・69）がある。これらのほとんどは、いわゆる「V様式」の系譜を引くものや「布留式」の土器であるが、中に須恵器の広口壺（25）が1点含まれている。

小型壺には、口径が7.6～8.0cmのもの（15～17）と、12cm前後のもの（18～21）がある。これらは、精製の器種の中ではやや簡略なつくりのもので、体部が遺存するものには、ヘラケズリの痕跡が認められる。複合口縁壺のうち（22）は口径10.0cmの小型品、（23）は大型のものである。広口壺（24）と（25）は、大きさの差、十師器（24）と須恵器（25）の違いはあるものの、大きく開く口縁部の中位に突帯を巡らせるもので、その形態は、相似形といえる。壺体部（26）は、体部下半に接合痕が顕著に認められ、接合部より上部はハケ調整、下部は左上がりタタキで成形されるもので、いわゆる「V様式壺」の底部と同じ形をしている。壺底部（27・28）はともに底部から大きく開いて体部に至るもので、下半にはヘラケズリがなされている。（27）は底部の裏面が輪状に窪むもので、この裏面にまでヘラケズリが及んでいる。

高杯の杯部には、椀形のもの（29・30・35～42）と有段のもの（32・33）がある。椀形高杯のうち、（29）は粗いハケ調整がなされ、粗雑なつくりである。（30）はほぼ半球形を呈するも



第5図 第11層・第12層出土遺物実測図-1 (S=1/4)

ので、内面には放射状のヘラミガキが暗文状に施されている。その他の杯部（35～42）は、やや平坦な杯底部をもつもので、杯底部と口縁部との境にぶい稜線をもつもの（35～37）ともたないもの（38～42）がある。有段高杯（32）は小型で、（29）のように粗雑なハケ調整がなされている。（33）は大型で、密なヘラミガキ調整を主体とするものである。脚部（31）は横方向のヘラミガキが施される精緻なもので、椀形高杯（30）のタイプの脚であろう。太目で短い脚部（34・43～45）には縦方向の粗めのヘラミガキが行われており、有段高杯の脚部と思われる。丈高の脚部（48～50）は硬質の焼き上がりで、柱状部の内面にヘラケズリが行われる椀形高杯の脚である。これらのうち（49）には「-」、（50）には「=」のヘラ描き記号文が、裾部内面に施されている。

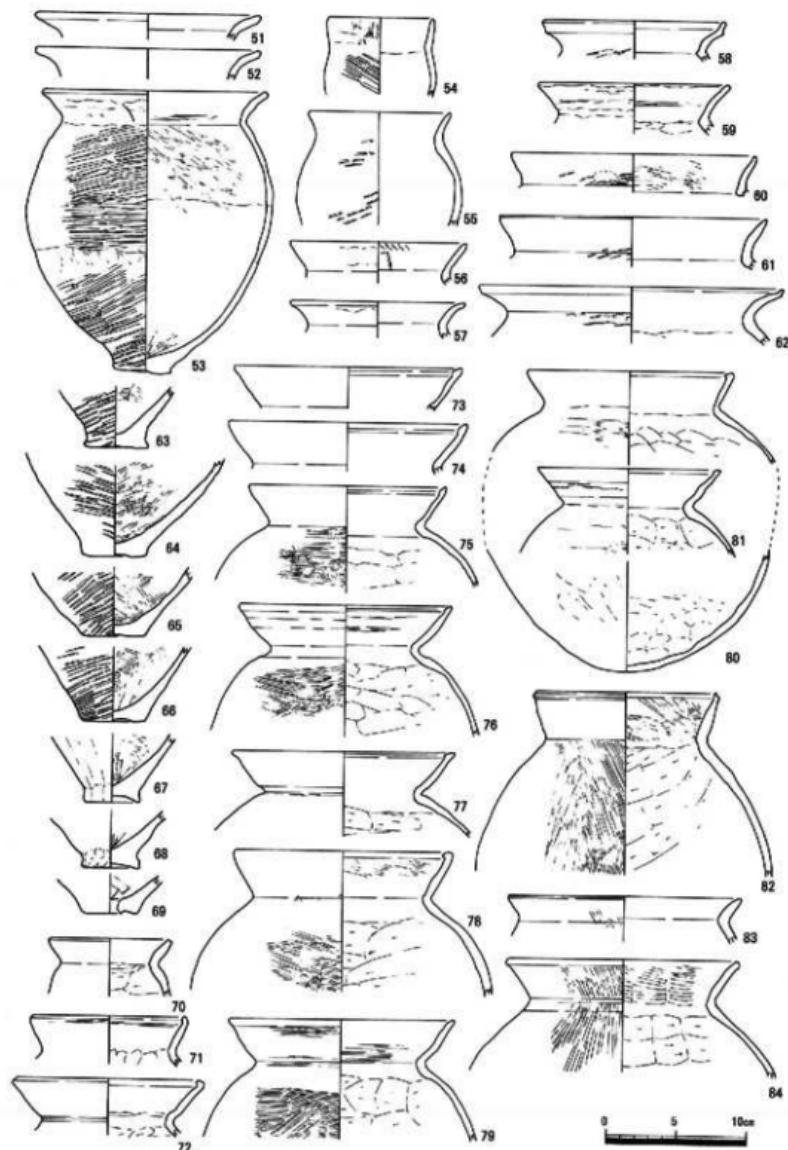
甕には、いわゆる「V様式」系の粗いタタキが施されるもの（51～67）、布留式甕（70～81）のほか、縦位のハケ調整が行われるもの（82～84）がある。V様式系の甕に褐色系の色調を示すものが多いのに比し、布留式甕には、橙色・灰色系の色調を示すものが多い。

V様式系の甕（52）には、分割成形時の接合痕が顯著に残っている。（54・55）はともに小型で粗製の甕、その他は口縁部付近のみの小破片であるが、（58・60・62）の体部内面には、ヘラケズリが行われているようである。底部には、突出する上げ底（63・64・67）、わずかに突出する平底（65）、突出しない輪台状（66）がある。（68・69）はV様式系の鉢のもので、（69）には底面中央に焼成前の孔が穿たれている。布留式甕のうち（70・71）は小型で粗製、（72～81）が通有の布留式甕である。口縁端部は肥厚して内傾する面を持つものがほとんどであるが、外傾する面をもつもの（72）、著しく肥厚するもの（77）、内に丸く巻き込むもの（78）、尖りぎみに終わるもの（79）、水平な面をもつもの（81）など、さまざまな形態が見られる。その他の甕（82～84）は縦位のハケ調整がなされるものである。（82）には細かいハケが用いられており、外傾する口縁部から内傾する端部に至るもので、体部は長胴形を呈する可能性がある。（83・84）には粗いハケが用いられ、口縁部は「く」の字形に屈曲する。

#### 4まとめ

今回の調査では、上層では奈良時代の遺構（SD-1）が検出され、当該時期のまとまった遺物が認められた。また、下層では、古墳時代中期初頭の良好な遺物包含層が検出された。

当遺跡周辺では、昭和58年度に行われた第1次調査（T1地点）で、奈良時代の遺構・遺物が検出されており、当該時期の集落が今回の調査地点付近まで広がることが明らかになった。また、下層の遺物包含層からの出土品は、第2次調査地の第2区（T3地点）から出土した遺物と時期的につながるものと考えられる（本書II 第1図・第1表参照）。



第6図 第11層・第12層出土遺物一2

## 5) 出土遺物類聚表

番号	器種・部位	法量(cm)	色調・胎土・焼成	特徴
1	土師器 裏	口 径 14.5 最大径 14.6 器 高 11.2	暗灰褐色 胎土密 焼成良好	(外)指押さえ、口縁部強いヨコナデ (内)板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ ・外面に焼付着
	口縁～体部			(外)指押さえ後継ハケ、口縁部ヨコナデ (内)板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ
2	土師器 裏	口 径 15.2 最大径 16.0	暗灰褐色～暗褐色 胎土密 焼成良好	(外)指押さえ後継ハケ、口縁部ヨコナデ (内)板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ
	口縁～体部			
3	土師器 大型裏	口 径 21.7	淡灰褐色 胎土密 焼成良好	(外)指押さえ、口縁部ヨコナデ (内)板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ
	口縁～体部			
4	土師器 大型裏	口 径 27.0	淡灰褐色 胎土密 焼成良好	(外)指押さえ、口縁部ヨコナデ (内)ナデ、口縁部ヨコナデ ・内面に厚く焼付着
	口縁～体部			
5	土師器 杯	口 径 12.8	淡灰褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ナデ、口縁部ヨコナデ (内)ヨコナデ
	口縁～体部			
6	土師器 鉢	口 径 20.0	淡茶褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘラケズリ・ナデ後横ヘラミガキ(粗) (内)ナデ後横文状ヘラミガキ(放射状)
	口縁～体部			
7	土師器 小型高杯 杯部	口 径 7.0 現存高 3.4	淡灰褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)杯部ナデ (内)ヨコナデ ・手づね感影
8	土師器 高杯 杯～柱状部	口 径 22.7 現存高 (8.8)	淡灰褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)指押さえ、ヘラナデ後口縁部ヨコナデ、接合部未調整 (内)ヨコナデ後端文状ヘラミガキ(放射状)
9	須恵器 杯身	口 径 9.7 器 高 3.6	暗灰青色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘア切り後底面未調整、体部は回転ナデ (内)回転ナデ ・外底面に薙などの圧痕残る
	口縁～体部			
10	須恵器 杯身	口 径 17.0 器 高 5.0	淡灰色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘア切り後底面未調整、体部は回転ナデ (内)回転ナデ
	口縁～体部			
11	須恵器 長甕	口 径 9.2	淡灰青色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)回転ナデ (内)回転ナデ ・内面側面部ひび割れる、口縁部に自然 付着
	口縁～頭部			
12	須恵器 横甕	口径(長) 9.5 (短) 8.8	暗青色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)平行タタキ、口縁部回転ナデ (内)同心円タタキ、口縁部回転ナデ
	口縁～体部			
13	須恵器 要	成人高 16.1 現存高 19.6	灰青～暗灰青色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)格子状タタキ後回転カキ目 (内)回転ナデ、底部ひび割れる
	体～底部			
14	須恵器 盃	最大径 15.2 現存高 5.2	淡灰色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘア切り後底面のみ静止ナデ、回転ナデ (内)回転ナデ ・外底部にヘラ描き記号文「×」
	体～底部			
15	土師器 小型壺	口 径 7.6 最大径 8.7	橙～黄褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ (内)口縁部ヨコナデ ・外側部にヘラ描き記号文「×」
	口縁～底部	器 高 8.3		
16	土師器 小型壺	口 径 8.0 口縁～底部	にいむし～黄褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヘケ状工具によるナデ後ヨコナデ (内)ヘケ状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ ・外表面に焼付着・表皮剥離
		器 高 9.5		
17	土師器 小型壺 口縁部	口 径 7.7	にいむし～黄褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)体部ナデ、口縁部ヨコナデ
18	土師器 小型壺	口 径 11.5 口縁部	にいむし～黄褐色 (断)灰褐色 胎土密 胎土密、焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ナデ後ヨコナデ
		器 高		
19	土師器 小型壺	口 径 11.5	淡灰褐色～淡褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ハケ状工具によるナデ後ヨコナデ (内)ヨコナデ
	口縁部			
20	土師器 小型壺	口 径 12.9	にいむし～黄褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ハケ状工具によるナデ後ヨコナデ (内)ヨコナデ ・外面に焼付着
	口縁部			
21	土師器 小型壺	口 径 11.5 口縁部	にいむし～黄褐色 胎土密 胎土密 焼成良好	(外)ハケ状工具によるナデ後ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ ・外面に焼付着
		器 高 14.0		

番号	器種・部位	法量(cm)	色調・胎土・焼成	特徴
22	土師器 複合口縁壺 口縁・体部	口 径 10.0	にぶい褐~橙色 胎土密 焼成良好	(外)横ハケ後口縁部・肩部ヨコナデ (内)横ヘラケズリ後ナデ、ヨコナデ
23	土師器 複合口縁壺 口縁部	口 径 21.5	淡橙色 胎土密 焼成良好	(外) (内)ヨコナデ
24	土師器 複合口縁壺 口縁部	口 径 17.1	にぶい橙色 胎土密 焼成良好	(外) (内)ヨコナデ
25	須恵器 複合口縁壺 口縁部	口 径 27.7	灰色(器内赤灰色) 胎土密 焼成良好・堅樋	(外) (内)回転ナデ
26	V様式系 壺 頭~体部	最大径 17.3 現存高 14.5	灰褐色 胎土粗 焼成良好	(外)底面部にしりタキ、体部横ハケ、頸部縦ハケ (内)体部指押さえナデ、颈部横ハケ ・分割成型(3分割)の接合部顯著、黒斑あり
27	V様式系 壺 頭 体~底部	最大径 15.9 底 径 4.2 現存高 9.6	灰黄褐色(器内:に ぶい褐色) 胎土密 焼成良好	(外)ヘラケズリ後上部をへら状工具によるナデ (内)1:手指押さえ後ヘラ状工具によるナデ ・外面全体に盛付着(光沢あり)
28	V様式系 壺 底部	底 径 5.8	暗茶褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヘラケズリ、ナデ? (内)ナデ ・表皮剥離のため調整不明瞭
29	土師器 高杯 杯部	口 径 13.5 現存高 4.7	暗茶褐色~棕褐色 胎土密 焼成	(外)体部斜ハケ、口縁部横ハケ(5~7本/1cm) (内)ヨコナデ? 口縁部横ハケ(8~10本/1cm) ・内面全体表皮剥離のため調整不明瞭
30	土師器 高杯 杯部	口 径 17.5 現存高 5.3	黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)杯底面ナデ、口縁部ヨコナデ (内)ヨコナデ後暗文状ヘラミガキ(放射状)
31	土師器 高杯 脚部	底 径 11.3 現存高 7.5	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)柱状面部取り扱接ヘラミガキ、裾部ヨコナデ (内)柱状部取扱後指押さえナデ、裾部ヨコナデ
32	土師器 高杯 杯部	口 径 14.5 現存高 6.3	淡赤褐色 胎土密 焼成良好	(外)杯底部と口縁部ヘケ後ヨコナデ (内)杯底部ハケ(16本/1cm)、口縁部横ハケ(6~7本/1cm)
33	土師器 高杯 杯~脚柱状部	口 径 21.2 現存高 7.7	淡赤褐色(器内灰 色) 胎土密、焼成良好	(外)杯底部~柱状部ヨコナデ、体部~口縁部放射状ヘラミガキ、 口縁端部ヨコナデ (内)柱状部取扱、杯部放射状ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ
34	土師器 高杯 脚部	底 径 13.8	赤~黄褐色 (器端部黒色) 胎土密 焼成良好	(外)ヘラ状工具によるナデ、裾端部ヨコナデ (内)柱状部指押さえ、裾端部斜めハケ
35	土師器 高杯 杯部	口 径 17.0	淡橙色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ
36	土師器 高杯 杯部	口 径 15.1	にぶい黄褐色 (断)淡褐色 胎土密、焼成良好	(外)杯底部ヘラケズリ、体部~口縁部ヨコナデ (内)ハケ状工具によるナデ、ヨコナデ
37	土師器 高杯 杯部~脚柱状	口 径 15.2	淡赤褐色 (断)淡褐色 胎土密、焼成良好	(外)柱状面部取り、杯底部ナデ、体部~口縁部ヨコナデ (内)柱状部ヘラケズリ、杯底部ナデ、体部~口縁部ヨコナデ
38	土師器 高杯 杯部	口 径 12.9	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好(やや軟)	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ
39	土師器 高杯 杯部	口 径 15.9	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ ・内外面とも杯底部の器壁あれある
40	土師器 高杯 杯部	口 径 16.2	赤褐色~暗褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ ・外面上に繊・炭化物厚く付着
41	土師器 高杯 杯部	口 径 15.6 現存高 5.5	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)放射状ハケ後口縁部~杯底部ヨコナデ (内)放射状ハケ後口縁部~杯底部ヨコナデ
42	土師器 高杯 杯部	口 径 16.3 現存高 6.0	明褐色 胎土密 焼成良好	(外)放射状ハケ後口縁部~杯底部ヨコナデ (内)斜めハケ後口縁部~杯底部ヨコナデ

番号	器種・部位	法量 (cm)	色調・胎土・焼成	特徴
43	土師器 高杯 脚柱状部	—	赤褐色 胎土密 焼成良好	(外)喉ヘラミガキ(粗) (内)杯底密ハケ、ナデ、柱状部シギリ後ナデ
44	土師器 高杯 脚部	幅 径 10.4 現存高 5.6	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヘラミガキ(柱状部粗・脚部密)、端部ヨコナデ (内)柱状部シギリ、瓶部横ハケ(8~9本/cm) ・円孔を3方に穿つ
45	土師器 高杯 脚部	幅 径 11.4 現存高 5.9	赤褐色~灰白色 (内)黒~灰白色 胎土密、焼成良好	(外)瓶ハケ(10本/cm)裾部ヨコナデ (内)柱状部シギリ、指揮さえ、裾部横ハケ(6本/cm) ・円孔を3方に穿つ
46	土師器 高杯 脚柱状部	—	暗褐色 (新)にぶい赤褐色 胎土密、焼成良好	(外)面取り後瓶ヘラミガキ (内)ナデ、ヨコナデ、杯底部放射状ヘラミガキ
47	土師器 高杯 杯底~脚柱状	—	明黄褐色 (新)暗灰色 胎土密、焼成良好	(外)柱状部縦ヘラミガキ、杯底部ヘラケズリ? (内)柱状部シギリ、指揮さえ、杯底部ヨコナデ
48	土師器 高杯 脚部	幅 径 11.4 現存高 6.6	にぶい赤褐色~黄褐色 胎土密、焼成良好	(外)柱状部面取り後ハケ(9~10本/cm)、裾部ヨコナデ (内)柱状部横ヘラケズリ、側部ハケ後指揮さえナデ
49	土師器 高杯 脚部	幅 径 11.7 現存高 7.4	褐色~黄褐色 (新)褐色 胎土密、焼成良好	(外)柱状部面取り、裾部ヨコナデ (内)柱状部横ヘラケズリ、瓶部ハケ(11本/cm) ・瓶内面に「ラ」字記号文「—」
50	土師器 高杯 脚部	幅 径 11.8 現存高 8.1	にぶい赤褐色 胎土密 焼成良好	(外)柱状部面取り、瓶部ヨコナデ (内)横ヘラケズリ、瓶部指揮さえ ・瓶内面にヘラ描き記号文「—」
51	V様式系 甕 口縁部	口 径 16.8	にぶい褐色 胎土やや粗 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ
52	V様式系 甕 口縁部	口 径 15.9	灰褐色 胎土やや粗 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ
53	V様式系 甕 口縁部~底部	口 径 15.5 最大深 17.5 底 径 4.0	黄灰色 (内)底部黒色 胎土密	(外)体部右上がりタキ、接合部ハケによるナデ 口縁部ヨコナデ (内)ハケ後体部下半ナデ、口縁部ヨコナデ
54	V様式系 甕 口縁~体部	口 径 7.4 最大径 8.0	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)体部左上がりタキ、口縁部横ヘケ後ナデ (内)体部ナデ、口縁部ヨコナデ
55	V様式系 甕 口縁~体部	口 径 10.0 最大径 11.8	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)体部左上がりタキ後ナデ、口縁部ヨコナデ (内)体部ナデ、口縁部ヨコナデ
56	V様式系 甕 口縁部	口 径 12.5	淡褐色 胎土やや粗 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)横ハケ後ナデ、ヨコナデ
57	V様式系 甕 口縁部	口 径 12.2	にぶい褐色 胎土やや粗 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ
58	V様式系 甕 口縁~体部	口 径 12.7	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)屈曲部にハケ状工具の圧痕 (内)体部ナデ、口縁部ヨコナデ
59	V様式系 甕 口縁~体部	口 径 13.4	暗褐色~褐色 胎土密 焼成良好	(外)斜めハケ後ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
60	V様式系 甕 口縁部	口 径 17.2	灰褐色 胎土密~やや粗 焼成良好	(外)右上がりタキ、ヨコナデ、屈曲部に指揮さえの圧痕あり (内)体部ヘラケズリ? 口縁部横ハケ
61	V様式系 甕 口縁部	口 径 16.9	淡茶褐色 胎土やや粗 焼成良好	(外)右上がりタキ、ヨコナデ (内)口縁部ヨコナデ
62	V様式系 甕 口縁部	口 径 21.5	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)瓶ハケの後ヨコナデ (内)体部ヘラケズリまたはナデ、口縁部ヨコナデ
63	V様式系 甕 底部	底 径 4.5	にぶい褐色 (内)黒灰色 胎土密、焼成良好	(外)右上がりタキ、底面ナデ (内)ハケ(クモの巣状)

番号	器種・部位	法量(cm)	色調・胎土・焼成	特徴
64	V様式系 壺 底部	底 径 4.6	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)左上がりタタキ、底面ナデ (内)ハケ
65	V様式系 壺 底部	底 径 4.5	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)右上がりタタキ、底側面指揮さえ、底面ナデ (内)ハケ
66	V様式系 壺 底部	底 径 4.3	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)右上がりタタキ、底面ナデ (内)ハケ
67	V様式系 壺 底部	底 径 3.9	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)ナデ、底側面指揮さえ、底面ナデ (内)ハケ
68	V様式系 壺 底部	底 径 3.8	にぶい褐色 胎土密 焼成良好	(外)ナデ、底側面指揮さえ、底面ナデ (内)ナデ?放射状の工具痕見られる
69	V様式系 壺 底部(有孔)	底 径 4.7 孔 径 1.5	明淡褐色 胎土や粗 焼成良好	(外)ナデ (内)ハケ ・底部中央に1孔(焼成前)を有する
70	壺 口縁～体部	口 径 8.2	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
71	布留系 壺 口縁～体部	口 径 10.6	暗褐色～灰褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)体部指揮さえ、口縁部ヨコナデ ・外面に煤付着
72	布留系 壺 口縁～体部	口 径 12.9	にぶい黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
73	布留系 壺 口縁部	口 径 16.0	淡褐色灰色 胎土密 焼成良好	(外)横ハケ後ヨコナデ (内)ヨコナデ
74	布留系 壺 口縁部	口 径 16.8	にぶい橙色 胎土密 焼成良好	(外)横ハケ後ヨコナデ (内)ヨコナデ ・外面に煤付着
75	布留系 壺 口縁～体部	口 径 13.9	褐色(内・断)にぶ い黄褐色 胎土密、焼成良好	(外)体部横ハケ、口縁部ヨコナデ (内)ヘラケズリ、屈曲部指揮さえナデ、口縁部ヨコナデ ・外面に煤付着
76	布留系 壺 口縁～体部	口 径 15.0	淡黄褐色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケ(8本/cm)、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、屈曲部指揮さえナデ、口縁部ヨコナデ ・外面に煤付着
77	布留系 壺 口縁～体部	口 径 15.7	にぶい橙色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケの痕跡、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ ・外面に煤付着
78	布留系 壺 口縁～体部	口 径 15.3	にぶい橙色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケ、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部横ハケ後ヨコナデ ・外面に煤付着
79	布留系 壺 口縁～体部	口 径 15.9	にぶい褐色 (断)一部黒色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケ後斜めハケ、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
80	布留系 壺 口縁～体～底	口 径 14.4 器 高 (21.4)	にぶい橙～褐色 胎土密 焼成良好	(外)底面ナデ、肩部横ハケ、口縁部ヨコナデ (内)体部指揮さえ、口縁部ヨコナデ
81	布留系 壺 口縁～体部	口 径 12.9	にぶい橙色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
82	壺 口縁～体部	口 径 12.6 最大径 21.0	褐灰色 胎土密 焼成良好	(外)体部横ハケ、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部斜めハケ ・外面に煤付着
83	壺 口縁～体部	口 径 16.5	淡灰褐色 胎土や粗～粗 焼成良好	(外)体部横ハケ(粗)、口縁部ヨコナデ (内)体部ヘラケズリ、口縁部斜めハケ ・外面に煤付着
84	壺 口縁～体部	口 径 16.5	淡橙色 胎土密 焼成良	(外)横ハケ(粗)、屈曲部ナデ (内)体部ナデ、口縁部ヨコハケ



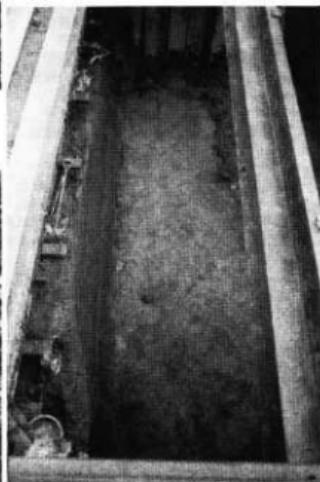
側溝内SD-1遺物出土状況



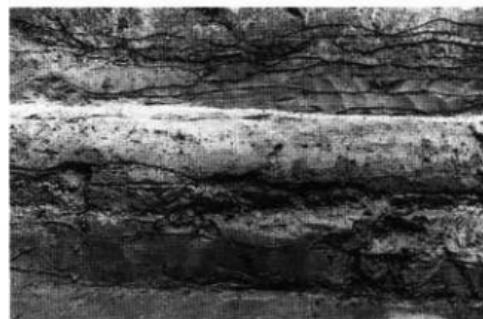
第4層上面（東から）



SD-1南側壁面



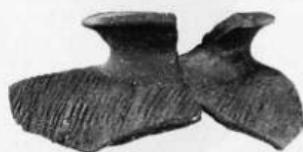
第13層上面（東から）



第9層～第13層堆積状況



11



12



13



14



15



16

SD-1出土遺物



15



29



21



30



32



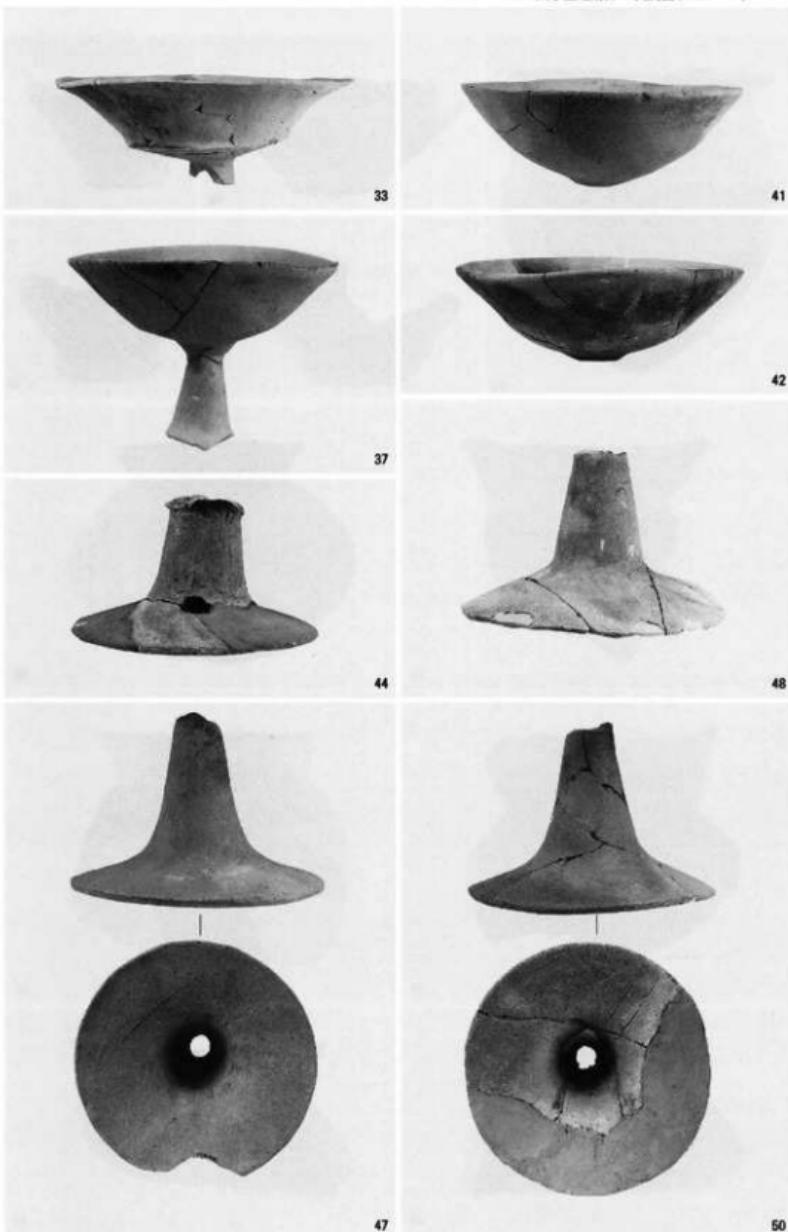
22

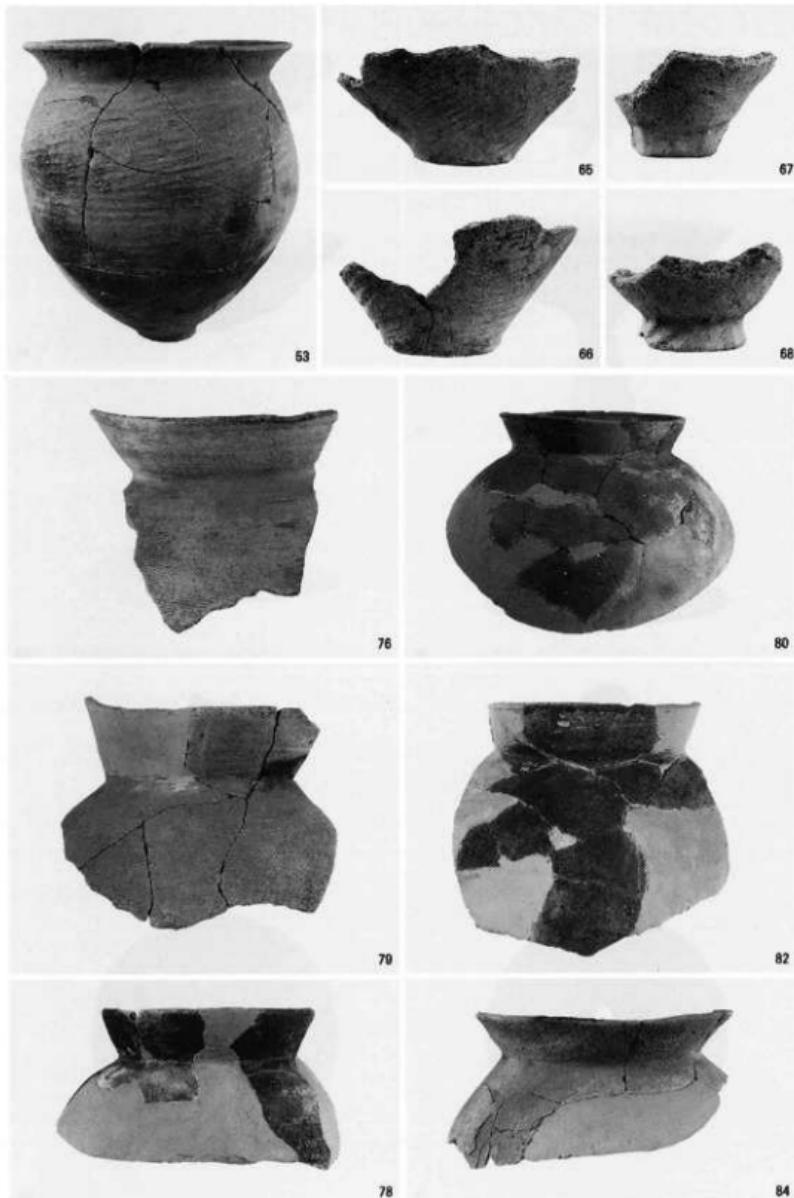


26



27





## VIII 太子堂遺跡第6次調査 (TS94-6)

六 拙

## 例 言

- 1 本書は、八尾市太子堂3・4丁目地内で実施した公共下水道工事（平成6年度 第8工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する太子堂遺跡第6次調査（TS94-6）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理 347-3号 平成6年9月22日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 調査は、平成6年11月24日から平成7年1月13日（実働10日間）にかけて成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は約62.72m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。

## 目 次

1 はじめに.....	99
2 調査の方法と経過 .....	100
3 調査の概要	
1) 1区 .....	101
2) 2区 .....	102
3) 出土遺物 .....	102
4 まとめ .....	103

## VIII 太子堂遺跡第6次調査 (TS94-6)

### 1 はじめに

太子堂遺跡は、八尾市南西部の太子堂3丁目～6丁目・東太子2丁目・南太子堂1丁目～6丁目にその範囲が設定されており、地理的には、旧長瀬川の支流である旧平野川の自然堤防上にあたる。同一の自然堤防上には、東側に植松遺跡、西側に亀井遺跡・竹渕遺跡・加美南遺跡（大阪市）などがあり、当遺跡北側の後背湿地には跡部遺跡が位置している。当遺跡では、これまでに八尾市教育委員会が1件（T2地点 87-152）、当調査研究会が5件（T1・T3～T6地点 第1次調査～第5次調査）の発掘調査を行っている（本書II 第1図・第1表参照）。

まず、昭和58年度に東太子2丁目で行われた第1次調査（TS83-1）では、古墳時代中期～後期の遺物包含層、奈良時代の集落に伴う遺構群、鎌倉時代中期～末期の農耕に伴う鰐溝群などが検出され、多大な成果が得られている（T1地点）。その後、昭和62年度に市教育委員会が太子堂2丁目で行った遺構確認調査（87-152）では、最終ベースとなる埋没河川が形成した自然堤防は認められず、そこより北側に広がる沼沢地状の土層堆積のみが確認された（T2地点）。それ以後、大規模な発掘調査は行われていないが、平成2年度から、公共下水道工事に伴う小規模な発掘調査が当調査研究会によって4件行われている（第2次調査～第5次調査）。

第2次調査は、3か所の立坑（東から1区～3区）について行ったもので、小面積ながらも東西約300mの範囲をカバーしている。1区は第1次調査地（T1地点）の北西角に隣接している地点で、3区は市教育委員会調査地（T2地点）の南西角に隣接している。1区では、奈良時代～中世に相当する土層は確認できたものの、明確な遺構や埋没河川の堆積状況などは認められなかった。一方、中央・西側の2区・3区では、埋没河川の上面で古墳時代前期（布留式新相）の遺構および多量の土器類が検出され、3区ではそれらに加えて一時期遡る古墳時代前期初頭（庄内式新相～布留式古相）の井戸も検出されている（T3地点）。

次いで行われた第3次調査（本書VII）では、奈良時代前半の溝と古墳時代中期の多量の土器が出土している。ベースとなる層は、第2次調査地同様、埋没河川の可能性のあるシルト～粗砂層である。この調査地は、第2次調査-3区から西140mの地点にあたる（T4地点）。

第4次調査（TS92-4）は、第2次調査-2区の南隣で行われたもので、第2次調査と同様、シルト～粗砂の上面で、古墳時代前期の遺構・遺物が検出されている（T5地点）。

第5次調査（TS93-5）は、第2次調査-1区の南180mに位置しており、ここでは奈良時代の土器や遺構面に相当する土層が確認されたが、それ以下では、沼沢地状の土層堆積が見られ、これまでの調査地で見られた遺構ベースとなる埋没河川は認められなかった（T6地点）。

## 2 調査の方法と経過

今回報告の発掘調査は、公共下水道工事（平成6年度第8工区）に伴うもので、当調査研究会が太子堂跡地内で実施した6度目の発掘調査（TS94-6）にあたる。

調査は2か所の立坑について行ったもので、南側を1区、北側を2区と呼んだ。2区は市教委調査地および第2次調査-3区の南約20m・第3次調査地の東約140mに位置しており、1区はそこからさらに南75mに位置する。

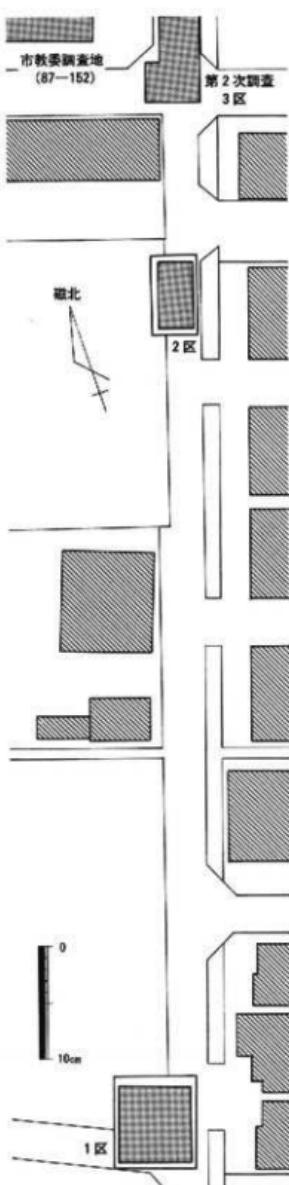
調査にあたっては、工事の進捗状況に合わせて機械・人力を併用して掘削し、必要に応じて随時記録作業を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。

調査期間は1区が平成6年11月24日から12月13日まで、2区が11月29日から平成7年1月13日まで、調査面積は矢板内のみで1区が約40m<sup>2</sup>、2区が約17m<sup>2</sup>である。

11月24日・25日、1区の鋼矢板打設および覆工のための機械掘削に立ち会った。続けて11月29日・30日に2区の機械掘削に立ち会った。掘削深度は1区・2区とともに地表下0.6～0.8mまでである。鋼矢板打設・覆工などの作業を終えた後、12月8日から1区の調査を開始し、1区の調査終了後、2区の調査を行うこととした。

1区の1次掘削の深さは地表下1.7～2.0mまでである。土層観察用のセクションは東側に残して掘削を行った。続いて1段目の支保工設置作業に移行し、12月12日から2次掘削を行うこととなった。

2次掘削の予定の深さは1次掘削から1.2～1.3m（地表下3.2～3.3m）までである。最下の



第1図 調査区設定図 (S=1/500)

粗砂層で上器片1点(1)が認められたが、遺構は認められなかつたため、土層の観察のみ行い、工事による掘削を続けることにした。以後2段日の支保工が設置され、12月13日に最終掘削を行うことになった。

最終掘削の深さは2次掘削から1.1~1.2m(地表下4.4~4.5m)までである。ここでは土層観察用のセクションは西側に残して掘削を続けたが、粗砂層以下には粘土・シルト・植物遺体などがあり、最下で含水量の多い粗砂に至った。掘削終了後これまで同様、記録作業を行い、1区の調査を終了した。

12月16日、2区の1次掘削を開始した。深さは地表下1.9m程度である。2区では土層観察用のセクションはすべて西側に残した。1段日の支保工設置後、平成7年1月12日から2次掘削を行った。

2次掘削の深さは、1次掘削から約2.0m(地表下3.8m)までである。地表下2.2m(T.P.+7.0m前後の粗砂層上面で、古墳時代前期の上器が少量(2~4)出土したが、遺構は認められなかつたため、予定の深さまでの掘削を行つた。2段目支保工の設置後、翌1月13日に最終掘削を行うことになった。

最終掘削の深さは2次掘削から0.8m(地表下4.5m)前後である。ここでも1区同様の土層堆積が見られ、最下で含水量の多い粗砂に至つた。掘削終了後記録作業を行い、2区の調査を終え、すべての調査を終了した。

### 3 調査の概要

#### 1) 1区

1区の地表面のレベル高は、T.P.+9.2~9.3m程度である。東側・南側の道路下では、そのほとんどが地表下1.2~1.4m程度まで搅乱されていたが、北西部では厚さ0.6m程度の盛土以下に、101層旧耕土・102層床土が部分的に遺存していた。101層上面のレベルはT.P.+8.6m程度である。

103層灰色粗砂は洪水層または河川流出層で、含水量が多く、層厚0.4~0.5mを測る。以下には水田耕土・床上の可能性のある104層暗灰色粘土・105層灰色微砂混じり粘土・106層灰黑色粘土・107層暗青灰色微砂混じり粘土が堆積する。104層上面には波状痕跡があり、上面のレベル高はT.P.+7.7~7.8mを指す。105層・106層には、植物遺体が少數含まれる。

108層灰色微砂も含水量の多い土層で、以下には109層灰色粘土と植物遺体を含む褐色粘質シルトの互層、110層・111層暗灰褐色疊混じり粘土、112層青灰色~灰色粘質シルト~疊等の互層と不安定な土層堆積が続き、再び含水量の多い113層灰色粗砂~疊に至る。

113層は河川内堆積土で、下部には青灰色シルト・暗褐色粘質シルト・植物遺体の互層がみ

られる。層厚は0.8~0.9m、底のレベルは、T.P.+5.5~5.6mを測る。壺（1）はこの層上部から出土した。古墳時代前期に比定されるものと考えられる。

それ以下には114層暗灰色混じり粘土・115層灰黑色粘土・116層灰黑色粘土と青灰色粘土の互層・117層青灰色粘土・118層植物遺体を多量に含む黒灰色粘土がほぼ水平に堆積し、119層青灰色シルト～粗砂に至る。119層もまた含水量の多い洪水層・河川流出土で、層厚は0.15m程度まで確認した。上面のレベルはT.P.+4.7~4.8m、地表下約4.5mに達する。

## 2) 2区

2区の地表面のレベル高はT.P.+9.2m前後である。1区同様地表下0.6mで201層旧耕土に至る。201層は層厚0.2m前後、上面のレベル高はT.P.+8.5~8.6mで、北側がやや高い。

旧耕土以下には、中近世の耕作土・床土の可能性のある202層暗灰色混じりシルト・203層灰褐色粗砂混じり粘質シルト・204層灰褐色粘土・205層明褐色粘土がある。これらには、土師器などの小破片が少量含まれており、203層には炭化物・酸化鉄、204・205層にはマンガン斑紋が見られる。次いで、洪水層の可能性のある206層灰褐色粗砂・207層褐色粗砂・208層灰色微砂があり、再び平安時代後半の水田耕作土の可能性のある209層青灰色粘土に至る。209層の上面レベルはT.P.+7.6m前後、上面には波状痕跡が顯著に残る。

その下には、含水量が多く植物遺体を含む210層暗灰色微砂混じり粘質シルト・211層褐色粘質シルトと青灰色微砂の互層があり、212層の暗灰～白灰色粗砂に至る。212層には青灰色シルト・暗褐色粘質シルト・植物遺体の互層が併存している。212層の層厚1.0~1.2m、底のレベルはT.P.+5.95mを測る。この層の上部から、古墳時代前期の土器（2~4）が出土した。

それ以下には、213層植物遺体を含む暗灰褐色粘土・214層暗灰褐色混じり粘土・215層暗灰色微砂混じり粘質シルト・216層暗青灰色粘質シルトと青灰色微砂の互層・217層青灰色粘質シルトと黒灰色粘土の互層・218層灰黑色粘土（植物遺体含む）・219層暗青灰色粘土・220層黒灰色混じり粘土・221層淡青灰色粘質シルトがほぼ水平に堆積し、河川内堆積土である222層青灰色微砂～白灰色粗砂に至る。222層中には、転落層と考えられる黒灰色粗砂混じり粘土がある。222層上面のレベル高はT.P.+5.3m前後、深さは0.6m以上である。

## 3) 出土遺物

1区・2区とともに埋没河川内から、古墳時代前期頃の遺物が、少量出土している。壺（1）は器表面の摩耗が著しいが、ヘラミガキの痕跡や粘土紐接合痕があり、口縁端部は強いヨコナデによって鋭く仕上げられている。小型壺（2）・小型器台（3）は精製の器種である。（2）は口縁の基部以下を欠損し、（3）は脚台部との接合部から剥離している。甕（4）は大形の器種で、外面には煤が厚く付着している。太筋タタキの後粗い継ぎ位のハケ調整がなされており、内面のハケ調整には粗いものと、細かいものの2種がみられる。

## 4 まとめ

今回の調査地は、小面積であったにもかかわらず、地表下4.5mという深層部までの断面観察ができ、遺跡の動向を知るうえで非常に有意義なものであった。

1区では旧耕土以下19層まで、2区では24層までの土層を確認した。遺構ベースの可能性のある土層は認められなかったが、両調査区で埋没水田の可能性のある土層(104~107・209層)や、複数の時期の埋没河川または洪水層、沼沢地状の土層堆積などを検出し、これまでの周辺の調査結果同様、当地では河川の氾濫・漏水・退水が幾度も繰り返されたことがわかる。

最上層の砂層(103・206~208層)は、跡部遺跡A3・A4・A7・A23地点、植松遺跡U3地点などの近隣での調査結果から、旧平野川の氾濫に起因するものと考えられ、南側の1区の方が流路に近いためか、厚く堆積している。同時期の砂層はA17・A22地点でも認められており、平安時代後半以降に比定できる。

2枚目の砂層(113・212層)は、T3~T5地点で見られた古墳時代の遺構ベースに相当する層であるが、当調査地では遺構は認められなかった。これも当地が河川の本流により近かつたため、生活に不適な土地であったためかと考えられる。また、ここから出土した土器類は古墳時代前期のもので、同時期の近隣の集落からの流出遺物であろう。

最下の砂層は、A17・A22地点で確認した砂層とほぼ同時期の弥生時代中期以前のものと思われ、当太子堂遺跡・跡部遺跡の基盤層をなすものであろう。

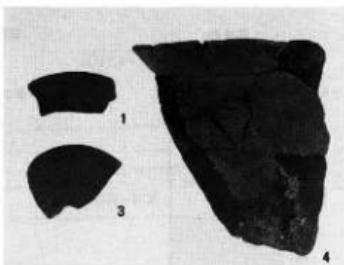
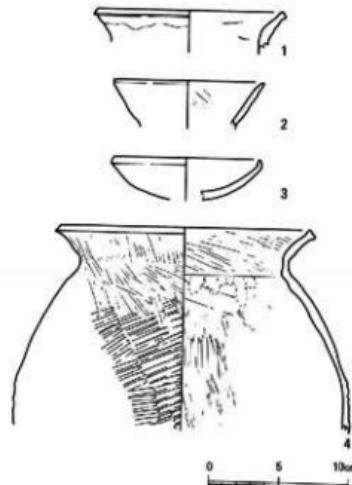


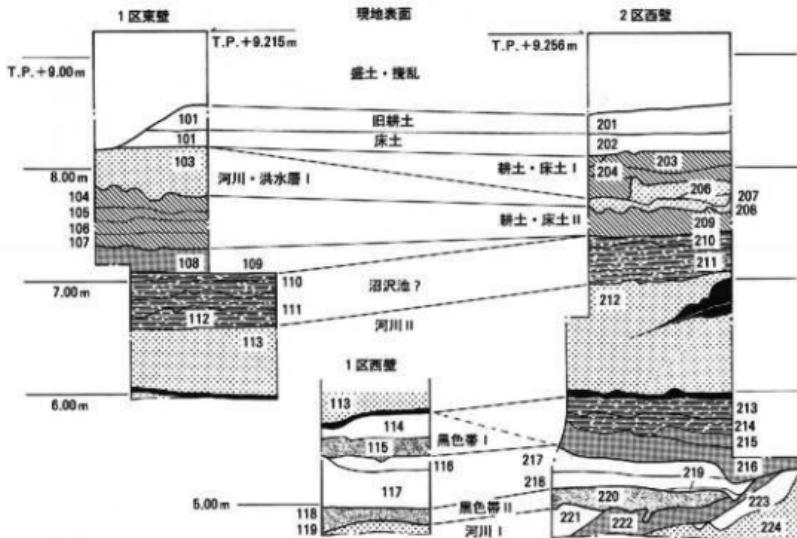
写真1 1区(1)、2区(3・4)出土遺物



第2図 出土遺物実測図(S-1/4)

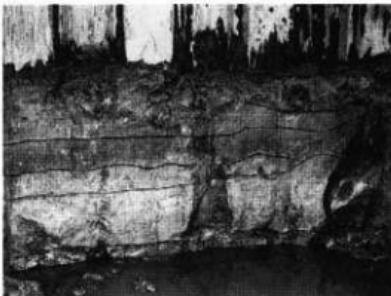
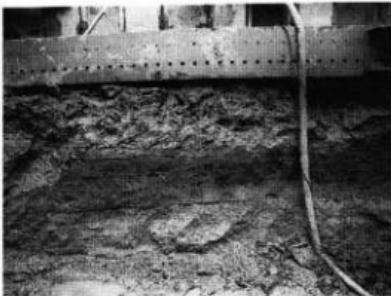
### 出土遺物観測表

番号	器種 法寸 山地底 号	色調 地質 地成	形態・調整等の特徴
1	口径 13.0 1区 113層 良好	赤褐色 やや粗	直立気味の瓶底から紙上方へ開く口部、底部は外傾する面をもつ ヘラミガキ、ヨコナヂ
2	口径 10.6 2区 212層 良好	淡褐色 やや粗	内湾気味の瓶底から開く口部、底部は薄く尖る ヘケ、ヨコナヂ
3	小型器台 口径 10.3 2区 212層 良好	淡灰褐色 やや粗	小さい半球形の受け部、口縁端部は上方へ立ち上がる ナヂ、ヨコナヂ
4	口径 10.3 2区 212層 良好	淡褐色 やや粗	張りの少ない体部から屈曲外反する 口縁部、底部は外傾する面をもつ 指揮さえ、太断タキ、ハケ(粗・細)



1区	
101層	黒灰色礫混粘質シルト
102層	青灰色礫混粘質シルト
103層	灰色中砂
104層	暗灰色粘土(粘性強)
105層	灰色微砂混粘土(植物遺体少量含む)
106層	灰黑色粘土
107層	暗青灰色微砂混粘土
108層	灰色微砂
109層	灰色粘土と褐色粘質シルト(植物遺体)の互層
110層	暗灰色礫混粘土(僅ごく少量、植物遺体含む)
111層	暗灰色礫混粘土(既少量含む)
112層	青灰色微砂と灰色粘質シルト(植物遺体)・ 青灰色シルト・暗青灰色粗砂一層の互層
113層	白灰色粗砂～礁(暗褐色粘質シルト・植物遺体・ 青灰色シルトの互層挟む)
114層	暗灰色礫混粘土(粘性強)
115層	灰黑色粘土(粘性強)
116層	青灰色粘土(灰黑色粘土含む)
117層	青灰色シルト混粘土
118層	灰黑色粘土(粘性強、植物遺体含む)
119層	青灰色シルト～灰色粗砂
2区	
201層	灰色礫混粘質シルト
202層	暗青灰色礫混シルト
203層	灰褐色沙混粘質シルト
204層	灰褐色粘土
205層	明褐色粘土(粘性弱)
206層	灰褐色シルト混粗砂
207層	褐灰色粗砂(硬く締まる)
208層	灰色微砂
209層	灰～青灰色粘土(粘性弱)
210層	暗灰色褐色粘質シルト(植物遺体)
211層	褐色粘質シルト(植物遺体)と青灰色微砂の互層
212層	灰色微砂～粗砂(暗褐色粘質シルト・植物遺体・青 灰色シルトの互層挟む)
213層	暗灰褐色粘土(粘性強、植物遺体含む)
214層	暗灰褐色礫混粘土(粘性強)
215層	暗褐色微砂混粘質シルト
216層	青灰色微砂
217層	青灰色粘質シルト
218層	灰黑色粘土(植物遺体含む)
219層	暗青灰色粘土
220層	灰褐色礫混粘土(粘性強)
221層	青灰色粘質シルト
222層	青灰色微砂
223層	黑灰色粗砂混粘土
224層	白灰色粗砂

第2図 柱状図 (水平S=1/100, 垂直S=1/50)

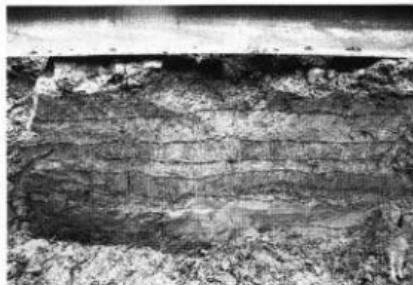




作業風景（1次振削）



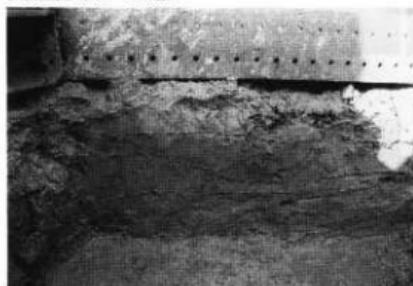
機械振削（3次振削）



西側壁面（201～209層）



西側壁面（216～222層）



西側壁面（209～212層）



調査風景（壁面実測）



西側壁面（212～216層）

# 報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく58						
副書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告58						
I 跡部遺跡（第10次調査）	II 跡部遺跡（第11次調査）						
IV 跡部遺跡（第15次調査）	V 跡部遺跡（第17次調査）						
VII 太子堂遺跡（第3次調査）	VI 太子堂遺跡（第6次調査）						
番号							
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	58						
編集者名	I 西村公助 II・IV・V・VII 成海佳子 III 関田清一 VI 原田昌則 VII 藤田道子・成海佳子						
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581 大阪府八尾市幸町4-58-2						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (a)	調査原因
市町村	遺跡						
あとべ 跡部遺跡 (第10次調査)	やおしかすがちょう 八尾市春日町3丁目地内	27212	34度 36分 47秒	135度 35分 37秒	19930119～ 19930215	28.0	公共下水道工事に 伴う発掘調査
あとべ 跡部遺跡 (第11次調査)	やおしひがしたいし 八尾市東太子1丁目106	27212	34度 36分 47秒	135度 35分 38秒	19930517～ 19930714	1,215.0	屋内運動場増改築 に伴う発掘調査
あとべ 跡部遺跡 (第15次調査)	やおしかすがちょう 八尾市春日町1丁目2～4番地 先	27212	34度 36分 54秒	135度 35分 39秒	19931213～ 19940127	34.0	公共下水道工事に 伴う発掘調査
あとべ 跡部遺跡 (第16次調査)	やおしあとべほんまち 八尾市跡部本町1丁目地内	27212	34度 36分 47秒	135度 35分 19秒	19940912～ 19941013	43.52	公共下水道工事に 伴う発掘調査
あとべ 跡部遺跡 (第17次調査)	やおしたいじどう 八尾市太子1丁目地内	27212	34度 36分 53秒	135度 35分 29秒	19940916～ 19941108	43.52	公共下水道工事に 伴う発掘調査
あとべ 跡部遺跡 (第18次調査)	やおしあとべほんまち 八尾市跡部本町3丁目地内	27212	34度 36分 50秒	135度 35分 8秒	19940922～ 19941027	40.0	公共下水道工事に 伴う発掘調査
たいじどう 太子堂遺跡 (第3次調査)	やおしたいじどう 八尾市太子堂2・3丁目地内	27212	34度 36分 48秒	135度 35分 19秒	19920201～ 19920229	56.0	公共下水道工事に 伴う発掘調査
たいじどう 太子堂遺跡 (第6次調査)	やおしたいじどう 八尾市太子堂3・4丁目	27212	34度 36分 40秒	135度 35分 24秒	19941124～ 19950113	62.72	公共下水道工事に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
跡部遺跡 第10次調査	集落	弥生時代前期～末 後期後半	溝4	弥生土器（I～ V様式）、網織			
跡部遺跡 第11次調査	集落	弥生時代中期前半 ～後期、古墳時代 前期、平安時代	戲球塚1・小穴1 大塚3・溝1、流路 1・壠段川1	弥生土器（B～ V様式）、庄内 式土器、布留式			
跡部遺跡 第15次調査	集落	縄文時代晚期、弥 生時代初期～中期、 古墳時代前期	流路、土坑、 埋没河川、護 岸坑	弥生土器（V様 式）、布留式土 器、鐵石			
跡部遺跡 第16次調査	集落	弥生時代中期以前、 古墳時代後期、平 安時代	埋没河川・洪 水層				
跡部遺跡 第17次調査	集落	弥生時代前期	小穴1・落込み 1	弥生土器（I様 式）			
跡部遺跡 第18次調査	集落	古墳時代前期～奈 良時代後期	埋没河川1	布留式土器、土 器			
太子堂遺跡 第3次調査	集落	古墳時代中期前半 奈良時代前期	溝1	布留式土器、土 器、須恵器			
太子堂遺跡 第6次調査	集落	弥生時代中期前半、 古墳時代後期、平 安時代	埋没河川・洪 水層	庄内～布留式土 器			

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告58

- I 跡部遺跡（第10次調査） II 跡部遺跡（第11次調査）  
III 跡部遺跡（第15次調査） IV 跡部遺跡（第16次調査）  
V 跡部遺跡（第17次調査） VI 跡部遺跡（第18次調査）  
VII 太子堂遺跡（第3次調査） VIII 太子堂遺跡（第6次調査）

発行 1997年3月31日

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581 大阪府八尾市幸町4丁目58-2  
TEL・FAX 0729-94-4700

印刷 明新印刷株式会社  
表紙 レザック66 <70kg>  
本文 ニューア G <70kg>  
図版 ニューア G <70kg>

